学部長裁量経費　平成 25 年度　教員養成学部フレンドシップ事業　報告書
授業科目名「社会教育演習」

「信大YOU遊(チャンス)未来」の教師教育学研究　第20集

20th Annual Report on Shinshu University Project "You-you Chance" in practice (2013)
Pedagogical Research for Teachers

2014 年（平成 26 年）3 月

信州大学教育学部

夢ある未来を創造するために

信州大学教育学部長　平野吉直

第20期「信大YOU遊未来（Chance)」の活動が無事に終了し、一年間の活動を実践記録集として発刊できますことをたいへん嬉しく思います。

この取組は、文部科学省のフレンドシップ事業の一環として平成6年度から行われた「信大YOUサタデー」（7年間）に始まり、「信大YOU遊広場」（2年間)、「信大YOU遊世間」（9年間)、そして、昨年度から「信大YOU遊未来（Chance)」へと進展してきました。20年という長きにわたって継続されてきただけでなく、常にそれまでの実践を振り返り、新しいチャレンジを試みてこられた関係者の皆さんのご努力に、深く敬意を表します。

本年度の「信大YOU遊未来（Chance）」では、新プラザとして「姨捨の棚田」が発足しました。また、「信大YOU遊」発足20年という節目の年に、多くの関係者のご協力のもと、8月に「20周年記念シンポジウム」を開催できました。平成12年に学生たちの開墾作業から始まり、これまで多くの学生、そして地域の子どもたちの心を耕していただいた「信大茂菅ふるさと農場」が、本年度をもって閉場いたしました。3月には第14回「全国フレンドシップ活動in信州」が開催されます。11大学100名の学生が、麻績村、青木村、長野市湯谷の子どもたちと交流するとともに、村長さんはじめ地域の方々と懇談します。この取組は、文部科学省「地（知）の拠点事業（大学COC）」に採択された本学の事業「信州を未来へつなぐ、人材育成と課題解決拠点」（信州アカデミア）の地域志向教育研究支援事業の「教育補助」を受けて実施されるものです。

「信大YOU遊未来（Chance)」は、「子ども」と「地域」をキーワードにしたいくつもの活動が、年間を通して学生の主体的な参画のもとで展開されていることが最大の特徴です。学校教員を目指す本学部の学生にとって、「信大YOU遊未来（Chance)」の企画・運営を通じた地域の方々との交流、そして子どもたちとの直接的な触れ合いは、教師としての実践的指導力の基礎を養う貴重な経験となっているはずです。学生の皆さんには、その大きな学びと成果を今後の社会生活にぜひ役立てていただきたいと願っています。そして、「信大YOU遊未来（Chance)」が今後も発展継続し、参加する学生、地域の方々や子どもたちにとって、夢ある未来を創造するための活動となりますことを願っています。

「信大YOU遊未来（Chance)」の継続的な実施は、この取組の趣旨にご賛同いただき、ご支援・ご協力いただいている地域住民の方々、多くの連携団体の皆さまのおかげで成り立っております。ご協力をいただいている関係者の皆さまに、この場をお借りして深く感謝を申し上げます。

最後になりますが、「信大YOU遊」の指導教員として、長きにわたり学生に主体的な体験学習の場を提供されてきた土井進教授が、今年度をもって定年退職されます。地域における教育課題等の解決に向けた信州大学教育学部の社会貢献活動を推進してこられたご努力と継続力に、心から敬意を表します。ありがとうございました。

もくじ

夢ある未来を創造するために　平野吉直　信州大学教育学部長 …… 1
もくじ／凡　例 …… 2
「信大YOU遊」二十歳、運営４人　木田達也　第20期「信大YOU遊未来」運営委員長 4
◇実践から得た「臨床の知」
つながり・やってみたい思い、できるのか不安・運営４人目
上野なつみ・畠山智晴・横田克己　副運営委員長 4
〈第20期「信大YOU遊未来(Chance)」発足式〉 …… 6
「信大YOU遊」20年を基盤とした新たな地域貢献の開道　土井　進　「信大YOU遊」指導教員 …… 7
YOU遊の20年の歴史　安達仁美　信州大学教育学部 …… 9
1.「信大YOU遊未来」茂菅 Farming Village（14年目） …… 10
◇実践から得た「臨床の知」
「本物」を感じ、伝えていく・母なる大地、茂菅農場にて・作物が教えてくれたこと
永原正裕・飯島香純・那須絢太郎 …… 14
◇地域協力者からの評価　林部信造　農　業 …… 15
小池　健　JAながの営農指導部 …… 16
◇英語活動協力者からの評価　Colleen Dalton　信州大学教育学部英語講師 …… 17
2. あっぷるず（14年目） …… 18
◇実践から得た「臨床の知」
「あっぷるず」な人生　手塚亮介 …… 18
3.「信大YOU遊未来」湯　谷（12年目） …… 19
◇実践から得た「臨床の知」
体験から学ぶ・広がるつながりの中で・１年間を振り返って
花岡慶祐・髙木淳子・小池遙香・今井史織・柳澤真純 …… 24
◇地域の保護者からの評価　倉地昭重　湯谷小子どもランド保護者代表 …… 26
4.「信大YOU遊未来」青　木（9年目） …… 27
◇実践から得た「臨床の知」
『幸せな時間』・やってよかった・あおきっこと共に成長した一年　土屋孝将・室橋美咲・北村隼一 …… 29
◇地域協力者からの評価　沓掛英明　青木村教育委員会教育長 …… 30
多田宇宏　青木村教育委員会主事 …… 31
5.「信大YOU遊未来」麻　績（9年目） …… 32
◇実践から得た「臨床の知」
子ども、そして地域の力・えがお　北野雄大・新井雅菜 …… 35
◇地域協力者からの評価　小松小百合　麻績村教育委員会社会教育指導員 …… 37
6.「信大YOU遊未来」須　坂（8年目） …… 38
◇実践から得た「臨床の知」
願い・あたたかさを感じて　坂田好恵・山崎花奈子 …… 39
◇関係各方面の皆様より　小林道男　信州すざか農業小学校豊丘校校長 …… 40
百瀬真弓　信州すざか農業小学校豊丘校事務局 …… 41
7.「信大YOU遊未来」大　岡（6年目） …… 42
◇実践から得た「臨床の知」
原点、大岡・意識しなかったことに気づく　酒井友輔・太田　咲 …… 45
◇地域協力者からの評価　木村公男　大岡小学校長 …… 46
金澤　仁　大岡子どもプラザ施設長 …… 47
8.「信大YOU遊未来」姥捨の棚田（1年目） …… 48
◇実践から得た「臨床の知」
地元「姥捨」に「YOU遊」を！　北村隼一 …… 50
◇地域協力者の声　北村善一　協力者 …… 51

9．第12回 YOU 遊フェスティバル（講座内容） …… 52

1．　おーーーっきいシャボン玉
2．みんなでつくろう X'mas キャンドル
3．咲け！ 闇に光る 万かいの華 鏡の不思議
4．スノードーム
5．写真をつなげてアニメをつくろう！
6．にんじゃりばんばん
7．飛び出せ!! 絵本の世界！
8．ギネスに挑戦！ 紙飛行機に夢をのせて･･･
9．姨捨米でおもちつき
10．Big でフワフワ☆グリグラパンケーキ
11．絶 望 要 塞
12．ファインディング・イモ ～やきいも大会～
13．みんなで踊ろう！ ソーラン節！

◇実践から得た「臨床の知」　つながる「力」・人のちから　池田隼人・小塚尚士 …… 64

10．第3回 YOU-YOU キャンプ（3年目） …… 66
◇実践から得た「臨床の知」
人とのつながりを意識したキャンプ・子ども同士がつながるキャンプを目指して
五味大紀・成瀬貴心 …… 70

11．「信大 YOU 遊未来」未来道場（2年目） …… 72
◇実践から得た「臨床の知」
道場から始まる一日・「3文」以上の得・道場で得た教師への第一歩
栗林詩菜・宮田巴都樹・織田裕二 …… 72

12．「信大 YOU 遊未来」夢　村（2年目） …… 73
◇ 参加者の声　夢村の価値や意義　三石梨沙・市川香織・宮尾　亘　信大OB&OG・小学校教諭 …… 73
夢村で私が学んでいること　太田真耶　NPO 法人 響育の山里 くじら雲　研修生 …… 74

☆ 「信大 YOU 遊未来」連携活動の紹介 ☆

＊ 放課後子どもプラザ 信　里（3年目） …… 76
◇ 実践から得た「臨床の知」　信里での出会いとつながり　月岡優介

＊ 福島愛育園訪問（2年目） …… 77
◇ 実践から得た「臨床の知」　出会いの数だけ笑顔があって、笑顔の数だけしあわせになる・当たり前の幸せ　月岡優介・北見　聖

＊ 高大連携事業（長野県立長野西高等学校）（2年目） …… 79
◇ 実践から得た「臨床の知」　人との関わり　北野雄大

☆ 第14回「全国フレンドシップ活動」in 信州 …… 80
☆ 「信大 YOU 遊未来」20周年記念シンポジウム〈分科会の記録〉・出席者名簿（来賓・卒業生・在校生） …… 82
☆ 「信大 YOU 遊未来（CHANCE）」にご協力いただいている団体・個人のご紹介 …… 90
☆ 「思い出・想い」（最終講義の要旨：土井　進「信州大学における教員養成の実践研究」） …… 91
編集委員会規定 …… 93
おわりに…　どうぞ、よろしく ／編集後記 …… 94
表紙解説／第20集編集委員会 …… 95
〈付〉信州大学教育学部同窓会 第26回通常総会 記念講演（抄録） …… 96

☆ ― ☆ ― ☆

凡　例

執筆者が信大生の場合、適宜、専攻名と学年を略記した。以下に「例」と「略称」を示す。
例：現1＝現代教育ｺｰｽ1年、国1＝国語教育ｺｰｽ1年、実3＝教育実践科学専攻3年、言4＝言語教育専攻4年

専攻名とその略称　（コース＝1年生・2年生、専攻＝3年生・4年生）

英：英語教育コース	社：社会科教育コース	数：数学教育コース	図：図画工作・美術教育コース
理：理科教育コース	音：音楽教育コース	保：保健体育コース	も：ものづくり・技術教育コース
家：家庭科教育コース	言：言語教育専攻	社：社会科学教育専攻	理：理数科学教育専攻
実：教育実践科学専攻	保：保健体育専攻	生：生活科学教育専攻	特支：特別支援学校教員養成課程
芸：芸術教育専攻	野：野外教育専攻	心：心理臨床教育専攻	現：現代教育コース（1・2年）
地：地域スポーツ専攻	院：大学院生	カ：教育ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ課程	

他大学等の略称　上：上越教育大、横：横浜国立大、岐聖：岐阜聖徳学園大、鳴：鳴門教育大、関：関東学院大、広：広島大、　慶：慶応義塾大、県短：長野県短大、清：清泉女学院大・同短大

「信大YOU遊」二十歳、運営４人

第20期「信大YOU遊未来」運営委員長　木田達也

とうとう実践記録を書く時期になりました。この記事が形になって皆様のもとに配布される頃には、僕はもう運営委員長としての責務を果たしています。本当に苦しい一年でした。僕がここに記す言葉は、これからも末永く続くであろう「信大ＹＯＵ遊」の後輩たちに向けてのものです。後輩が僕と同じように悩む苦しい時に、小さな元気を与えることができたら良いなと思います。僕は運営委員長になり、自分にあるものと無いものがはっきりとわかるようになりました。憧れの先輩の背中を追い真似ばかりしようとし、理想の自分を追いかけていた時期がありました。夏休みまでの僕です。なりたい自分になれないストレスを、一番の仲間である運営３人に当たりちらし、できない自分を弁護するために３人を傷つけました。それでも木田達也を支えようとしてくれた３人には頭が上がりません。周りからポンコツだと思われている自分を必死に支え守ってくれる３人になんとか恩返しをしたいと思い、ポンコツな僕にもできることを全力でやろうと思うようになりました。その後に企画したいくつかの取り組みは特別なものではなく、ありふれたものだったように思います。ですが、僕にとってはどんな小さな企画でも運営４人で話し合い、活動できることが本当に幸せだった。僕にはみんなが求めるような、僕自身が求めたような色々なものがありませんでした。でも、大切な人のために、大切な人とともにならできることがありました。この実践記録の大部分の執筆をした各プラザの役員の方々が一年間本当にかっこよく活動していた源には、それぞれのプラザの子どもを誰よりも大切に思う気持ちがあるのではないかと思っております。本当にみんなかっこうよかった。でも、横田克己、上野なつみ、畠山智晴この３人の、学生を思う気持ちも同じくらい大きくて力強いものでした。子どもとは少し距離が遠い仕事でしたが、この１年の頑張りを３人には胸を張ってほしい。一緒に１年間仕事ができたことを、僕は誇りに思います。運営は裏方なんかじゃない、いろいろなプラザに足を運び愛を運ぶ３人は、いつも、多くの学生の中でも一際輝いていましたから。

これからも続くであろう「信大YOU遊」の後輩たちに告ぐ、「今年のＹＯＵ遊は最高だった」と。最後になりますが、いつも活動を温かい目で見守ってくださる多くの関係者の皆様、本当に１年間ありがとうございました。温かい地域での確かな学びをたくさん身につけて、将来、多くの子どもたちと皆様からいただいた元気や愛情をより大きなものへと育てていくことができる教育者に僕はなりたいです。これからも、皆様方の地域の活動に参加させていただくことがあると思います。よろしくお願いいたします。本当に、１年間の全部ありがとう。　（社会科学教育専攻３年）

◇実践から得た「臨床の知」・

つながり

副運営委員長　上野なつみ

当たり前だけど、人間っていうのは誰もが完璧になんかできていなくて、ある部分が他の人よりも秀でていたり、劣っていたりするものだ。私は、今までこの当たり前のことがわかっているようでわかっていなかった。つまり、今までの運営はこうであったとか、長はどういう人であるべきだとか、先輩方と比べたり、そんなことにこだわって自分自身や周りを見てきた。一人ひとりの感じ方の違いや個性をつかんで関わっていこうと、ちゃんと思えたのは半年が過ぎてからで、それまでたくさん悩んでたくさん言い合いもした。私は元々自分の意見を伝えることが苦手だった。けれど運営という立場になって、「YOU遊」への思いがより強くなったからこそ、言いたいことは伝えたかったし、違うなと思ったことには反論していきたいと思うようになった。自分のありのままの気持ちを伝えて相手の気持ちも理解しようとしてくれる言い合える仲間ができたこの１年は、本当に自分にとってかけがえのないものであったと思う。

私は、「YOU 遊」の「子どもと関われる」魅力だけでなく、私が「YOU 遊」に参加して感じた「人とのつながり」という魅力を、もっと多くの人に感じてほしいという思いで運営をやることにした。今年は 20 周年ということで、シンポジウムのような前例のない企画もあったし、今までとは違うこともしてきた。しかし、人と人を繋ぐということは想像以上に難しく、このような企画の中で、人と人との繋がりがいいものだとたくさんの人に感じてもらえたかどうかは正直わからない。でも企画に対して「ありがとう」や「楽しかった」という言葉をもらうたびに、意味がないことはなかったと実感でき、運営をやってきてよかったと思った。このように、「〇〇しなさい」と指示されたものではなく自分たちが０から考えるという体験が、私を変えていったのだと思う。私は、何も練られてない状態のものをポンと渡された時に、その人が期待してくれている以上のもので返せるような人でありたいと思っていた。だが、実際はそんな風にはいかなかったけれど、そう思うようになったこと自体、自分自身の大きな変化だと思っている。他にも運営として「YOU 遊」に携わって、先輩や友達に言われて気づいたことや、ものの見方や考え方がいい意味で変わったことなど、この１年で得たことはとても多い。いちばん人と人との繋がりの良さを感じているのは、自分自身かもしれない。真面目な話もでき、時にくだらないことで笑い合える仲間と楽しいと思う気持ちを共有している時間が、何よりの幸せだった。そんな幸せを感じさせてくれる「YOU 遊」を立ち上げてくださった土井進先生を初めとする「YOU 遊」関係者の皆様に、心からありがとうございますと伝えたい。これからも「YOU 遊」でできた繋がりを大切にしていきたいと思う。（生活科学教育専攻３年）

やってみたい思い、できるのか不安

副運営委員長　畠山智晴

私が第 20 期「信大 YOU 遊未来（Chance)」の運営委員として「YOU 遊」に関わらせていただいて、もう１年が経とうとしています。１年前に運営委員長の木田君から「一緒にやらないか？」という誘いを受けたとき、私には「やってみたい」という思いと「私にできるのだろうか」という不安がありました。しかし、あの時誘いを断らなくて、本当によかったと思っています。今、１年間「YOU 遊」に運営委員という形で密接に関わりをもたせていただくことができたことに感謝しています。

４月６日に行われた発足式では、式に参加していただいた方々に 20 期のスタートを安心してみてもらいたいと、私は思っていました。しかし、当日はバタバタしてしまい臨機応変に対応することができず、先輩方に手伝ってもらう場面もありました。運営の中での意思疎通を図ることができていなかったり、指示をうまく出すことができなかった場面もありました。20 期において初めて動いた企画という事もありうまくいかないのは当たり前だと思うのですが、その時の私にとってはとても悔しいスタートに感じました。もっと私にできたことがあったはずだ、もっとあの時こうしていればよかったと自分の中で思い巡らせたのですが、「YOU 遊」の活動は一人の力ではできないものなのだから 20 期の仲間と支え合い、20 期らしい「YOU 遊」をつくりあげていきたいと感じました。１年を振り返ってみて、20 期の仲間たちと協力し真剣に話し合ったことで、20 期らしい「YOU 遊」をつくりあげることができたのではないかと思います。

私を運営に誘ってくれて、運営委員長として常に「YOU 遊」について様々なアイディアを考え出して私たちを引っ張ってくれた木田、私と同じように不器用ながらに周りに目を向け様々な仕事をこなしてくれた克己、いつもはじけるような笑顔でどんなことにも一生懸命に取り組んで自分のことより他の人を大切にするなっちゃん。自分たちの考えや思いが噛み合わなくてぶつかり合い、たくさん悩んだこともあったけれど、４人で頑張った時間やたくさん笑いあった時間が大好きでかけがえのない時間でした。この４人で運営委員をすることができて本当によかったと思っています。

来年からは土井進先生もいなくなってしまい、「YOU 遊」がどのような形になるのか分かりませんが、もし続くのであれば、仲間たちとたくさんぶつかり合いながら協力して、自分たちの「YOU 遊」をつくりあげていってほしいと思います。（社会科学教育専攻３年）

運営４人目

副運営委員長　横田克己

「達也と智晴となっちゃんと、あとひとり運営は誰？」と聞かれました。私です（笑）。偉そうなことを書いても格好がつかなそうなので、代わりに今年１年間活動させていただいて失敗したことをつらつらと記すことにします。

正副プラザ長は運営のことをわかってくれないと勝手に塞ぎ込み、「YOU 遊」を支えてくれている涙ぐましい努力や苦労もわかろうとせずに、わかり合おうとするコミュニケーションももとろうとせずに、楽しいはずの活動を何も言わずに避けた時期がありました。「YOU 遊」の活動を支えてくださっている土井進先生に、正面切って罵詈雑言を吐き出したこともありました。自分勝手に溜め込んだストレスを何も関係のない人や大切な人にぶつけ、人間関係を壊してしまったこともありました。「YOU 遊」でのストレスを言い訳に、１週間学校から遠ざかってしまったこともありました。今年度の運営は、「つなぐ」という目標を掲げ活動してきました。しかしながら、その運営が一時的に「つながっていない」ことがありました。一因は、私の理想に合っていないと運営を、特に運営委員長を批判したことです。理想像を押し付け、自分の力不足は棚に上げ、批判という名の悪口を垂らしました。運営のみんなごめんね。運営のみんながいてくれてほんとうによかった。みんなのさりげない気遣いに支えられてきました。ありがとう。こんな不出来な私でも副運営委員長としてやってくることができました。人間欠点があって当たり前で完璧な人間はいない･･･と、これから「YOU 遊」を背負って立つ方々が、自分を嫌になった時に思い出すことができるような文章になっていたら幸いです。

最後に、土井先生、「YOU 遊」にご協力してくださっている方々、先輩、正副プラザ長のみなさん、活動に参加されているみなさん、本当にありがとうございました。　（社会科学教育専攻３年）

〈第 20 期「信大 YOU 遊未来（Chance）」発足式〉

期　日：平成 25 年４月６日（土）10 時～13 時　　会　場：信州大学教育学部図書館２階

式次第：１．開会の言葉　２．学部長挨拶　３．運営委員長から活動方針の説明　４．各プラザ紹介
５．御来賓皆さまからのお言葉　６．土井進教員の話　７．閉会の言葉　８．式後、懇談会

今年度計画されている活動のプラザ：

・茂菅 Farming Village　・あっぷるず　・湯谷　・青木　・麻績　・大岡　・須坂　・未来道場　・姨捨の棚田
・興譲館　・第 12 回信大 YOU 遊フェスティバル　・YOU-YOU キャンプ　・全国フレンドシップ活動 in 信州

出席者(順不同)：

原　勝人：長野県教育委員会文化財・生涯学習課主任指導主事	阿部精一：長野県企画部　生活文化課長
福澤治夫：長野市青少年錬成センター所長	櫻井達雄：長野県立長野西高等学校長
石坂恒雄：長野市大岡支所長補佐	沓掛英明：青木村教育委員会教育長
塚原勝幸：麻績村教育委員会教育長	多田宇宏：青木村教育委員会事務局
小松小百合：麻績村公民館社会教育指導員	倉地昭重・近藤和己・近藤　恵：湯谷小子どもランド保護者代表・保護者
藤木孝明：麻績村教育委員会事務局	小池　健：JA ながの営農指導部
〈学内関係者〉	林部信造・幸子：長野市茂菅地区りんご農家
平野吉直：信州大学教育学部長	〈取　材〉　伊藤唯行：朝日新聞記者
土井　進：信州大学教育学部教授	滑 水　協：日本農業新聞記者
小山茂喜：信州大学全学教育機構教授	中山万美子：オフィス SYN
安達仁美：信州大学教育学部助教	春日　英一：出版社　オフィス春日

※ 学生役員、学部関係者、教員(OB・OG)、活動に関わる市町村の教育委員会関係者など約 70 名が出席。

「信大 YOU 遊」20 年を基盤とした新たな地域貢献の開道

「信大 YOU 遊」指導教員
土 井　進（教育科学講座教授）

1．第 20 期「信大 YOU 遊未来」の組織

平成 25 年 4 月 6 日（土）に平野吉直教育学部長のご出席のもと、発足式が開催され、下記の学生たちが正副運営委員長、正副プラザ長として立候補し満場一致で承認された。地域の協力者も多数ご出席くださり、激励のお言葉をいただいた。この模様は、4 月 7 日付けの朝日新聞に写真入りで紹介された。

	プラザ名	氏　名	専攻・学年
1	運　営	木田達也	社会・3
		畠山智晴	社会・3
		上野なつみ	生活・3
		横田克己	社会・3
2	茂　菅	永原正裕	特支・3
		飯島香純	実践・3
		那須絢太郎	理数・3
3	あっぷるず	手塚亮介	理数・4
		遠山芽衣	生活・4
		井上甲斐	芸術・4
4	青　木	土屋孝将	理数・3
		室橋美咲	言語・3
		北村隼一	理数・3
5	麻　績	北野雄大	社会・3
		新井雅菜	生活・3

	プラザ名	氏　名	専攻・学年
6	大　岡	酒井友輔	理数・3
		太田　咲	言語・3
7	湯　谷	花岡慶祐	理数・3
		髙木淳子	言語・3
8	須　坂	坂田好恵	野外・4
		山崎花奈子	言語・4
9	姨捨の棚田	北村隼一	理数・3
10	キャンプ	五味大紀	理数・4
		成瀬貴心	保体・4
11	YOU フェス	池田隼人	保体・3
		小塚尚士	野外・3
12	全フレ	小塚尚士	野外・3
		北野雄大	社会・3
13	福島愛育園	月岡優介	社会・4
		北見　聖	言語・4

2．「信大 YOU 遊未来」20 周年記念シンポジウムの開催（「分科会の記録」（P.82）参照）

〈 開催趣意書（抜粋）〉　新学期が始まり清新な気が満ちる季節を迎えました。皆様方におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて，平成 6 年 6 月 6 日に産声をあげた「信大 YOU 遊サタデー」が、平成 25 年度に 20 周年という節目を迎えることになりました。これもひとえに、信大教育学部で学んだ皆さんの想いが、時代を超えてつながってきたことによるものです。「信大 YOU 遊サタデー」を立ち上げた当初、ここまで永きにわたりこの活動が続くとは予想だにしていませんでした。それだけに、皆様方のご理解・ご協力に深く感謝申し上げます。

平成 25 年 1 月に第 19 期と第 20 期の合同運営委員会が開かれ、20 周年記念シンポジウムを開催することが決まりました。またこれを受けて、2 月 9 日（土）に有志が集まり、シンポジウムの運営について相談しました・・・・・。このシンポジウムが「YOU 遊」に携わってこられた皆様の旧交を温めるよい機会となれば幸いです。また、この活動をご指導されております土井進先生におかれましては、平成 25 年度末をもって定年退職を迎えられます。土井先生へのこれまでの感謝の気持ちを表す場にもしたいと考えていますので、多数ご参加いただきますようお願い申し上げます。　　実行委員長 山口直行

平成 25 年 8 月 10 日（土）14 時からホテル信濃路において開催されたこの事業は、平成 25 年度学内版 GP【個人としての取組用】において申請した〈取組名称：「信大 YOU 遊未来」20 周年記念シンポジウムの開催〉が採択されたことにより、この日の開催に合わせて「信大 YOU 遊」20 周年記念誌

である『「信大 YOU 遊」－地域・子どもたちと共に歩んだ 20 年－』を発刊し、ささやかではあるが、地域貢献を踏まえての教員養成の来し方を参加者全員に贈呈することができた。

〈 講演の演題とシンポジウムのテーマ 〉

また、このシンポジウムで行われた講演の演題とシンポジウムのテーマは、次のとおりであった。

(1) ミニ講演会　　講　師：小岩井彰先生（上田市立北小学校長）
　　演　題：「青木村と長野市大岡で何故通学合宿を始めたのか？」

(2) シンポジウム　　テーマ①：「YOU 遊」体験によってどのような力が身についたか？」
　　テーマ②：「YOU 遊」体験で最も楽しかったことは何か？」

3．日本経済新聞社の地域貢献度ランキング第 1 位

平成 25 年 11 月 27 日付けの日本経済新聞に全国の国公私立の 4 年制の 737 大学への平成 24 年度の実績調査の結果、信州大学の地域貢献度は昨年度に続き全国第 1 位であったと報じられた。その紙面には「信大茂菅ふるさと農場」で活躍する学生の写真が紹介された。1 位の実績の中には、信大生による次の地域貢献活動がしっかりと含まれています。

小中高生向け講座	対　象　者	参加者数	開　催　日	場　　所
「信大 YOU 遊未来」茂菅	長野市内の小学生	40×11 回	2012.4～2013.2	信大茂菅ふるさと農場
「信大YOU遊未来」湯谷	湯谷小学校の児童	34×13回	2012.5～2013.3	椹田地区センター
「信大YOU遊未来」青木	青木小学校の児童	60×8回	2012.4～2012.12	青木村文化会館
「信大YOU遊未来」麻績	麻績小学校の児童	54×10回	2012.5～2013.2	麻績村地域交流センター
「信大YOU遊未来」須坂	須坂市内の小学生	60×18回	2012.4～2013.3	信州すざか農業小学校
「信大YOU遊未来」大岡	大岡の小中学生	20×18回	2012.4～2013.2	大岡わらわらくらぶ
「信大YOU遊未来」喬木	喬木村の小学生	20×３回	2012.4～2012.11	喬木村学遊館
第11回YOU遊フェス	県内の小中高生	644	2012. 11.24～25	教育学部
第2回YOU-YOUキャンプ	長野県内の小学生	36	2012. 8.5～８	長野市青少年錬成センター

4．地域志向教育研究支援事業「教育補助」による第 14 回「全国フレンドシップ活動」in 信州の実施

「信大生が地域の子どもと交流することによって村を活性化するプロジェクトの開発」が目的である。詳細は、本誌 80 ページの「第 14 回「全国フレンドシップ活動」in 信州」を参照してください。

5．「信大 YOU 遊」20 年を基盤とした新たな地域貢献の開道

文部科学省は、平成 25 年度の大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）として「地（知）の拠点整備事業（COC）」を開始した。これに信州大学から応募した「信州を未来へつなぐ、人材育成と課題解決拠点『信州アカデミア』」が、平成 25 年 10 月 15 日に採択された。信州大学は、この事業を推進するミッションを担った地域戦略センターCOC（Center for Advanced Regional Strategy in Shinshu）を平成 25 年 10 月 1 日に設立した。そして、12 月 2 日に長野市のメルパルクにおいて、「信州アカデミア」キック・オフ・フォーラムが開催された。このように今、国立大学は大きく変化する時を迎えている。「信濃毎日新聞」平成 26 年 1 月 8 日付けの第 1 面に、大きく次のように報じられた。

――「信大 学部超える教員組織 ほぼ全員所属の「学術研究院」新設 全学的視野人材活用」

平成 6 年度に「信大 YOU 遊サタデー」が発足した時、その 10 年後に国立大学がなくなって法人化するということは、想像だにしなかった。それから 10 年、「YOU 遊」20 年目で「教育学部」自体が廃止されることになるとは全く思いも及ばぬことであった。しかし、これが現実である。政策や制度はどんなに変わろうと、大事なのは人間であり地域社会である。――

「YOU 遊」の 30 年目はどうなっているか。足元をしっかりと見つめ、信頼される地域貢献の実践を通して、学生自身が実践的指導力、人間力を培うことを見失ってはいけない。

ＹＯＵ遊の20年の歴史

安達仁美（信州大学教育学部）

今年の夏、YOU遊20周年の記念シンポジウムに出席させていただいた。信州大学の教員としてではなく、卒業生の一人として参加をしたいと思った。私が学生時代にYOU遊に関わったのは、4年間という短い学生生活の中の更にほんの少しの時間である。学生生活の多くの時間をYOU遊の活動にあてている人がいる中、私はどちらかといえば消極的で、YOU遊に熱を入れている人を少し遠目に見ている所があったと思う。

そのような私が、先輩から誘われてYOU遊サタデーの1つの講座を受け持つこととなり、さらにはジャンケンに負けて講座長を務めることになり、気が付けば、あれほど客観視していたYOU遊の活動で汗を流し、涙を流し、気持ちをゆさぶられながら積極的に取り組む自分がいた。責任という言葉の重みを実感し、また一方で、責任を課せられ期待をかけられることが原動力となって動いていたように感じる。

このように、私の学生時代のYOU遊との関わりは、本当にわずかな時間であったが、今でも私の記憶の中で生きいきと息づいている。

さて、卒業生として参加した20周年シンポジウムでは、懐かしい仲間との再会に加えて新しい出会いもたくさんあった。テーブルを囲んでのディスカッションでは、世代は離れていてもYOU遊での経験がプラットフォームとなり、共感しあい、互いの経験を共有し学び合うことができていたように思う。YOU遊での学びが、社会に出てからどのように生かされているのか。蓄積されたキャリアの原点を探るのは容易ではないが、それでも、YOU遊での経験が現在の自分に息づいている実感があるからこそ、全国から大勢の仲間があのシンポジウムに集ったのだと感じる。

12月。YOU遊フェスティバルの様子を見に行った際、土井先生からYOU遊の倉庫や収穫した大根を保存している畑や昔プレパークがあった場所などを案内していただき、そこでのエピソードなどを教えていただいた。タイヤの処分に苦労した話、シシ沢川の土を掘り起こして畑を作った話、生活科ご担当の先生が、学生が信州の様々な木々に触れられるようにと、グラウンドの周りに何種類もの木を植えた話。YOU遊だけでなく土井先生が信州大学で過ごされた歴史に触れ、キャンパスの中心から少し外れた目立たない場所で、学生のことを思いながら学生の願いを叶えるために動いていらしたことを知り、感動して涙が出た。このような実践を築いてこられた先生を改めて尊敬すると同時に深謝の念に堪えない。

教員として信大に着任して以降は、YOU遊の活動に活発に取り組む学生の皆さんを陰ながら応援している。教育実習や教員採用試験や卒業研究など、学生を応援する機会はたくさんあるが、YOU遊の活動に対しては、教員という立場ではなく、卒業生として後輩たちを応援する感覚に近い。当時の自分を照らし合わせ、懐かしさとどこか羨ましささえ感じながら見守っている。YOU遊は学生主体の活動であることに一番の価値がある。

さて、20年の流れを受けて、これからのYOU遊はどこへ向かうのだろう。学生のみなさんは、どこへ向かいたいと思っているのだろう。歴史を背負うことを重荷に感じることなく原動力に変えて、YOU遊の原点に立ち返りまた新たな一歩を踏み出してほしい。

「信大 YOU 遊未来」茂菅 Farming Village(14 年目)

プラザ長　永原　正裕（障害児教育専攻 3 年）
副プラザ長　那須絢太郎（理数科学教育専攻 3 年）
副プラザ長　飯島　香純（教育実践科学専攻 3 年）

○学生スタッフ名

手塚　亮介(理４)　遠山　芽衣(生４)　榊原　典子(生４)　織田　裕二(生４)　小松　一成(理４)
田口　詩織(言４)　羽田　鋭(実４)　後藤　莉奈(言４)　月岡　優介(社４)　佐野　遥(生４)
岩瀬　由依(言４)　八木英理子(言４)　井上　甲斐(芸４)　松島　宏俊(実４)　宮田巴都樹(特４)
加々美理沙(言４)　山本　健登(工４)　小島　淳平(人４)　北村　隼一(理３)　桜木　桃子(生３)
池田　隼人(保 3)　太田　咲(言 3)　酒井　友輔(理３)　中村　速人(工３)　北野　雄大(社３)
藤澤　和敏(理３)　上野なつみ(生 3)　横田　克己(社３)　木田　達也(社３)　畠山　智晴(社３)
津瀬　直彦(特３)　三井　夕衣(言３)　熊崎　草太(社３)　西澤　敏光(社３)　堀本　泰寛(理３)
花岡　慶祐(理３)　山本　智子(音３)　竹内　栞(音３)　渡邉　宏海(社３)　宇治　貢(理３)
石川　真人(理３)　西村　拓矢(理３)　新井　雅菜(生３)　松川　奉央(理３)　土屋　祥太(工３)
日髙　啓吾(生３)　黒岩　裕未(特３)　山﨑　圭(特３)　寺澤　眞子(実 3)　上野　暁(数２)
田中　優(社２)　舘林　洸一(社２)　小林凛太郎(野２)　村松　知美(美２)　井上　陽介(技２)
小宮山翔平(社２)　山崎　真歩(社２)　上原　瑛美(現２)　金沢　優花(現２)　小林　大輝(現２)
山内　藍雅(現２)　太田　宏平(数２)　塩﨑　健介(数２)　関口　美桜(現２)　土屋ひかり(現２)
水本　侍樹(特２)　高田　敏生(社２)　畔上　達也(理２)　森下　結衣(現２)　正木　文華(社２)
鷲澤　栞里(現１)　松元可南子(現１)　相沢　英真(社１)　桜井　一誓(工１)　尾崎　貴久(理１)
工藤　千尋(現１)　黒岩　知也(技１)　石井綾華(県短 1)　丸山杏子(県短 1)　王　俊(院１)
Vo ngoc han(院１)

○参加者人数　子ども 50 人　地域協力者 6 人　学生 81 人　卒業生 21 人　マスコミ関係 7 人

○連携団体　地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻　JA ながの営農指導員：小池　健

○プラザの概要

「Farming Village」は、大学から自転車で 10 分ほどの茂菅地区にあります。田畑約 12 アールの土地を「生活科指導法基礎」の授業と分け合っての活動です。田んぼや畑などでの農作業体験を軸に、農場で獲れた作物を食べたり、工作したりといった活動をしています。今年は初の試みとして、まほろば祭での焼き芋販売も行いました。

○活動目標

自然の中に身を投じ、農業・工作・料理などにより自然の恵みを体感することを通して、自然を身近に感じ、子どもたちの生活がより豊かになる。また、普段何気なく口にする食べ物の生産から販売までの食の流通について知り、食べ物についての見識を改める。さらに、異文化との交流を通して、子どもたちの好奇心の幅を広げる。

○一年間の活動

活動回	活　動　日	活　動　内　容
第 1 回	4 月 20 日（土）	じゃがいも植え、障害物リレー in 茂菅農場
第 2 回	5 月 18 日（土）	夏野菜植え（さつまいも、ヤーコン、とうもろこし）
第 3 回	6 月 9 日（土）	田植え、大豆・小豆の種まき
第 4 回	7 月 20 日（土）	じゃがいも収穫、
第 5 回	8 月 11 日（日）	とうもろこし収穫、大根の種まき

第 6回	9月 23 日（月）	稲刈り、はぜかけ
第 7回	10 月 13 日（日）	脱穀、さつまいも収穫、焼き芋
第 8回	11 月 10 日（日）	ハロウィンパーティー
第 9回	11 月 30 日～12 月 1 日(土・日)	焼き芋販売
第 10 回	12 月 21 日（土）	いも判作り、お餅つき
第 11 回	1 月 11 日（土）	ギョーザ作り
第 12 回	2 月 15 日（土）	豆まき 等

○各活動内容

第 1 回　4 月 21 日（土）　じゃがいも植え、障害物リレー（参加者　子ども 23 人、学生 39 人）

今年度初の活動。内容は、じゃがいも植えと、田植え前の田んぼを使った障害物リレーでした。まずは、昨年から引き続き取り入れた、外国語活動。「じゃがいもは英語で何と言うでしょう？」という問いに、「potato！」と子どもたちの中から声が上がり、「そうだね、ぽてとだね！」と私が言うと、「違うよ、“ぽてぃと”だよ！」と子どもたち。じゃあ正しい発音を教えてもらおうか、ということで、信大の英語教師であるダルトン先生にご協力いただき、ネイティブの発音に触れることができました。次に、「では、中国語では何と書くでしょう？」というクイズを、中国人留学生の王俊さんの協力で行いました。正解である「土豆」の発音を、王さんに教えてもらいました。自己紹介のあと、じゃがいも植え。まずは種イモを半分に切り、乾燥や細菌からイモを守るための灰を付け、株間 30cm を測りながら、じゃがいもを植えていきました。じゃがいも植えが終わると、子どもたちは思い思いに、花を摘んだり虫を捕まえたり、野原を駆け回ったり。それに寄り添いながら、一緒に楽しんでいる学生の姿がありました。休憩の後は、障害物リレー。学生子ども共に初参加の人が多く、互いの距離を縮めて欲しいと考えた企画でした。ムカデ競走やボール運びなど、学生と子どもで協力が必要なミッションをクリアしていき、たすき代わりのメダルをリレーし、ゴールを目指していきました。

第 2 回　5 月 18 日（土）　夏野菜植え（参加者　子ども 41 人、学生 23 人）

今回の活動は、さつまいも・ヤーコン・とうもろこし植え。そして、その 3 つの名前を使った「ベジタブル・バスケット」というゲームを行いました。この日はまだ 5 月だというのにたいへん強い陽射しでした。暑さで子どもたちの体力が続かないことを考慮した進行ができなかったのが大きな反省点です。さつまいも植えは、幼児や低学年の子でも上手く土をかぶせて植えられるように、マルチにあける穴を大きくするなどの工夫をして、子どもたちができる限り大人の手を借りずに作業できるようにしました。しかし、穴をあけるのが難しく、時間が押してしまったことで、さつまいも植えを最後までやることができず残念でした。ヤーコン植えは、高橋正輝さんというヤーコン博士の方に塊根を提供していただき、茂菅農場初となる栽培になりました。高橋さんが説明するヤーコンの特徴や調理法など真剣に聞く子どもたちの顔が見られ、また、保護者さんもとても興味を持ってくださり、有意義な時間になりました。

第 3 回　6 月 9 日（土）　田植え、大豆・小豆の種まき（参加者　子ども 40 人、学生 24 人）

茂菅のメイン企画の 1 つ、田植え。雨も降らず、暑すぎず、最高の田植え日和の中の活動でした。今回は現代米と穂の色が違う古代米を使い、田んぼに「モスゲ」の文字を浮かび上がらせようという初めての試みをしました。まずは、高学年の子を中心に、難しいと思われる「モスゲ」の文字の部分の田植えを行い、その間に幼児～低学年の子を中心に、小豆と大豆を植えました。小豆・大豆の種まきでは、土を耕すところから作業を行いました。堆肥をまき、重い鍬を持ちながら、小さい体で力強く耕していました。子どもたちの表情は真剣そのもので、最初は固かった土が、耕すことによって柔らかくなっていく感触を鍬を通して感じているようで、子どもたちは作業を楽しみながら取り組んでいました。農業は土づくりから始まることを子どもたちに知ってもらいたいという私たちの思いから、土を耕す作業から子どもたちにしてもらいましたが、子どもたちは土から得られる感触から、自然のエネルギーを感じ取っていたように思います。田植えは、泥に足を入れることをためらっている子も多かったですが、土の感触を楽しんだり、泥んこになって遊んでみたりと、土に親しんで活動してい

る姿が多く見られました。最高のロケーションの中で、子どもたちが思いっきりのびのびと活動し、素のままの可愛い姿を見せてくれる。学生も負けじとはしゃぎ、自然を介して、両者のつながりが自然と生まれていく。そんな「茂菅らしい風景」を、創り上げることができたと感じました。

第4回　7月20日（土）　じゃがいも収穫　（参加者　子ども32人、学生25人）

今回は、じゃがいもを掘り、採れたてのいもを食べました。今回はできるだけシンプルに、「採って」「食べる」という最小限の活動に絞りました。茂菅の原点のような活動の中で、そして茂菅特有のゆったりとした空間の中で、子どもにも学生にも茂菅の魅力を存分に感じて欲しい。そんな願いがありました。子どもたちも学生も、ちゃんとこちらの願いに応えてくれたと感じました。とても暑い中での活動でしたが、子どもも学生も元気に活動してくれました。ゆったりしたタイムスケジュールを組んだため、自由に過ごす時間が多くなりました。その中で、誰もが何かしら活動を見つけて、自然の中を夢中で駆け回っている姿をたくさん見ることができました。農場という環境があるだけで、自然と繋がりや学びが生まれていく。改めて、「茂菅農場」という教材の威力を実感した第4回でした。

第5回　8月11日（日）　とうもろこし収穫、大根種まき　（参加者　子ども23人、学生16人）

今回は、とうもろこし収穫の予定でしたが、ハクビシンにやられ、せっかく育ててきたとうもろこしがほぼ全滅してしまうというハプニングがありました。しかし、そんな状態を見せるのも教育だと割り切り、とうもろこしの残骸の前で、ハクビシンの説明をしました。活動前は、どんな反応があるか不安でした。子どもたちの悲しそうな顔を何度も想像して、悔しくなりました。しかし、実際にとうもろこしの残骸を見せると、ハクビシンに興味を持つ子がいたり、数少ないとうもろこしを見つけて嬉しそうにしている子がいたりと、子どもたちなりに、色んなことを感じ取ってくれているようでした。むしろこういう結果だったから、とうもろこしを失ったことから得られたものも多かったのかなとも思いました。 また、残ったとうもろこしの茎を活用して、「茂菅農場のとうもろこし」に何か意味を持たせたいと考え、「とうもろこしの茎を使って、できるだけ高くしよう！どのチームが一番高く積めるかな？」という「とうもろこし積み上げゲーム」というものをやりました。暑い中、日陰で休んでいる子もいましたが、多くの学生や子どもたちが、元気いっぱいに活動してくれました。

第6回　9月23日（月）　稲刈り、はぜかけ　（参加者　子ども32人、学生17人）

今回の活動は、稲刈り。今月も好天に恵まれ、暑い中の作業となりました。 まずは、古代米によって浮かび上がった「モスゲ」の文字を、坂の上から鑑賞しました。しかし、活動直前にあった嵐によって倒れてしまった稲が多く、上手く浮かび上がった状態を見ることはできず、残念でした。稲刈りした後は、古代米とうるち米ともち米を分けてはぜに掛けていきます。そんな難しい作業になってしまったこともあり、活動の進行はだいぶ押し気味になってしまいました。学生の数が少なく、子どもたちとしっかり向き合うだけの余裕がありませんでしたが、稲を束ねる難しい作業に果敢に挑戦したり、我先にとはぜかけに向かうなど、子どもたちだけでも積極的に活動してくれる姿が見られました。

第7回 10月13日（日）　脱穀、さつまいも収穫、焼き芋　（参加者　子ども35人、学生34人）

今月も天気に恵まれ、脱穀とさつまいもの収穫を無事に終わらせることができました。さつまいものグループと脱穀のグループに分かれて作業しました。さつまいもの収穫では、とうもろこしの反省を活かし、さつまいも畑は、イノシシ避けのためのベニヤ板で囲っていました。その状態を子どもたちにも見てもらいたいと思い、あえて活動時までそのままにしておきました。ベニヤ板を外すと、畑を覆う大量のつるにびっくりの学生と子どもたち。そのつるを引き抜いて、さつまいも掘りを開始しました。多くの子どもが、「大きいいも採れたよ！」「うわぁ、こんなにいっぱい採れた！」と嬉しそうに報告してくれました。いつも以上に、子どもたちの素敵な笑顔に出会えました。

脱穀の作業は、最初は足踏み脱穀機を使い、その後ハーベスタを使って行いました。足踏み脱穀機から籾が出てくる様子を、子どもたちは夢中で見ていました。そして、一粒の籾を手に取り、殻を剥いで中にある白米を見つけた時、「白いお米があったよ」と大きな声をあげていました。普段食べてい

るお米が、どのようにしてできるのかについて、子どもたちは興味津々で、脱穀を通して食に対する新たな学びがあったと感じます。採れたさつまいもは焼き芋にして、美味しくいただきました。農場での最後の活動でしたが、土に触れ、作物に触れ、自然を思い切り感じることができる、そんな茂菅の魅力を存分に感じることのできた活動になったと思います。

第8回 11月8日（土）　ハロウィンパーティー　（参加者 子ども 31 人 、学生 20 人）

「ハロウィンパーティー」と称し、かぼちゃランタン作りと自然物を使った仮装をしました。

ランタン作り。まず導入として、ハロウィンのいわれや、どうしてハロウィンでかぼちゃランタンを作るのかなどを、寸劇を通して紹介しました。農場で採れたかぼちゃの中身をスプーンでくり抜き、彫刻刀で顔を彫って、その中にロウソクを入れ、火をつけました。学生も子どもも初めて作った人がほとんどでしたが、無事完成。部屋を暗くしてランタンの灯りが闇の中に浮かび上がった時には、「おぉ～！」と大きな歓声が上がりました。仮装。1人1つ黒いポリ袋を用意し、葉っぱなど自然のものを使った仮装をしました。外に行って、葉っぱや木の実などを見つけて来て、それをポリ袋に貼ったりして自分なりの衣装を作りました。今年度初の農場を離れての活動でしたが、農場のような雰囲気で、自然を身近に感じて欲しいという願いから、このような活動を企画しました。大きな葉っぱや木でダイナミックな仮装をしている子もいれば、きれいな木の実を使って繊細な仮装をしている子もいて、子ども1人ひとりの個性があふれる活動となりました。最後に、ダルトン先生に教えていただいた「Trick or treat」の掛け声で悪魔からお菓子を奪い取り、おいしくいただくことができました。

第9回 11月31日（土）～12月1日（日）　焼き芋販売　（参加者　子ども 38 人 、学生 10 人）

茂菅農場で採れたさつまいもを用いた焼き芋販売をしました。活動日は2日間に分け、子どもたちは1時間ごとの交代制で、売り子体験をしました。1日目。基本的には、学生はできるだけ干渉せず、子どもたち自身で「どうやって売ろうか」と考えて欲しいという願いがありました。そのため、準備物は最低限にしました。子どもたちの工夫を活かそうと、ペンや画用紙、売り歩き用の箱などを用意。しかし、思った以上に「売る」という方に子どもたちの意識が向かわず、最低限のルール・やるべきことは入念に指導しておくべきだと反省しました。2日目。前日の反省を踏まえ、「やきいもの売り方」と題して、「いらっしゃいませ」から「ありがとうございました」までの一連の流れを示した接客マニュアルを作成しました。「売る」という行為自体に意識を向けさせるため、屋台内には厳選した最低限のものしか置きませんでした。すると、次第に「どうにかしていっぱい売ろう！」という雰囲気が作れていきました。「どうすればもっと売れるだろうか」という思考も、少しずつ生まれていきました。まずは枠を与えた上で、初めて自由・創造が生まれていくのだということを学びました。まほろば祭での収益で、最後の活動の際に子どもたちにプレゼントをすることを考えています。ただ植えて収穫して食べるだけでなく、自分たちが育てたものがお金になって、全く違うものとして返ってくるのだということを体感して欲しいと考えています。

第10回 12月21日（土）　いも判作り、お餅つき　（参加者　子ども 39 人、学生 28 人）

今回の内容は、いも判作りとお餅つき。まず活動の初めに、国際協力田の説明を土井進先生にしていただき、採れたお米を送るマリ共和国について、クイズなどを通して紹介しました。そして、「紛争がなくなるように願いを込めて、“仲良し”というテーマで絵を書いて、想いを伝えよう」とこちらから提案し、班に1枚ずつ配った模造紙に、思い思いの絵を描いていきました。いも判は、農場で採れたじゃがいもを使い、竹串で溝を掘っていきました。前回のランタン作りの時に彫刻刀をちゃんとケースに戻していない子が多く危なかったという反省から、ペン・はさみ・竹串立てを作り、使ったら戻せるように工夫しました。子どもたちは思った以上に真剣な眼差しで、個性あふれる判子を作ってくれました。お餅つきでは、子どもたちが重い杵を持ち、「重い」と言いながらも力強く餅をつく姿が見られました。最初は粒が多かった餅米が、次第に粘り気のあるお餅に変わっていく様子を、子どもたちは興味深そうに見ていました。実際に餅を触った子どもは、「ネバネバしている」と言ってその感

触を楽しみ、「早く食べたい」と言って茂菅農場の恵みがもたらす喜びを感じている様子でした。保護者も交じり、親子で杵を持つ姿も見られ、学生と子ども、子ども同士、そして親子の交流が見られた活動になりました。

◇実践から得た「臨床の知」

「本物」を感じ、伝えていく

永原正裕（障害児教育専攻３年）

子どもたちに色んな刺激を感じてもらいたい。できる限り、「本物」を伝えたい。農業を通して子どもたちと関わっていく上で、ずっとそんな想いがありました。茂菅は「農作業」という要素以外にも、「異年齢間の関わり」「自然との触れ合い」など、様々な特色があります。たくさんの刺激を受け取ることができる環境があります。昨年度、それに「英語活動」が加わりました。そんな既存のものに加え、もっと可能性があるのではないか。そんなことを考え、「自分たちで育てた作物の販売」「キャンパス内の自然物を使った工作」などを企画しました。子どもたちが、自分の思い描いたとおりのことを感じとってくれたかと言うと、あまり自信はありません。しかし、心のどこか片隅に残って、それがいつか、何かの成長のきっかけになってくれることを信じています。

できるだけ「本物」に触れてもらいたいとの想いから、小豆・大豆の種まきを畝(うね)作りの段階からやってみたり、さつまいも植えを子どもたちの力だけでできるようマルチの穴を大きくしてみたりと、お膳立てを最小限にすることにこだわりました。しかし、そのための段取りを考えるのは思いの外難しく、ご指導をいただいたりんご農家の林部信造様やJAながのの小池健様には、いつも以上にお手数をかけてしまいました。田起こし、肥料やたい肥の混ぜ込み、水やり、雑草取り、用水路の管理、ハクビシンやイノシシ対策。Village長として、月１の活動に参加するだけでは味わえない農場の様々な姿を体感していくたびに、子どもたちに伝える前に、自分が「本物」を分かっていなかったのだと気付きました。だからこそ余計に、自分が経験した農業の喜びや苦しみを、月１の活動の中でもできる限り伝えていきたいと思うようになりました。今思えば、せっかく育てたとうもろこしがハクビシンにやられてとことん落ち込んだことも、稲刈り直前に台風で稲が倒れ、「モスゲ」の文字が見えにくくなってしまったことも、「本物」を伝えていく上でとても大切な経験だったのかもしれません。

自分には分からないことだらけで、林部ご夫妻や小池さん、土井先生をはじめ、ハクビシンやイノシシ対策でお世話になった猟友会の新井様、廃材となったベニヤ板を無償で提供して下さった柄澤様など、様々な方々からの貴重な助言と多大なご協力があって、成し遂げることができました。人との繋がりの大切さ、有り難さを実感した１年でもありました。一緒に活動を創り上げてくれた仲間たち、成長を見守るのが楽しみでしょうがなかった子どもたち、温かく見守って下さった保護者の方々。こんなにたくさんの方に支えられて最後のVillage長ができた自分は、本当に幸せ者だと思います。ありがとうございました。

母なる大地、茂菅農場にて

飯島香純（教育実践科学専攻３年）

私はこの一年、副農場長として「信大茂菅 Farming Village」の活動に関わらせていただきました。土井進先生が定年退職されるということで、茂菅農場の活動の節目の年でもあったこの一年を任せていただいたことに感謝しています。茂菅農場中心の学生生活だったと言っても過言ではないこの一年で、私自身大きく意識が変わったことがありました。それは、普段周りにありふれているものに「ありがたみ」を感じるようになったことです。日本という国はとても恵まれているのに、日本人の幸福度はあまり高くないと何かの書物で読んだことがあります。その理由は諸説ありますが、私は自分自身の周りにありふれている様々なものが実生活と結びついていないことが大きな理由ではないかと考

えます。実際、私も副農場長になって、畑を耕し、田んぼの草取りをするところから始めてみて、農作物を栽培するのがいかに大変なことなのかということを身をもって知ることとなりました。ミミズや幼虫が盛んに蠢く、決して良い臭いとは言えない肥料を一輪車に乗せ運ぶところからスタートしたすがすがしい朝。獣除けに高いネットを張ったのに、すべて食い尽くされてしまったトウモロコシ。3 日ご無沙汰するだけで成長する雑草。楽しいことばかりとは言えない農作業でしたが、収穫し、皆で味わって食べるその時間は特別素晴らしいものでした。このような体験を通し、土井先生がおっしゃっている「実学を重んじた教育」の重要さを改めて知ったのです。

毎回無事に活動を終えることができるのは、いつも温かく見守ってくださる林部ご夫妻、的確なアドバイスをくださる JA ながのの小池健様、共に汗を流してくださる土井先生や、仲間たち、いつも元気に活動に足を運んでくださる子どもと保護者さん、そして母のように時に厳しく、時に優しく接してくれた茂菅農場の地があったからです。皆様のおかげで、私は貴重な体験をすることができました。頼りない私を支えてくださり、ありがとうございました。

作物が教えてくれたこと

那須絢太郎（理数科学教育専攻 3 年）

私は、この 1 年間茂菅農場での活動を通して、自然と共生することの厳しさとありがたさを学ぶことができました。本格的に農業体験をすることは生まれて初めてでしたが、今思い返せば、作物を育てるために必要な気概を何も持ち合わせていない状態で活動をしていたと感じています。最初に育てた野菜は、じゃがいもでした。固い土を割って、小さな芽が地表に現れた時、とても嬉しかったことを覚えています。その時、この小さな芽がどのように大きくなるのか、しっかりと見守ろうと心に誓いました。しかし、見守るだけでは作物は育ちません。日照りが続く時は、水やりをしないと枯れてしまいますし、雑草が生えれば除草をする必要があります。暑い中、農場まで行って作業をすることは決して楽ではありませんでした。しかし、干からびた土に水をかけ、作物の葉についた水滴に太陽の光が反射すると、何だか作物が息を吹き返したかのように見え、次の日には作物が少し大きくなっているのでした。私は、作物は本当に素直で、手をかければその分大きく成長することを実感し、作物を育てることは人を育てることにもつながると考え始めました。夏場になると、雑草が急速に増殖していきました。どれだけ草を取り除いても、1 週間もたてばまた雑草だらけになってしまいます。雑草の多い環境の中で育った作物は、味が薄くなり、旨味が少なくなってしまいます。教育も同じようなことが言えるのではないでしょうか。子どもたちの成長はとても速く、気を抜いているといつの間にか中身の薄い人間に育ってしまいます。教育者になるには、継続して一つのことをやり続ける熱意と根気を持ち続けることが大事だと思います。正直、今の私にはそれが少ないと感じます。大事に育てると決心した作物を、ほったらかしにしていたこともありました。茂菅農場での活動は、教育者になるために必要な課題を、私に提示してくれたように感じています。最後に、農業を行う上で大変お世話になった、林部ご夫妻、ＪＡながのの小池健様、そして、活動の中で多くの学びを与えてくれた子どもたち、保護者の皆様、学生スタッフ、さらに、私たちが自由に活動ができる環境を与えて下さった土井先生に、心から感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

◇地域協力者からの評価

閉場に伴う 14 年間の思い

農　業　林部信造

「信大茂菅ふるさと農場」も土井進教授の定年退職と共に、平成 25 年度をもって閉場になることを土井教授からお聞きした時には、やはりそういう時が来たかと何か淋しさを感じました。想えば 10 年間の継続を夢見て始めたこの農場は 14 年も続き、思い出多い楽しい農場であったと思います。

14 年間の長きにわたり継続できたのも、土井教授の教育に対する情熱、学生に対する教育理念、農

場を通しての実体験、開拓魂の教え、心豊かな人格形成をめざす等々があったればこそのことですし、共に学ぶことができましたことは大変光栄に存じ感謝申し上げます。

また、学生の皆さんとの交流を深め、その年の農作業の打ち合わせ、課題、対応等、新しい事業を１つ取り入れて実践してきました。これらのことを年代別の写真により、思い出していますが、農場に携わった人たちは、皆さん明るく、楽しく、健康的で何事にも前向きの姿勢で事に当たり、心豊かな人たちであり、語り合うのがすごく楽しみでした。お陰様でパワーをいただき、今日まで若さと健康を保つことができましたことに感謝致します。今後も農業と自然を愛し、終生現役で過ごしたいと願っています。

卒業された大勢の皆さんは社会人となり、教職に就いて立派にご活躍されています。これも農場で培われた強い精神力と豊かな心で更なる飛躍が期待されます。

子どもたちも学生の皆さんをお兄さん、お姉さんと慕い、楽しく接する姿を見る時、何とも微笑ましい光景でありました。又、農作業を通じて自然の豊かさの中で土に親しみ、お父さん、お母さんと共に農作業をする姿を見る時、親子の絆の深さを感じました。

トイレ休憩の時、軽トラに乗り、我が家のトイレに行く時の子どもたちの明るい顔、賑やかな声が響き、これも楽しみの一つではなかったかと思います。また、自由作品のお絵描きの時の真剣な姿を見る時、何とも愛らしい素直な子どもたちであり、成長が楽しみです。

あっぷるずの活動については、大変お忙しい中、水田、りんご作りとお手伝いをしていただき、今日まで継続できましたことについて厚く御礼申し上げます。また、年間恒例のりんごのお花見会、秋祭り、秋のレクリエーション、新年会、送別会等、楽しい思い出が数多く我が脳裏に刻まれています。

最後の農場長を努めた永原君、副農場長の那須君、飯島さんには、通常の農作業の他に「信大茂菅ふるさと農場」の記念誌の編集作業、古代米による「モスゲ」という字の浮上げに成功し、更に最終行事として脱穀後、齋藤英之神主による農場への感謝の神事が行われました。この神事には、永松裕希信大副教育学部長、JAながの役員、地主、用水組合、地域の農家、学生のOB・OG、子ども、父母等、150名の参加により、厳粛の中にも盛大に行われました。最後に看板を取りはずし総ての神事が滞りなく終えることができました。昼食には古代米を加えた赤飯、焼きさつま芋が全員に配られおいしくいただきました。

役員の皆さん、そして関わったスタッフの皆さん、本当にご苦労様でした。

14年間お世話になった農場との無事の別れには感無量のものがあり、唯々「ありがとう」と申しあげる次第です。

「茂菅農場」集大成の１年

JAながの営農指導部　小池　健

「茂菅農場」にJAながのの担当として関わらせていただき、今年もお米や野菜の栽培のお手伝いをさせていただきました。ビレッジ長の永原正裕君、副ビレッジ長の那須絢太郎君と飯島香純さん、そして農場を切り盛りされた農家の林部信造さんとともに楽しく活動できました。昨年から続いている英語体験ではコリーン・ダルトン先生と、また今年は留学生の中国の王俊さんやベトナムのボー グォック ハン（Vo ngoc hanh）さんにより、国際色豊かに外国語と触れ合うことができました。また、活動の中で留学生の出身国の料理も披露してもらい、子どもたちの好奇心が高まったと思います。

土井進先生が今年度をもって定年退職されることから、「茂菅農場」の活動が最後となり農場の閉場式に向け、春から準備をするなど、「茂菅農場」にとって集大成の年となりました。閉場式に配布する赤飯のおむすび用として古代米の栽培を行うとともに、田んぼに「モスゲ」の文字が浮かぶように古代米を植えました。また、古代米の栽培は私にとっても初めての体験であり、貴重な経験になりました。農場の畑ではさつまいも、じゃがいも、とうもろこし、大豆、小豆、大根、白菜、カボチャ、ヤーコンなどを栽培しました。収穫した野菜は活動の中で調理してみんなで食べることができました。いつもより何倍も美味しく感じました。

今年は和食が世界遺産（ユネスコ無形文化遺産）になり、改めて日本の食文化が世界的に評価された年です。日本の伝統文化により生み出された和食は、世界においては健康や長寿の代名詞となっています。しかし、実際の日本人の食文化は洋風化が進んでいます。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の中には「一日玄米４合と味噌と少しの野菜を食べ･･･」という一文が出てきます。昔の人はお米をずいぶんたくさん食べていたようにも感じますが、現代のようにパンや麺類、たくさんのおかずもありません。さらに当時は肉体労働が主体でしたから、玄米４合でも足りないくらいです。また、地域によっ

ては米が作れないため、小麦や大豆、そばや芋等を作り主食にしていた所も多くありました。食生活は時代を映す鏡とも言われます。「茂菅農場」に参加した子どもたちは今後どのような食を選ぶのでしょうか。また世界の経済事情により日本の食卓がどのように移り変わるのでしょうか。これからの時代を担う子どもたちの食生活が豊かでありますように、活動に参加した子どもたちや学生の皆さんがあらゆる場面で教育者となり、次の世代にバトンタッチできるように農場で学んだことを繋いでいってほしいと思います。

今年も農場で収穫したお米から玄米 60kg を国際協力田米として食糧不足のサハラ砂漠のマリ共和国へ子どもたちが書いた寄せ書きとともに送りました。長野県全体では約 5 トンほどです。1 月に JA 長野県ビルで行われた国際協力田米の発送式では、飯島香純さんにマリへ向けたメッセージを披露していただき、その後の学習会では土井進先生に「信大茂菅ふるさと農場における“人づくり”への挑戦」の題でご講演いただきました。「茂菅農場」では初年度から国際協力田に取り組み、「茂菅農場の活動」の一つの柱となって 14 年間継続して支援の取り組みを行ってくることができました。

最後になりましたが、私は「茂菅農場」に携わることができたことを誇りに思います。土井進先生に感謝するとともに林部信造さん、そして学生の皆さん、これまで大変ありがとうございました。

◇英語活動協力者からの評価

It Takes a Village

（子育ては村全体の仕事）

Colleen Dalton

One sunny Saturday afternoon this past fall, I stood watching children and university students and local mothers and fathers and farmers interacting with each other. A lot was going on: chatting, giving and receiving instruction, playing games, exploring the environment and making discoveries, crying and comforting. I noticed another mother or two who were, like me, simply taking in both the natural and the social beauty. In the background, I caught a glimpse of the sign "MOSUGE Farming Village," and I suddenly remembered the title of a book published almost twenty years ago: *It Takes a Village.*

Although I have never read the book, I know it affirms: It takes a *village* to raise a child (子育ては村全体の仕事). Families are, of course, the first learning environment of children, but children rightly "belong" to the community. They need the community -- a variety of people with different knowledge and talents and styles and experience -- to grow and flourish. Raised in this way, children are more likely to feel connected and valued. They are more likely to give back to the community, helping it to grow and flourish. Today children (and their families) are busy and focused and therefore spend less time in unstructured interaction with others. They spend less time outside. They spend less time learning from nature and from the communities to which they belong. Technology allows us to be always connected, but in many ways we are in fact becoming more isolated.

On that sunny day last fall, I felt grateful to the leaders and all the participants of MOSUGE Farming Village for creating a chance to gather, without stress, to notice the world around us and learn from it by simply spending time together. It takes a village to educate all of us, young and old. Although this is the last year of MOSUGE Farming Village, I am sure that this experience has planted a seed in many of us, a seed that is sure to help us strive to push our roots deeper into the soil and to extend ourselves more beautifully into the world.

あっぷるず（14年目）

プラザ長　手塚亮介（理数科学教育専攻４年）

○学生スタッフ名　遠山芽衣（生４）　榊原典子（生４）　井上甲斐（芸４）　三井夕衣（言３）　長谷川ゆか里（生4）　木英理子（言４）　北村隼一（理３）　飯島香純（言３）　横田克己（社３）　那須絢太郎（理３）　田中　優（社２）

○参加者数　地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻　学生12人

○プラザの概要　「信大YOU遊未来」茂菅Farming Village・大学の授業「生活科指導法」の活動で協力していただいている林部信造さんのお宅のりんご畑や田んぼのお手伝いをします。私たちがやりたいことをやりたいようにできるようにと場を整え相談に乗り、いつも私たちの活動の力になって支えてくださっている林部さんご夫妻に何かお手伝いができないかと、このプラザは始まりました。しかし、今では林部さんとお話がしたい、農作業を手伝ってみたいなど、参加の目的は様々です。活動の内容も様々です。りんご関係、稲作、林部さんのおうちでお茶をいただいただけという日もありました。代表の学生が、「あっぷるず」のとりまとめを行います。林部さんから活動日を伺い、学生が自身のスケジュールに合わせて参加しますから、好きな時に好きな時間だけ参加することができます。

○一年間の活動　４月：畦補修、すじ播き　５月上旬：りんご花粉づけ　５月中～下旬：りんご花摘み、田植え　７月下旬：田んぼ縄張り　９月中旬：稲刈り、はぜかけ　10月上旬：脱穀　10月中旬：りんご葉摘み　11月上旬：りんごの玉回し　11月下旬：りんご収穫

◇実践から得た「臨床の知」・――　「あっぷるず」な人生　**手塚亮介**（理数科学教育専攻４年）

「あっぷるず」の活動は、いつも美味しいお茶をいただくところから始まります。温かいお茶と美味しいりんごをいただきながら、最近あったこと、りんごの様子、地元のこと、大学のこと、趣味のことなどの話をします。参加し始めた頃、口下手な私は、どんなお話をしたらいいのかドキドキ緊張しましたが、すぐにそんな心配はなくなりました。お父さんはどんな話でもにこやかに聞いてくださり、お母さんはいつも楽しいお話を聞かせてくださるので、楽しい時間を過ごし、農作業も楽しみながらさせていただいています。私の実家は農業をしていないので、すべてが初めての経験でした。一度もやったことがない作業も、お父さんに一から教えていただき、安心してお手伝いできます。大自然の中で仲間と語り合いながら、ゆっくりとした時間を味わえます。農作業の後は、林部さん宅の大きなお風呂に入ります。一番の楽しみは、お母さん手料理のご飯の時間です、いつも本当に美味しいお料理をお腹いっぱいいただきます。食事の後も話は続き、いつも遅くまでお邪魔してしまいます。

私が今まで「あっぷるず」で過ごした時間を思い返すと、本当に貴重な時間を過ごさせていただいたなぁと感じます。そのことを一言で表現するなら、「林部さんのおうちの息子になれた」ということではないかと思います。少し失礼な言い方かもしれませんが、私はそう思うのです。私が初めて「あっぷるず」に参加した時、それまであまり林部さんとお話をしたこともなく、林部さんにとっては赤の他人であるはずの私に「よく来てくれました。どうぞ上がってください」と、丁寧に挨拶をしてくださいました。そして、とても美味しい御馳走を「りょう君、沢山食べてね」とふるまって下さいました。私はこの時、心が温まるような感覚を覚え、「あっぷるず」にハマったのを覚えています。親元を離れて一人暮らしをしている私たち学生にとっては、いつでも温かく迎え入れてくださって話を聞いてくださる林部さんご夫妻が、とても大きな存在です。

お父さんと農作業を、お母さんとお茶を飲みながらおしゃべりをし、美味しいご飯をみんなでいただく。「あっぷるず」の活動が終わるといつも、林部さんの家族になれたような、そんな気持ちになります。「あっぷるず」に参加している学生は、林部さんご夫妻を「お父さん」、「お母さん」と呼びます。最初は私も先輩の真似をしてそうお呼びしていましたが、今では心からそう呼ばせていただいています。OBやOGの先輩方は、卒業しても林部さんと連絡を取り合っているとお聞きします。私も、一生のお付き合いをさせていただいてもよろしいでしょうか。そして、今度は私が、林部さんご夫妻のような広く温かい心を持った大人になりたいと思います。

「信大ＹＯＵ遊未来」湯　谷（12年目）

プラザ長　花岡慶祐（理数科学教育専攻３年）
副プラザ長　髙木淳子（言語教育専攻３年）

○学生スタッフ名

小松　一成（理４）　林　志桜里（生４）　羽田　　鋭（実４）　月岡　優介（社４）　成瀬　貴心（保４）
北村　隼一（数３）　三井　夕衣（言３）　石川　真人（理３）　小塚　尚士（野３）　横田　克己（社３）
中野　直輝（社３）　池田　隼人（保３）　上野なつみ（生３）　室橋　美咲（言３）　林　穂奈美（言３）
井上　陽介（技２）　小宮山翔平（社２）　太田　宏平（数２）　小峠　大河（英２）　藤本沙也佳（現２）
田中　　優（社２）　山崎　真歩（社２）　保崎衣芙季（社２）　林　奈央子（社２）　勝野　里穂（社２）

○　県短スタッフ名

小池　遥香　柳澤　真純　今井　史織　石井　綾華　石田　莉帆　大坪　千夏　小見山かおり
小野沢明美　佐藤菜摘美　下村　奈生　関口　真実　竹原　有紀　冨田真璃亜　長谷部あや乃
待井芙美香　松本　美希　丸山　杏子　宮川　紗恵　宮下紗恵子　宮嶋　　茜　百瀬　友香
山崎　里歩　吉平　早希　和田　真弥　上原　愛美　大森はる枝　小田　杏奈　松本　夏美
下村　奈生　関口　真実　田中　絵梨　西山あゆ美　市川　琴絵　小出　彩歩　牧　　千紘
岡澤　志歩　小西　春菜　柳沢　美月　山岸　夏実　今井　梨沙　竹内　温子

○参加者数　　子ども　36人

○連携団体　　湯谷小子どもランド保護者会　　湯谷小学校教職員　　長野県短期大学

○プラザの概要

月に１回ほど、湯谷小学校の１年生から６年生の児童とその兄弟や姉妹、保護者の方々、信州大学・長野県短期大学の学生が活動をします。活動場所は地域の公民館（檀田地区センター）や湯谷小学校の体育館をお借りしています。妙高少年自然の家でのキャンプや野外炊飯などは毎年行っていますが、そのほかの企画は学生が内容を考えています。学生と保護者の交流会の場を設け、それぞれの意見や考えを伝えあうということもしています。

○活動目標

異学年同士の子どもたちの交流を深めていくことが活動目標です。地域のコミュニティが少なくなる中で、異学年同士の子どもたちが一緒に遊ぶ機会も減ってきています。そこで、信州大学の学生と長野県短期大学の学生とが子どもたちや保護者の方々と交流をすることで、広いつながりが生まれます。子どもたちにはその広いつながりの中で体験活動などを通して、成長してもらいたいと思います。

○一年間の活動

活動回	活動日	活　動　内　容
1	5月25日	アイスブレイク＆名札作り
2	6月15日	キャンプ前企画
3	7月6・7日	湯谷キャンプ
4	7月20日	野外炊飯
5	8月　3日	夏休みの宿題＆実験
6	9月21日	魚釣り＆ＢＢＱ

活動回	活動日	活　動　内　容
7	10月5日	秋の遠足
8	11月9日	運動会
9	12月14日	クリスマスケーキ作り
10	1月18日	新年会
11	2月1日	わくわく企画
12	3月1日	お楽しみ企画

○各活動内容

第１回　　5月25日　アイスブレイク＆名札作り

湯谷小子どもランド第１回目の活動は、初めての子どもや学生もたくさんいることから、アイスブ

レイクを行いました。アイスブレイクの内容も名前を覚えてもらうということを意識し、名前をばらばらにしたカードで単語を作ったり、名前でしりとりを作ってみたりといった名前にちなんだゲームを取り入れました。その結果、はじめは緊張気味だった子どもたちも学生も名前を覚え、打ち解けた様子でした。今年度は1年間使う名札を子どもが自分で作ることを企画に入れました。名札は自分がこれから1年間使うこともあって、折り紙を切って飾りつけなどを工夫して一生懸命作っている姿が印象的でした。活動が終わっても、家に持って帰って飾りつけしたいと言う子どもがいました。しかしなかには、モールが画用紙につきにくくて困ってしまっている子どももいました。学生で一度やってみて、時間を多くとったつもりでしたが、使う素材をもう少し吟味をする必要があったと思いました。楽しめつつ、やりがいのあるようなものを選ぶことの大切さや難しさを感じました。活動が終わって帰る時には、子どもが学生に、また来てねと言っている姿も見られました。参加した学生で、「はじめはどう関わればいいか分からなかったけど、最後のほうは笑顔で接することができた」と感想を書いていた人もいれば、「もう少し積極的に関われたらよかった」と書いていた人もいました。より多くの学生と子どもが関われるような企画を考え、充実した活動にしていきたいと思いました。

第2回　6月15日　キャンプ前企画

この企画は7月のキャンプに向けて、キャンプと同じ班となり、ゲームを通じ仲良くなるのが目的でした。子どもたちは2回目ということもあり、地区センターに来た時から元気いっぱいでした。ゲームは沈没ゲーム（じゃんけんに負けた班は新聞紙をたたんでいき、全員が乗れなかったら負け）をしました。キャンプに参加する2年生が企画を考えてくれましたが、じゃんけんの方法は班で出す手を考え、全員でからだを使って表現するというユニークなものでした。からだを使うということで、子どもたちが楽しんでいました。また、新聞紙が小さくなるにつれ、おんぶしたり抱えたりして自然と子どもたちと学生の距離が縮まっていくのが感じられて、班のみんなが打ち解ける様子がわかりました。子どもたちも楽しかったせいか、キャンプが楽しみといった声もありました。一方、学生には反省点も多く、それをキャンプに生かそうとする姿勢が見え、とてもよい活動になったと思いました。

第3回　7月6・7日　湯谷キャンプ

＜概要・日程＞　湯谷小子どもランドに参加している子どもたちと、新潟県にある国立妙高青少年自然の家で1泊2日のキャンプを行いました。

7月6日		7月7日	
10：30 開会式		6：00 起　床	9：00 源流探検
11：30 アイスブレイク	18：30 キャンプファイヤー	6：30 朝の会	りんご飴作り
12：30 昼　食	20：00 肝試し	7：15 朝　食	12：00 昼　食
14：00 WANTED	21：00 お風呂	8：00 清　掃	13：00 クラフト
17：00 夕　食	22：00 就　寝		15：00 閉会式

＜活動内容＞　キャンプのテーマを「いつ変わるの!?今でしょ!!」というテーマも設定し、キャンプを通じて子どもも学生も自分から行動できるようになろうとしました。布団の準備や靴をそろえたり、自然を感じたりして、友達や保護者さんに感謝の気持ちをもつという目標も持って行いました。

○**アイスブレイク**　班関係なくキャンプが楽しめるよう、ペア探しゲームや2人1組をつくる2コ1ゲームなどをして打ち解けることができた。

○**WANTED**　パズルが盗まれたという設定で、施設のオリエンテーリングコースを班で歩きながら課題解決ゲームをして、犯人の特徴が書かれたヒントをもとに犯人を捜しました。取り返したパズルをホールで完成させました。

○**キャンドルサービス**　キャンプファイヤーの予定でしたが雨が降ってしまったため、屋内でキャンドルサービスを行いました。停電が起きたという設定のもと、火の神から炎を授かるということをして火をともしました。定番のマイムマイムやじゃんけん列車に加え、3人組を何度も作っていく、

オオカミが来たなどのゲームを楽しみました。

○**肝試し**　屋内を使い、怖い映像を見てからスタートする演出もあり、子どもたちが驚きながらも、宿泊行事ならではの活動を楽しんでいました。

○**源流探検**　施設の源流探検コースを使って、長靴を履いて川を上っていきました。雨が心配されましたが、予定通り行うことができ、最後の土管をくぐるというアトラクションも多くの子どもが楽しんでいました。

○**りんご飴作り**　施設の調理室をお借りして、りんご飴を作りました。子ども１人ひとりオリジナルのりんご飴を、包丁や火の扱いにも注意して作ることができました。

○**クラフト**　キャンプ中の写真を貼るフォトフレームを、拾ってきた落ち葉や松ぼっくりなどを、グルガンを使ってつけて作成しました。完成して写真を貼ると、子らは嬉しそうにしていました。

＜キャンプ長の感想＞

リーダーシップ　　井上陽介（ものづくり・技術教育コース２年）

今回自分は湯谷キャンプのキャンプ長として参加させてもらいました。日頃はあまり前に立って誰かの指示を出すようなことはしないので、初めての経験でした。上になるという立場の中で、キャンプを通して人とコミュニケーションを上手に取ること、学年の入り混じる子どもたちへの対応、保護者さんや施設の方との連絡伝達の重要性、とても多くのことを教えてもらえました。その中でも最も経験として学べたことは、一緒にやっているメンバーのすべてを信じきって任せることの大切さ、ということです。自分はあまり周りを信頼しきれていなくて、すべてを自分が統括しようとしました。しかし、そのようなことは一人では無理で、結局まわりに多くの迷惑をかけてしまいました。はじめから周りを信頼して頼むことの大切さ、その重要性をキャンプ中ずっとひしひしと感じました。信大と県短との合同での作業の中で、県短の学生に迷惑をかけるときもありましたが、みんなにいろいろと助けられてなんとかキャンプも終えることができました。本当に今回は自分でもとても得るものも多く、非常によい経験になったので、キャンプ長をやってよかったです。

＜副キャンプ長の感想＞

湯谷キャンプを振り返って　　小宮山翔平（社会科教育コース２年）

今、湯谷キャンプを振り返ってみると、今回信大副キャンプ長として今回のメンバーと活動できたことへの喜びと湯谷キャンプをするにあたって支えていただいた湯谷の保護者の方・施設の方々・土井先生・先輩・メンバーへの感謝の気持ちでいっぱいです。特に今思うと、湯谷キャンプを企画したのは信大と県短の学生ですが、湯谷の保護者の方などの様々な支えをお借りすることで、今回キャンプをさせていただいたという気持ちの方がより大きいように思います。２年生が主体で二つの大学が合同で企画するという形での計画は大変でしたが、それ以上にこの短い期間ですが子どものことについて学生が本当に真剣になって考えることができたという経験は、これからの将来にいきてくることだと思います。そして、なにより湯谷の元気な子どもたちと一緒に過ごせたことが楽しく充実していました。キャンプ中では、全部が計画通りにはいきませんでしたが、子どもたちの楽しそうな笑顔や子ども同士でふれ合っている姿をみて、本当にキャンプに参加して良かったと心から思いました。今回の湯谷キャンプを通して学んだたくさんのことを、これからの活動に生かしていきます。湯谷キャンプに携わって下さった皆さん、本当にありがとうございました。

第４回　７月２０日　野外炊飯

野外炊飯は、長野市街から車で約 40 分のところにある、飯綱東オートキャンプ場というところで行いました。子どもたちは進んで、持ってきた野菜を切ったり、お米をといだりして準備をしている姿が見られました。また、今回の野外炊飯では火起こし体験をしました。まず、つけ方やなぜ火がつくのかなど説明してから、まいぎり式の火起こしを使って、子どもたちは一生懸命火を起こそうとしていました。なかなか起きず、「どうせつかない」と言う子どももでてきました。そこで自分が火をつ

ける見本を見せると、火がついたのを見て「どうやるの？詳しく教えて！」とやる気になり、つけようと努力していました。最終的に火はつかなかったものの、子どもたち自らが「やってみたい」という姿勢が見られ、今ではライターなどで簡単に火がつけられることの良さも実感したようでした。さらにキャンプ場は自然がいっぱいで、セミの抜け殻を集めて大きさを比べてみたり、セミが脱皮する貴重な瞬間を間近で見たりして楽しんでいるようでした。ご飯とカレーができあがり、「配膳するからお皿持ってきて！」と声をかけると、遊びをやめてすぐにお皿によそっていました。何杯もおかわりする子どももいて、自分で作ったご飯がそれだけおいしく感じられたのだと思います。

反省としては、いつまでに何をどこまでやっておくかということを、学生に伝えていればよかったと感じました。また火を木の枝につけて遊んでいる子どもがいたので注意をしましたが、そのようなことがないよう注意事項などを伝えることが大切だと思いました。

第５回　８月３日　夏休みの宿題＆実験

この時期、小学校は夏休みなので、前半は学校の宿題を進めて、後半は空気砲を作って遊んだりゲームをしたりしました。普段同学年の子ども同士は違う班になることが多いのですが、同じ宿題を同じ学年でできるいい機会だと思い、今回の班分けは学年毎にしました。時には話しながら、時には集中しながら取り組む姿がありました。後半はペットボトルと風船を使った空気砲作りに挑戦しました。作り方などの説明の前に、できあがった空気砲を何発か打ち、「すごい！」や「どうしてだろう？」と興味や疑問を持った子どもたちが出てきてから作りだしました。学生が思っていたよりも早くできあがっていて、楽しそうに遊んでいました。ストラックアウトや、丸めたティッシュを遠くに飛ばすといったゲームをして、空気の意外な威力を体験しているようでした。ペットボトルと風船という身近なもので作り方も簡単だったため、素材の研究はよくできていたと思いました。

反省としてはゲームのルールをその場で学生に説明してもらいましたが、模造紙などで作っておけばもっとゲームに取り組む時間が取れたのではないかと思いました。また、ゲームのやりがいが異なり、子どもが集まって待っているところと、あまりいないところで分かれてしまいました。しかし、近くの人に向けないというルールを守り、思った以上に子どもたちは楽しんでいてよかったです。

第６回　９月21日　魚釣り＆ＢＢＱ

この活動は、北川遊漁という釣り堀に出かけ、釣った魚と持って行った食材を使ってＢＢＱをしました。今回は班などを作らず、学生が自由に子どもの様子を見て、そして関わることができるようにしました。普段の活動では時間などの都合で指示が多くなってしまいますが、時間を気にしたり、指示したりすることも少なかったので、子どもも学生ものびのび活動しているという印象でした。餌をつけ、魚が来るのをじっと待っている表情は真剣で、釣れた時にそれが緩んで満面の笑みを浮かべて喜んでいる姿がありました。また、釣り上げた時に近くにいた子どもが、針とってあげるよといって魚の口に刺さった針を抜いていました。こうした子ども同士の関わりが増えてくるといいなと感じました。釣った後はＢＢＱということで、魚をさばくという体験は子どもにとっても学生にとっても新鮮であり、命に感謝するというところも学べたのではないかと思いました。子どもたちと話すだけでなく、積極的に保護者さんと話している学生の姿もありました。活動を支えてくださっている保護者さんの方々にも感謝しようとしていて、とてもよかったと思います。

反省点としては、食べる前の準備の時に遊んでいる子どもがいました。最初に一度集まった時に、準備もみんなで協力しようと声をかけておき、学生内でも確認しておくべきだったと思います。また、班がないことで、特定の子どもとの関わりしかできなかったという学生もいたので、その対応も考えておくべきでした。子どもが釣りをしながら、学生、保護者さんと三者で会話を楽しんでいるという場面がありましたが、このような関わりをさらに増やしていきたいと思いました。

第７回　10月５日　秋の遠足

遠足でも班は作らずに、学生には、子どもが一人で遊ばないようにとだけ伝えて、自由に活動しま

した。湯谷小学校から城山公園までは、特に何もない道ですが、子どもたちがとても楽しそうに歩いたり話したりしているのが見えました。後ろにいる子どもが、車が来たよと大きい声で教えてくれたり、高学年の子が低学年の子を道に出ないようにしてあげたりしていて、自分から動けているなと思いました。公園についてからは遊具を使って鬼ごっこをしたり、持っていったボールで遊んだりしていました。ドッジボールをしようということになり、線がなくて困っていると、持って行った縄跳びで線を作りだしました。あるものを使って作るという発想がすごいなと感心しました。また、縄跳びを２つ使い、ダブルダッチを始めるグループもあり、回す人を交代しながら楽しんでいました。

反省点としては、仲間に入りたいけど自分から声がかけられない子どもへの対応でした。一人で遊ばないようにするだけでなく、仲間に入れてあげるような支援も必要だったように感じます。いつもと違って自由時間が多く、やりたいことを楽しんでいる様子が見られたり、自分たちでルールを決めて遊んでいたりしたことは、よかったと思いました。

第８回　11 月９日　運 動 会

湯谷小学校の体育館をお借りして、各種目を班対抗で点数を競いました。相手の陣地から宝を奪い取る宝鬼というゲームでは、ルールが多くはじめのうちは子どもたちが戸惑ってしまっていましたが、慣れてくるとみんなで一気に攻めるという作戦が出てきたりしました。学生が見本を見せたりして、ルールがもう少し浸透していればより楽しめたと思いましたが、宝をとった時に学生や保護者さんから歓声があがったり、低学年の子が宝をとったりする場面もあったのでよかったです。小学生の定番のドッジボールでは、時間と残っている人数が多い方が勝ちといった追加のルールを設けて行いました。ボールを当てたら復帰できるということで、当てられた外野の人もあきらめずにボールを投げているシーンが目立ちました。また、低学年が残るとポイントが高くなるというルールを設けていたので、低学年の子が当たらないように守ってあげる姿も見られました。しかし、逆に狙われてしまう要因でもあったと思うので、低学年の子が当てるとポイントが高くなるなどのルールなら、低学年の子にも活躍する場面があったのかなと思いました。最後に学生も子どもも混ざって、障害物リレーをしたのですが、班のメンバーでどの種目に出るか決めるときに、子どもが司会をしたり、譲ってあげたりする姿がありました。

時間が押してしまいましたが、いつもより広い体育館で思いっきり遊ぶことができ、いい笑顔が見られたのでよかったです。

第９回　12 月 14 日　クリスマスケーキ作り

数か月ぶりの地区センターでの活動となりましたが、12 月ということもあるので、ケーキ作りをしました。土台になるスポンジを用意し、クリームや乗せる材料を班のみんなで考えて買ってくるということも行いました。電卓で「今何円？これは買える？」や「こっちのほうが安いよ」というように、予算内でより多く買おうとしている姿がありました。作る時でも、それぞれの班で特徴ある飾りつけをしていました。板チョコにメリークリスマスと書いたり、フルーツを花のようにしたりしていました。なかには、クリームの半分にチョコを入れて２種類のクリームを作り、スポンジの半分をクリーム、もう半分をチョコクリームにしている班もありました。班に４人ずつ子どもがいたのですが、全員の意見をまとめるのが難しかったけど、子どもたちが譲り合ったりしてくれたという学生もいました。学生が決めるのではなく、子どもたち同士で話し合って解決していたのでよかったと思う。食べる前にみんなでイスをだしたり、切り分けてお皿に分けてあげたりといった姿もあり、そのあとおいしそうに食べていました。最後、サンタの格好をした学生に、写真入りのプレゼントをもらうと、とても喜んでいました。

自分たちで買ったり作ったり食べたりとバタバタしてしまう時もありましたが、それぞれの場面で違う楽しみがあってよかったと思います。

体験から学ぶ

花岡慶祐（理数科学教育専攻３年）

自分が湯谷のプラザ長をやろうとしたのは、昨年の活動に多く参加し、子どもたちの笑顔や元気に走り回る姿を見て、このような企画を考えてみたいと思ったからでした。企画を考える上で自分が大切にしていることは、子どもが自ら体験することです。そのために、させる活動ではなく、子どもがやってみたいという活動を作らなければなりません。工作などでも、素材や見本の見せ方、学生の支援によって、主体的な活動へと子どもが変わっていきます。一度興味を持った子どもの集中力はすごく、真剣な顔で向き合い、完成したときの笑顔は何よりも輝いています。なかには上手にできなくて悔しがる子どももいますが、それもいい体験になると思います。そして友だちや学生にヒントを求めたり、一緒に解決したりしていくという関わりが生まれます。それが異学年の子どもの交流にもつながり、共同で行うことにより喜びも増します。また、体験という面では、参加する学生にも同じことが言えると思います。講義と違って子どもと直接関わりがもてる活動で、様々な体験ができると思います。子どもの褒め方や注意の仕方などあげていけばきりがありません。子どもも学生も体験を通じて得るものはたくさんあると活動の中でも感じました。また、プラザ長として学生にも、また湯谷に来たいと思ってもらうようにするにはどうすればよいかと考えることもありました。来てくれる学生も、楽しみたい、何かを得たいと思って参加してくれているので、子どもと学生が笑いあったり、楽しんでいたりする姿を見ると、企画を考えてよかったなと思います。ただ、そのなかでも課題は次々に出てきました。もっと子どもたちが楽しむためにはどうすればいいか、保護者さんも交えた企画をしたい、といったことを考えました。自分一人ではなかなかいい案が浮かばないときもありましたが、子どもや学生の感想、保護者さんとの会話などを参考にしながらよりよい活動になるように考えてきました。振り返ってみると、自分自身も湯谷の活動のなかで、さまざまな体験をして、いろいろなことを学んでいたということに気が付きました。このような活動を支えていただいている保護者の方々、企画を考えているときに声をかけてくださった土井進先生、笑顔で子どもたちに接してくれる学生に感謝をし、これからも元気いっぱいの湯谷小の子どもたちと笑顔あふれる活動になればいいな、と思います。１年間ありがとうございました。

広がるつながりの中で

髙木淳子（言語教育専攻３年）

もう活動報告を書く日が来たのかと思うと、副プラザ長をやると決めてからの日々は本当にあっという間だったなと感じています。４月になって本格的にプラザを運営していくようになってから、頭の片隅にはいつも湯谷のことがありました。「子どもたちと遊びたい」「たくさん関わりたい」という思いで参加していた湯谷の活動。元気いっぱいでパワー溢れる子どもたちと思いっきり関わることできる大好きな場を、今度は自分たちが運営する立場になり、改めて考えることがたくさんありました。

湯谷には保育園児から中学３年まで幅広い年齢の子どもたちが参加しています。そのどの子にとっても自分の「居場所」を感じられる場にしていきたいという思いを基に、毎回の活動を考えていくのですが、その中で壁にぶつかることも何度もありました。子どもたちの思いに寄り添った活動を考えられているのか、私に副プラザ長が務まるのかといった不安や焦り、言葉にできない様々な感情でいっぱいになってしまい、途中で投げ出したくなることもなかったと言えば嘘になります。それでもやってこられたのは、何よりも子どもたちのキラキラした笑顔があったからでした。いつも走り回っている子が集中して製作をする姿、学年を問わずチームで仲間を応援しあう姿、年上の子が下の子を気遣う姿、初めは戸惑っていた子が徐々に周りと関わりを持とうとする姿、あげればきりがないほどの子どもたちの素敵な姿に出会うことができました。そして、その一つひとつが私の宝物となり、次への活力を与えてくれました。このような子どもたちの姿は、いつも私たちをあたたかく見守り、支え

てくださる保護者の皆様のご協力、「なんでも手伝うよ」と声をかけてくれる学生、活動に入ることが難しい子にそっと寄り添う学生、たくさんの意見をくれる学生、そのすべての力が合わさってこそ見ることのできるものです。子ども、学生、保護者の方々。三者が出会い、つながり、一緒になって活動することで、笑顔が生まれ温かい場所になっていくのだと１年間やってきた今、実感しています。

子どもたちを中心に、つながりが広がるこの場所に身を置くことができる幸せを感じるとともに、活動を支えてくださる皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

１年間を振り返って

○ 湯谷小子どもランドで得ることのできたもの　　小池遥香（長野県短期大学２年）

長野県短期大学の「湯谷小子どもランド」というサークルとして、２年間「YOU 遊」の活動に参加させていただいています。１年生の時に湯谷キャンプのキャンプ長になり、信大生や同じ県短生と協力してキャンプを作り上げました。一つの企画を一から考え、作るということの難しさを知り、同時に作り上げたときの達成感も感じることができました。私は湯谷キャンプを通して、もっと企画に携わりたいと思い今年度のサークル長をさせていただきました。サークル長として１年間の企画の運営を信大生と協力して行ってきましたが、時には意見がぶつかり、上手く話し合いが進まないときもありました。企画当日も信大と県短で上手く連絡が取れておらず、他の学生や保護者の方に迷惑をかけてしまうこともありました。今年は特に講義の関係上、信大と県短の連絡不足が目立ちました。その度に、これで良いのだろうかと不安になりました。しかし、何事も行動しなければ始まらないと感じ、できる限り話し合いの機会を作り、企画を考えました。役員全員で話し合うことで自分では気付けなかったことに気付き、新たなアイディアが生まれました。私は企画を運営していくうえで、役員全員で企画を運営することの難しさ、信大・県短だからこそできる企画の良さに気付くことができました。湯谷小の活動は信大と県短の両方の学生が協力して作り上げてきたものです。これからも信大・県短の両学生で企画を運営していきたいと感じました。２年間「湯谷小子どもランド」の活動に関わり、様々な経験をすることができました。これらは、私にとって一生の財産です。サークル長をできたことを誇りに思い、これからも活動に参加していきたいと思います。

○ 人とのつながり、関わりの場　　今井史織（長野県短期大学２年）

１年間、ほぼ月に１度のペースで「湯谷小子どもランド」の活動に関わらせていただきました。１年生の時には、自分自身も子どもと企画に参加して楽しむといった“企画に参加する形”でしたが、２年生になり、活動の企画に携わるようになってから活動への関わりが変化しました。“企画に参加する形”から“企画し、実行・反省をして次へつなげていくというように考えること・実際に行ってみること”などの、楽しむだけではない大変なことも多くなったからだと思います。活動を考える時にどうしたら活動に参加した子ども・学生が楽しめるのか、より良い活動にするためにはどのようにしたら良いかを何度も話し合いました。まず学生でやることで多くのアイディアや意見を取り入れ、様々な素材で試したりやってみてできなかった時にどうしたらできるかを考えたりもしました。年齢差が幅広いため活動を考えるのはとても難しく、本当に良かったのか考え振り返ることが何度もありましたが、新たに気づくこと・発見することも多くあったように思います。更にそれが自身の振り返りにつながり、課題を見つけることにもなりました。

違う年齢の子どもで遊ぶ姿など、活動をする中での子ども同士、子どもと学生、学生と保護者の関わり、個々の笑顔・真剣な顔や悔しそうな顔など、いつもと違った表情を見ることができた時は、嬉しいと感じ、同時にやりがいも感じることができました。子どもと学生だけでなく保護者の方とも関わることができ、多くの人と人の関わりから成る温かい場所でした。ここで経験したことから自分を振り返り、人との関わりについて考えることができました。今後も、子どもたちと一緒に楽しみながら活動に参加していきたいです。

○ 子どもたちの成長、自分の成長　　柳澤真純（長野県短期大学２年）

私は、１年生からの２年間、「湯谷小子どもランド」で活動してきました。活動を通して湯谷小学校の子どもたちと自分自身が一緒に成長してきたと感じました。１年生で初めて活動に参加した私は、緊張していたし、どのように子どもたちと関わったら良いか分からず、何となく活動に参加していました。しかし、私は２年生になって、先輩方から引き継ぎ、県短の副サークル長として信大の正副プラザ長とともに企画を立てる立場になりました。今まで企画に参加していただけでしたが今度は企画を考えるとなると難しいことを実感しました。今までと同じでも子どもたちは楽しんでくれるのか、新しいことはどんなことをしようか考えることは決して簡単なことではないことを実感しました。大学での実習を通して子どもたちとの関わり方、見方が少しずつ変わってきて、企画の考え方も変わってきました。しかし、幼児とは違い小学生の子どもたちの楽しめるものは幅広く、そういった部分を考えることも学びになりました。子どもたちは１年前に比べると格段に成長していて、以前は落ち着かなかった子がいつの間にかほかの子に注意するようになったり、ほかの子の意見を聞き入れるようになったり、急に成長した部分が目立つようになっていました。メンバーとも「〇〇変わったよね」という会話をするようになり、皆が成長を感じているのだと思いました。これからも、子どもたちは成長し続け、学生たちも成長していくと思います。「湯谷小子どもランド」は、参加している子どもたちの保護者の方々、地域の方々に支えいただき、活動することができています。沢山の方に支えていただいていることを常に忘れず、これからも「湯谷小子どもランド」が子どもたちにとって成長できるより良い活動の場になるようにしていきたいと思います。

◇地域の保護者からの評価

「いい子が育て！」　湯谷小子どもランド保護者代表　倉地昭重

手軽なお楽しみ会から飯ごう炊飯・バーベキュウなどの屋外活動、そして１泊キャンプ。学生の皆さんにはそのイベントごとに子どもたちを楽しませてもらっています。学生たちが協力して子どもたち一人ひとりに気遣い目配りをしながら活動している様子が見られます。湯谷小子どもランドでは信大の学生と県短の学生とで活動してもらっています。それと学生が主体となってプログラムを進めています。この事は他のプラザの活動とは大きく違うところだそうで、学生たちは上手に協力し合いながら本当に良く活動してくれています。学生たちが子どもと接している様子は、それぞれの子どもに色々試行錯誤しながら、そして多くの学生が様々な形で子どもと接しているので、親としては不安を抱かず安心して子どもを預けられます。それだけでなく、学生と子どもとの関わりの様子は色々な発見や勉強にもなり、見ているのが楽しくなってきます。

考えてみれば、学生たちも私たちの子どもと言っていいのかもしれませんよね。そう思うと、今この学生たちの子どもたちとの関わりの様子、型にとらわれず自由に思いついたことを試して、子どもから返ってくる素直な答えを学生も素直に受け入れてまた色々試してみる。そんな関わりを繰り返しながらお互いに成長して行く。こんな環境がある事は、学生の親としてもとてもありがたい事なのではないかと思います。学生の多くは将来「先生」となって、多くの子どもと接して行くことになるのでしょう。いつでもいつまでもランドの活動の中で子どもたちから学んだ事・学べる事を思い、失敗を恐れず色々試してみる事や協力し合う事の大切さを思い続けてほしいと思います。彼らの環境がそれを活かせる環境である事が大切ですが。今年度の湯谷小子どもランドは保護者代表が引き継ぎの年で、代表者が二人いる感じで両方に連絡を取ったりしなければならず、保護者対応が大変だったかと思います。学生たちへのサポート等十分できなかったことを反省しています。来年度は長年関わってこられた保護者代表が学年が変わり抜けてしまいます。私も保護者代表として、気を引き締めて湯谷小子どもランドの活動に関わっていきたいと思います。

「信大ＹＯＵ遊未来」青　木（９年目）

プラザ長　土屋孝将（理数科学教育専攻３年）
副プラザ長　室橋美咲（言語教育専攻３年）
副プラザ長　北村隼一（理数科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

飯島　莉菜（言４）　北見　　聖（言４）　後藤　莉奈（言４）　齊藤　智也（理４）　斎藤　　恵（言４）
杣木　亮太（理４）　手塚　亮介（理４）　羽田　　鋭（実４）　林　志桜里（生４）　百瀬あきほ（実４）
八木英理子（言４）　新井　雅菜（生３）　池田　隼人（保３）　石川　真人（理３）　宇治　　貢（理３）
上野なつみ（生３）　太田　　咲（言３）　片山　莉沙（特３）　木田　達也（社３）　小塚　尚士（地３）
酒井　友輔（理３）　佐野　遥香（理３）　髙木　淳子（言３）　立野　真紀（理３）　永原　正裕（特３）
長幅　美希（言３）　那須絢太郎（理３）　日髙　啓互（生３）　古瀬　祐貴（特３）　古田　剛輝（理３）
堀本　泰寛（理３）　三井　夕衣（言３）　宮城　香詠（言３）　山本　早織（理３）　横田　克己（社３）
井上　陽介（技２）　岩澤ひかり（特２）　上野　　暁（数２）　太田　宏平（数２）　金沢　優花（現２）
土屋ひかり（現２）　正木　文華（社２）　松井　　六（現２）　村松　知美（芸２）　関口　美桜（現２）
後藤　剛博（工学）　土屋　祥太（工学）　阿部　春菜（清泉）　太田ちあ紀（清泉）　今井　美玖（清泉）
草間　美来（清泉）　笹沢　文香（清泉）　白倉　美保（清泉）　勝野　里穂（社２）　畔上　達也（理２）
小松　一成（理４）　塩崎　健介（数２）　大原佑里奈（特２）　瀧澤　　考（理３）　吉原　史泰（理３）
月岡　優介（社４）

○参加者人数　　子ども　約 140 人

○連携団体　　青木村教育委員会　青木小学校　青木村児童センター

○プラザの概要　青木村は人口 4,623 人の上田市の隣に位置する村です。この村の教育目標は、「心豊かでたくましい子どもの育成＝社会力（生きる力）を育てる＝」であり、様々な村の人々が村の子どもたちの教育に携わっています。私たちの活動は、青木村教育委員会を中心とした「子どもはつらつネットワーク」の中で〈「YOU 遊未来」青木〉プラザとして、村の子どもたちの教育に関わらせていただいています。

○活動目標　子どもと子どもの出会い、子どもと学生の出会い、学生と学生の出会いをたくさん生み出し、それぞれが新たな関係をつくりやすい環境をつくる。

○一年間の活動

活動回	活 動 日	活　動　内　容	活動回	活動日	活　動　内　容
1	5月 12～18 日	あおきっこ通学合宿	5	10 月 19 日	ホラー オブ ハロウィン
2	7月 5 日	あおきっこ通学合宿報告会	6	11 月 17 日	青木村産業祭参加
3	7月 6 日	七夕企画	7	12 月 14 日	ぽっかぽか・うぃんたー
4	8月 6～7 日	長泉サマーキャンプ参加	8	7回	児童センター訪問

○各活動内容

1．第９回あおきっこ通学合宿　（参加者　子ども 39 名　学生 29 名）

「あおきっこ通学合宿」は、４～６年生の子どもたちが１週間、青木村文化会館で大学生や友達とともに寝泊まりをし、そこから学校へ通学する活動です。子どもたちは、学生と友達と一緒に勉強したり、遊んだり、お風呂に入ったり、夕食を作って食べたり、係活動をしたりします。

今回で９回目になった「あおきっこ通学合宿」のテーマは、「One Step～一歩をふみだそう～」でした。学生スタッフで話し合い、「学生も子どもたちも成長の一歩を踏み出してほしい、たくさんのことを感じて帰ってほしい」という思いで決めました。一日のタイムスケジュールや子どもたちのふりかえりの方法、係活動などの活動内容を決めていくとき、いつもこのテーマを軸に決めていきました。今年度新しく「夜空リフレクション」という夜寝る前に外を歩き、１日の振り返りをするという活動

を考えたのも仲間と普段しない体験をすることに一歩を踏み出してほしいという思いからでした。

通学合宿の１週間で、どの子どもたちも学生も、「One Step」することができたと思っています。係活動で時間が過ぎても話し合いをしようとする子どもの姿やホームシックになっても仲間に支えられて１週間を乗り切る子どもの姿、子どもたちのために夜遅くまで話し合ったり、準備をしたりする学生の姿。そんな素敵な姿がこれからの生活につながっていくのだと感じました。何よりも１週間、班をこえて 39 人の子どもたちと 29 人の学生が日々、笑顔で過ごしてつながっていけたことが、大きな「One Step」だったと思います。

２．誘拐事件発生！～みんなでおりひめ様を救え～

この企画は、普段の活動場所とは違い、「リフレッシュパークあおき」という公共の場所をお借りしての活動でした。七夕が近いということで、おりひめ様が何者かにさらわれてしまい、ひこぼし様とみんなで公園内に隠されているおりひめ様の居場所の地図を探して助けに行くという活動内容でした。この日は青木小学校の親子レクと重なってしまったことや、学生側の人数の関係で子どもの安全を考えて３年生からの参加に限定したことで、子どもたちの参加人数は少なかったかなあと感じました。外での活動だったため、天気や蜂、熱中症などの心配もありましたが、何もなく無事に活動は終わりました。また外での活動でしたから、学生も子どもと一緒になってアスレチックで遊んだり、走ったり転んだり、よい疲れが残る楽しい企画だったように思います。子どもたちがいろんなものに興味をひかれ、走っていく姿が印象的でした。大きなすべり台で、ゴムのシートをひいて滑るのですが、滑り終わったシートがすべり台の下の方にたまってしまっているのを見た子どもが、自分の使う分だけでなく、みんなが使えるようにもとあった場所に何枚も運ぼうとする優しい姿が見られました。それだけでなく、高学年の子が低学年の子に班行動をするように声をかけるという、子どもたち同士の関わりも見ることができました。

３．長泉サマーキャンプ

長泉サマーキャンプは、青木村教育委員会主催の、青木小学校の５・６年生を対象としたキャンプで、姉妹都市の静岡県長泉町でキャンプをするというものです。今年は１泊２日の日程で、一日目は海水浴と長泉リーダーズという方たちとの交流、二日目は世界遺産になった富士山を５合目から６合目まで登りました。海で釣りをしていた方が大きなイカを釣っていて、子どもたちは行って見せてもらい、まるで自分たちがイカを釣ったように記念写真を撮らせていただきました。富士登山は登る距離が短かったため、「もう終わり？」と元気な子どもたちは残念そうにしていましたが、山にかかる雲の速さや、山の大きさに驚いている姿が見られました。学生も子どもたちも「参加者」という普段の企画とは違う距離感で関わることで、お互いに新しい関わり方ができたかなと思います。

４．ホラー オブ ハロウィン～おばけたちをビビらせろ～

この企画では、文化会館にお化けが出現し、そのお化けを退治するために大きなお化け屋敷をみんなで作って驚かせようというものでした。七夕の企画の反省を生かし、この企画では１年生から参加できるような内容に考えたところ、50 名を超えるたくさんの子どもたちが参加してくれました。活動が始まると、子どもたちは自分の作りたい（なりたい）お化けを作り始めました。どんどんアイディアが出てきて、見るたびに進化していく子どもたちの衣装には驚かされました。中にはどんなものを作ろうかとずっと悩んでいる子どもの姿が見受けられましたが、班の友達のアイディアを借りて、その子なりのお化けを作っていました。班の分け方をいつもとは違ってある程度学年ごとにまとめたので、お互いにアドバイスをしたり、「○○ちゃんすごい！」など、友達のいい部分をたくさん子どもたちの中で発見できたのかなあと思います。最後にお化け屋敷の迷路をつくることになった時には、いままで班でしか行動していなかったのに、大きなまとまりでみんなで考え始めた子どもたちの姿がありました。「どこに隠れようかな？」「○○ちゃんはそこに隠れて！」など、お化けを驚かせるためにみんなが協力して考える姿がすてきだなあと感じました。

５．青木村産業祭参加

今年も青木村の産業祭に、<「信大 YOU 遊未来」青木>としてブースを出させていただきました。一日だけの出店となってしまいましたが、50名を超える子どもたちが来て、一緒にスライムや写真たてを作りました。中には一人で夢中になって5個も6個もスライムを作っている子も見られました。そんなに子どもたちが多く来ると思っていなかったので、コップや絵の具、フィルムケースがなくなってしまい、好きな色のスライムが作れなくなってしまう子どもが出てしまったことは反省点となりました。来てくれた子どもたちと一緒に産業祭の中を回ったり、お店のお手伝いをしたり、また普段の企画とは違う関わりの中で子どもと触れ合う場面ができ、その子の新しい一面が見れたのではないかなあと感じます。また、企画の中ではあまり関わることのできない地域の方との交流の場でもあったと感じます。この産業祭を通して、普段企画を見ていない地域の方に、私たちがどのように子どもたちと接しているかということを見ていただけたのかな思います。すべてではないけれど、公共の文化会館や公園を一日使わせていただいて企画をするということは地域の方の理解が必要になってくるので、少しでも YOU 遊の活動に理解をしていただけたのかなと思いました。

6．ぽっかぽか・うぃんたー～サンタさんからのホクホクな贈り物～

ぽっかぽか・うぃんたーでは、84人もの子どもたちが参加してくれました。これは、過去最高の参加人数でした。企画内容としては、サンタさんが提供してくれた食材ゲットゲームをして、そこで得た食材を外の広場で焚火をして焼いて食べるというものです。一班に低学年の子どもと高学年の子どもを入れることで、高学年の子どもが低学年の子どもの面倒をみる姿が見られたり、班毎に複数のゲームをクリアしていく中で団結力が深まっていく様子が見られました。また、今回の企画では様々な課題が多く見つかりました。子どもの人数に対し学生の人数が少なく、参加学生にはとても迷惑をかけてしまいました。今までの企画ではどうにかなっていた部分も子どもの人数が増えるとどうにもならなくなってしまい、企画中に色んな学生から問題点を指摘されました。子どもの人数が多く、私は子どもたちをまとめることができず、長副三人とも自分の力のなさを痛感した企画にもなりました。

7．児童センター訪問

今年度の青木プラザは、子どもたちにも学生にも様々な出会いをしてほしいという願いがありました。そこで長副三人で考え、そこで思い付いたのが、児童センター訪問です。これは、月に1～2回ほど児童センターに訪問して、そこに来る子どもたちと遊ぶものです。結果、私たちの願いのとおり、たくさんの子どもがたくさんの学生と出会い、仲良くなることができました。また、学生も参加しやすいので、青木に行ったことのない学生や YOU 遊に参加したことのない学生が多く参加してくれました。児童センターではたくさんの出会いが生まれ、私たち三人はとても嬉しく思いました。児童センター訪問がこれからも続いてくれることを願います。

◇実践から得た「臨床の知」

『幸せな時間』

土屋孝将（理数科学教育専攻3年）

一年間があっという間に過ぎていきました。この一年間、あおきっことたくさん関わることができました。しかも、参加者という立場ではなく、企画者という立場で。この一年間は、私にとってとても幸せな一年でした。その「幸せ」を書きたいと思います。

私は毎回の企画を考えるとき、正直、面倒に思ったときもありました。でも考え始めると、あおきっこたちの笑顔が浮かんできて、どんな企画内容にしたらあの笑顔を見ることができるか、いつの間にか必死になって考えていました。その考えている時間が幸せでした。私たちが考える企画は学生による劇を挟むものが多く、その劇の台本は私が考えていました。その台本を考えるときも、あおきっこがじっと観ている姿や、大きな声でツッコミを入れている様子を思い浮かべていました。その思い浮かべている時間が幸せでした。企画の班分けは長副三人でいつも話し合いました。その話し合いでは、三人の間で具体的なあおきっこの名前を出して班のバランスを考えました。そのあおきっこについて三人で話し合っている時間が幸せでした。そして何より、あおきっこが実際に企画で笑っていた

り、楽しんだりしている姿をみているときが一番幸せでした。このように私は青木プラザ長をやったことで、一年中幸せに包まれていました。もちろん苦しいこともありましたが、その幸せの方がとても大きく感じます。青木プラザの活動は残り二回あります。その二回ともあおきっこにとって楽しいものにしたいと思います。また、青木村教育委員会の皆さんや保護者の皆さん、学生の皆さんに感謝を伝えることができるように精一杯活動をしていきたいと思います。ありがとうございました。

やってよかった　室橋美咲（言語教育専攻３年）

去年、通学合宿にしか参加していない私が副プラザ長になるなんて、本当に思っていませんでした。正直なところ合宿に参加して楽しかったけどそれ以上に大変だと感じていたので、もういいかなと思ってほかの企画には参加してこなかったのに、今度は企画を中心になって考えるという立場になるということで、悩んで悩んで副プラザ長になることを決めました。私たちの代になってから一番最初に合宿があり、まだ何もわからない状態でしたから大きな行事で何をしたらいいのかいつ何をすればいいのかわからないことだらけでした。合宿の三役の中での話し合いも嫌で、早く終われと思ったこともありました。しかし大変だった合宿も終わり、児童センターや七夕企画、長泉、産業祭などの企画をしたり、参加したりしていくうちに、青木の子どもたちが私のことを覚えてくれて、「みーぽん」って寄ってきてくれるのがうれしくて、ちょっかいだしてくる子どもたちがかわいくて、この子たちのために次の企画も楽しいのを考えよう、と思うようになりました。たくさんの子どもたちと関わっていくことで、一人ひとりとの関わり方を学ぶことができ、考え方を知ることができます。それは班つきと副プラザ長と両方の立場として経験することができて、今は副プラザ長になってよかったと感じます。自由な活動をさせてもらえる青木村に感謝して、残りの活動をしていきたいと思います。

あおきっこと共に成長した一年　北村隼一（理数科学教育専攻３年）

青木村の子どもたちと関わり始めて約２年になります。今年度は、去年よりもたくさんのあおきっこたちと関わることができました。通学合宿をスタートに私たちの企画や長泉サマーキャンプなどたくさんの活動を一緒にやる中で、たくさんの「あおきっこのよさ」を感じてきました。初めてあった人に対してもすぐに遊ぶことができる姿、自分の思ったことを相手にしっかりと言うことができる姿、いつも元気な笑顔で学生と遊ぶ姿。そんな子どもたちの姿があるのは、様々な他者と関わる機会やたくさんの野外体験ができる環境があるからだと思います。あおきっこの教育に私たち学生も関わらせていただいていること、あおきっこと一緒に成長できることを嬉しく思います。

この一年の青木の活動を通して、私も大きな成長をすることができたと感じています。子どもたちと関わることだけでなく、先輩方や仲間とともに企画を作っていくことの難しさや大切さを知ったり、青木村の子どもたちのためにどうすればいいかを最初に考えられるようになったり、活動中に全体の様子をつかめるようになってきたりなど、たくさんのことを青木の活動から教わりました。そして、地域と関わることの大切さと楽しさ、青木村のあたたかさも強く感じることができました。

最後に青木村教育委員会の皆様をはじめ、保護者の方々、支えてくれた学生、関わってくれた方々に心から感謝しています。ありがとうございました。

◇地域協力者からの評価・

「通学合宿」でそだつもの　パート２　青木村教育委員会 教育長　沓掛英明

今年の通学合宿でのひとこまです。宿泊最後の金曜日の夕食は、この合宿でお世話になった方達をお招きしての感謝のパーティーでした。みんなで楽しく会食が進んでいたそのとき、小学生の一人の女の子が、友達とのトラブルが原因で、会場を出ていってしまいました。すぐに班付きの大学生のMさんが後を追って外に出ていきました。二人は廊下の椅子に座ってしばらく話をしていました。せっかくのパーティなのに残念だなあと見ていてちょっと気になっていました。ところが、Mさんから後

でそのときの話を聞いてうれしくなりました。

「私が、しばらく横にいることで、あの子は落ち着いてきました。そのうちに、話をしてくれました。あの子は、自分が悪いことをしてトラブルになってしまったことが分かっていて、友達に謝りたいと思っているんだけど、何て言って謝ったらいいか分からないと言って悩んでいたんです。私は、子どもってすごいなと驚きました」と言うのです。

大勢の人が集まっている楽しい会食会で、友達とトラブルを起こす子は、一見すると自分勝手でわがままな子に思えます。しかし、その子に寄り添うことで、その子の悩みや思いに気づくことができます。大人は、「問題を起こす子はよくない。問題を起こさないように押さえないといけない」と考えがちですが、実は子どもにはそうせざるをえない理由があることがあります。更に、子どもたちはそのようなトラブルや問題を解決することで生きる力を獲得しているのだとも言えます。今回、トラブルを起こした子は、一緒に悩んでくれたMさんの存在に救われました。またMさんは、子どもの心の奥にある優しい気持ちに気がつきました。こんな出会いが、そこここに展開されているのが、通学合宿や信大 YOU 遊未来企画の醍醐味だと感じています。

今年も、青木村では、皆さんからの絶大なお力をいただいて、感動的な合宿や夏休みの静岡長泉サマーキャンプ等の事業を充実のうちに行うことができました。11 月 30 日に行った村を挙げての一大行事である「子育てフォーラム」のシンポジウムでは、青木プラザの代表である土屋君にシンポジストを依頼し、学生の皆さんが村の子どもたちの育成に深くかかわっていただいていることを、広くお伝えすることもできました。今年も、多くの学生のみなさんにかかわっていただき、子どもたちの育ちをしっかり支援していただいたことに心から感謝しております。本当にありがとうございました。

あおきっこに一番近い大学生

青木村教育委員会 主事　多田宇宏

「信大 YOU 遊未来」の教師教育学研究第 20 集の発刊 おめでとうございます。今年も青木プラザの皆さんには、通学合宿をはじめ「長泉サマーキャンプ」、「青木村産業祭」、「子育てフォーラム青木」など、たくさんの村主催行事に御参加・御協力をいただき厚く御礼申し上げます。

さて、学生の皆さんが主催となり青木村で展開している独自の企画については年々子どもたちにも浸透して、今年も多くの子どもたちが参加させていただきました。中でも特筆すべきは、12 月の企画に 80 名以上の子どもが参加したことです。これは青木小学校の全児童数の約 3 割という驚異的な数字になります。これには私自身が驚かされました。私は子どもと関わる仕事を担当して三年目になりますが、行政主導でここまで子どもを集められる魅力的な催しはあまり聞いたことがないからです。

では、皆さんの企画の何がこれほどまでに子どもたちを惹きつけるのか。一番の要因は子どもとの距離の近さだと思います。私は企画の度に、皆さんと子どもたちがニックネームで呼び合う姿にいつも感心させられます。皆さんが当たり前に行っているこの行為は、決して簡単なことではありません。ニックネームで呼ぶためには顔・名前を覚えることはもちろん、子どもと親密な関係を築かなければならないからです。そして次の企画のときに学生さんと再会し、再びニックネームで呼ばれて出迎えて貰えれば、子どもたちにとっては、『「わたし」は「あなた」に会いにきたんだよ』と言われているようなものです。子どもたちにとってこれほど嬉しいことはないでしょう。この距離の近さが、子どもたちにとって一番の魅力なのではないでしょうか。

また、青木プラザの企画に欠かさず参加している児童の一人は、次のように語っています。「私は大きくなったら大学生になりたい！」…と。小学生が語る夢としてはとりとめもないようにも聞こえます。しかし、この言葉は「私は YOU 遊の学生さんのような素敵な大人になりたい！」とも読み替えられます。青木の子どもたちにとって、皆さんの存在が非常に近く大きなことを示している言葉です。信州大学と青木村は、物理的な距離としては約 50km も離れています。それでも、今後も、皆さんには「あおきっこ」に一番近い大学生として、子どもたちと触れ合っていただきたいと思います。来年度も青木村で楽しい企画を開催していただけることを心から期待しております。

「信大YOU遊未来」麻　績（9年目）

プラザ長　北野雄大（社会科学教育専攻３年）
副プラザ長　新井雅菜（生活科学教育専攻３年）

○学生スタッフ名

百瀬あきほ(実４)　羽田　鋭(実４)　八木恵理子(言４)　岩瀬　由依(言４)　北見　聖(言４)
飯島　莉奈(言４)　後藤　莉奈(言４)　月岡　優介(社４)　小平　早紀(地４)　渡邉　玲菜(音４)
成瀬　貴心(保４)　竹本　崇史(生３)　池田　隼人(保３)　小塚　尚士(野３)　木田　達也(社３)
横田　克己(社４)　中野　直輝(社３)　畠山　智晴(社３)　加藤　貴浩(社３)　熊崎　草太(社３)
石川　真人(理３)　北村　隼一(理３)　土屋　孝将(理３)　上野なつみ(生３)　新海　朋美(生３)
渡邉　真美(生３)　大嶋　拓優(現２)　松井　六(現２)　土屋ひかり(現２)　関口　美緒(現２)
上原　瑛美(現２)　金沢　優花(現２)　牛山　麻衣(現２)　ﾍｯﾄﾞ岬ｱﾝｼﾞｪﾗ(現2)　森下　結衣(現２)
則竹　美玖(現２)　小宮山翔平(社２)　相馬　彩乃(音２)　井上 陽介(技２)　小川　真紀(家２)
岩沢ひかり(特２)

○参加者数　　子ども70人

○連携団体　　麻績村教育委員会　麻績村立麻績小学校　昔遊びの会　地域おこし協力隊

○プラザの概要

「信大YOU遊未来」麻績は、長野県中信地区にある東筑摩郡麻績村で、「麻績村dE遊ぼう！」として発足してから８年目になった昨年に、「信大YOU遊未来」麻績と名前を変更しました。したがって今年は、「信大YOU遊未来」麻績として２年目、麻績村の活動としては９年目になります。

本プラザでは、「おみっこ元気クラブ」という麻績村の方々が企画・運営する活動の中に、学生で内容を企画・運営する「YOU遊」の活動を年４回取り入れていただいております。今年度は、学生企画の中に新たに「おみっこ通学合宿」を取り入れ、さらに幅のある活動となりました。麻績村教育委員会の方々や地域の方々と学生が連携して、麻績村の風土・特色を生かした活動になっています。聖高原や麻績川のような美しい自然に囲まれながら、温かみのある地域の方々と一緒に育つ麻績の子どもたちは、人懐っこく素直で、元気いっぱいの子どもたちばかりです。そんな子どもたちと地域の方々と一緒に作る本プラザは、地域性豊かで、明るい雰囲気に包まれ、活動的な内容となっています。

○活動目標

子どもたちが身近な自然の中で体験することや地域の方や学生と関わる活動の中で、仲間との助け合いや支え合いをする喜びや楽しさに気づくことによって、豊かな人間に成長できるように活動を企画する。

○一年間の活動

活動日	活動内容	活動日	活動内容
5月11日	おみっこ大冒険	10月12日	秋の遠足
5月25日	秘密基地作り	11月　9日	麦まき＆ やきいも
6月22日	麦刈り＆ 宝探し	11月13～16日	おみっこ通学合宿
6月29日	麦の脱穀	12月14日	たたきゴマ作り、回し大会
7月19日	麦茶作り	1月18日	冬の山
7月31日	ウォーターアドベンチャー	2月1日	竹とんぼ作り
8月31日	おさんぽ大冒険！	2月15日	学生企画④（検討中）
9月28、29日	オータムキャンプ	3月20日	麦ふみ

○各活動内容

第1回　5月11日　おみっこ大冒険

第20期「信大YOU遊未来（CHANCE）」麻績で行う初めての企画。今回の企画では体を動かし、みんなが笑顔になれるような活動、そして麻績のことを知れるような活動をしようと決めました。企画名を「おみっこ大冒険～姫の宝を取り戻せ～」とし、天王社までのウォークラリーを企画しました。しかし、外での活動ができると期待していましたが、おにぎりを作っている間に雨が降ってきてしまい、残念ながら室内での活動になってしまいました。そんなことにもめげずに、子どもたちは宝を取り戻すために交流センターの中を行ったり来たりしながら各階にあるチェックポイントに次々と挑戦していました。午後はさらわれてしまった姫を助けるため、班ごとの課題解決に加え、体育館で学生も巻き込んだ活動をしました。チェックポイントを楽しそうにやっている表情や自分たちの力で取り戻した宝を嬉しそうに見ている表情など、子どもたちの様々な表情を見ることができた1日でした。プラザとして初めての学生企画であることに加え、雨案への変更で終始バタバタとしてしまいましたが、学生の臨機応変な対応でけがも無く、なんとか無事に活動を終えることができました。しかし、企画をただやるだけになり目的が曖昧になってしまったため、みんなで企画を作りあげていくことの難しさを感じたスタートになりました。

第2回　5月25日　秘密基地作り

麻績村の豊かな自然を使い、自分たちの秘密基地を作りました。活動が始まり、まずは秘密基地をどこに作るか班ごとで決めました。昨年も秘密基地作りを行っていたため、子どもたちは林の中に入ると、「大きな木があるところがいいよ。」「この木があればブランコができそうだよ。」と自分たちでどんどん秘密基地を考えていました。活動が始まると葉っぱをたくさん集める子、のこぎりを器用に使う子など、低学年と高学年の子が協力しながら自分たちの基地を作っていました。2階建ての秘密基地や、ブランコがある秘密基地など、思い思いの秘密基地が完成しました。自然の中での子どもたちは本当に生き生きとしていて、麻績の恵まれた自然の素晴らしさも感じることができました。

第3回　6月22日　麦刈り＆ 宝探し

昨年子どもたちが種をまいた麦を刈りました。経験のある高学年の子どもたちは慣れた手つきでどんどん麦を刈っていましたが、経験のない子どもたちはなかなか麦が刈れず、最初は苦戦していました。しかし、昔遊びの会の方にコツを教えてもらい、しばらくするとどんどんと麦を刈っていました。残念ながら、全ての麦を刈ることはできませんでしたが、刈った麦を縛り、干すところまで体験できました。そして、午後は宝探し。前回作った秘密基地の中を無我夢中で駆け回る姿は子どもたちのパワーを感じられるもの。「楽しかった！」「もう終わりなの？」と学生によって来て話しかける姿からは、自分の感情をそのまま表せるおみっこの素直さが表れていました。

第4回　6月29日　麦の脱穀

先日刈りとった麦を脱穀しました。現代風の機械を使うのではなくて、唐箕のような昔ながらの道具を使って行いました。少しタイムスリップしたような、そんな活動になったのではと思います。やったことがある子どももやったことがない子どもも、我こそはと道具を使おうとする姿は、積極的に参加しようとしている姿であり、昔ながらの作業に興味や関心を持ちながら取り組んでいたことに大変うれしく思えました。

第5回　7月19日　麦茶作り

脱穀した麦を使って麦茶を作ります。麦茶を手作りで行う経験はなかなかできないものでしょう。フライパンで炒った麦を何百個もパック詰めするのは、なかなか根気のいる作業となりました。完成した麦茶を他のお茶と飲み比べする「麦茶ソムリエ」にも生き生きと楽しめている様子でした。

第6回　7月31日　ウォーターアドベンチャー

みんなで麻績川へ行き、いかだを作りました。低学年はペットボトルを紐などでしばりつけるいか

だ、中学年はポリタンクなど浮かびやすいものを自分たちでつなげたいかだ、高学年は竹や木を自分たちで切り、つなげたいかだを作りました。暑い日差しが照りつける中、どのチームもいかだづくりに熱中していました。そして後半は自分たちで作ったいかだを浮かべ、それに乗って遊びました。いかだ乗りは徐々に水遊びに変わり、帰るころにはみんなびしょぬれになりながら楽しんでいました。

第7回　8月31日　おさんぽ大冒険！

今回の活動では麻績村を飛び出し、松本市の信州スカイパークへ行きました。子どもたちでグループを作り、アスレチックやボールで遊んだり、スラッグラインという綱渡りをしたりと思い思いの遊びを楽しみました。飛行機の飛び立つ時間には滑走路の横へ行き、離着陸の様子を間近で見ました。離着陸の音に驚く子や飛行機を追いかけて走り出す子、飛行機に手を振る子もいました。スカイパークの広い敷地でおもいっきり走り、おもいっきり遊ぶことができ、子どもたちの笑顔をたくさん見ることができました。

第8回　9月28、29日　オータムキャンプ

1日目：9月28日		2日目：9月29日
8：30　開会式		6：00　起　床
9：00　アイスブレイク		7：00　朝　食
9：30　イベント		8：30　逃走中
12：00　昼　食		11：00　昼　食
13：00　クラフト	19：00　肝試し	13：30　掃除・片付け
15：00　野外炊飯	20：30　就寝準備	14：00　閉会式
18：00　キャンプファイヤー	21：00　就寝	15：00　解　散

今年のキャンプは、学生27名・子ども54名という規模で行われました。約3か月前から準備を進め始め、学生同士で意見がぶつかり合ったり深め合ったり、時には一緒に楽しい時間を過ごしたりと、メンバー全員で作り上げるというキャンプになったのではないかと思います。

今回のキャンプテーマは、「新しい自分に出会うキャンプ」です。子ども・学生・麻績の方みんなで、「今年らしい麻績キャン」を作りたい。子どもたちが1つでも成長・気づきを実感できるようなキャンプにしようと、立ち上がり進めてきました。ただ、学生と寝泊りするだけでは例年と一緒のキャンプになってしまうと考え、キャンプをやるためには1人の力ではできない、仲間が必要なことや、そこからいろいろな人々とのつながりを実感してほしいという願いを含めました。当日の野外炊飯や自然と親しむことなどから、「キャンプでしかできないこと」、およびキャンプ中のいろいろな場面から、「新しい発見」や、普段はできないことができるようになった、という声が子どもたちの中から聞こえたときには、キャンプを作り上げてきた達成感と同時に、これらのことは教育委員会の方や地域の方、たくさんの人に支えられてできたことなのだという喜びが込み上げてきました。今回のキャンプで起こったことのすべてが、学生みんなの糧になったと思います。

第9回　10月12日　秋の遠足

今年の秋の遠足は、聖山と冠着山に登りました。麻績村の周りにはたくさんの豊かな自然がありますが、なかなか子どもたちが直にそれに触れるということが多くはありません。「もう疲れたよ。」といっている子どももいたり、列から遅れてしまっている子どももいたり。なかなかハードな遠足となりましたが、頂上へ上った時に見える景色はやはり格別のもの。子どもたちも、スーッと疲れが抜け、元気いっぱいはしゃいでいました。豊かな大自然に囲まれた麻績村にじかに触れる体験は、子どもたちにとって貴重なものとなったことでしょう。また、子どもたちから無尽蔵に湧き出るパワーには圧倒され、さらに子どもたちの魅力を感じることができる活動になりました。

第10回　11月9日　麦まき＆ やきいも

毎年行っている麦の活動。これが麦の活動の始まりとなります。来年育ってくる麦を楽しみにしな

がら麦まきをする子どもたち。毎年やっているからなのか、学生より上手な子どももたくさんいました。昔遊びの先生から作業を教わりながら活動している姿は、地域のつながりが目の当たりにできる温かな姿。麦の活動が毎年できるのも、麻績村の地域色があるからだと実感できる活動でした。そんな活動が終わった後に食べた焼きいもは、格別の味だったことでしょう。

第11回　11月13 ～ 16日　第1回おみっこ通学合宿

麻績で通学合宿を行うのは、今回が初めてです。今回の合宿テーマは、「自分を見つめる～生活・ことば・考える～」です。通学合宿を通して自分の生活を見つめなおし、ご飯を食べる大切さ、睡眠の大切さなどに気づいてもらいたい、生活の基礎を作りたいという願いからスタートしました。みんなでご飯を作り、一緒に食べる楽しさや、一つひとつの会話から生まれるつながりなど、小さなしあわせを感じてもらいたい、たくさんの子どもたちと話して、遊んで、麻績の方・学生・子どもが1つの大きな家族になりたい･･･。しかし、いざ始まってみると、なかなかうまくいかないところもたくさん出てきました。食事、清掃、タイムスケジュールなどたくさんの課題点が見つかり、多くの学生スタッフに負担を強いてしまいました。そんな中でも、臨機応変な対応で何事もなかったようにこなしてしまう学生、力強いバックアップをしてくださる麻績の方々に何度も助けれ、今回も人と人とのつながり、絆、あたたかさ、を実感することができ、大変嬉しかったです。子どもたちの姿も印象的でした。普段は手伝いをしない子も進んで調理したり、言葉づかいが悪い子も「もう悪口を言わないと友達と約束したんだ」と、通学合宿を境に言葉づかいがよくなったり、様々な成長が見られました。「来年もまた来たい」、「次は7泊8日がいい」という声を聞いた時には、自分たちがやってきたことが報われた思いでした。子どもの成長に間近で立ち会えた素晴らしい活動だったと思います。

タイムスケジュール例（2日目日程）

5：45	起　床		
6：00	朝食準備・清掃	17：30	入浴
6：30	朝　食	18：30	夕食準備
7：00	登　校	19：00	夕食
----------		20：00	フリータイム
16：30	帰宅・おやつ	20：30	班ミーティング
16：50	宿　題	21：00	就　寝

第12回　12月14日　たたきゴマ作り、回し大会

「今年のたたきゴマ大会は優勝したいな」。多くの子どもたちがそう思って、この活動にやってきます。たたきゴマとは、一見普通のこまなのですが、まわし方が独特で、まわり始めた後に回転を維持するために布でたたきながら回すこまのことです。1年生から4年生は小刀を、6年生はなたを使って木を削っていきます。使ったことがない子どももたくさんいるはずでしたが、上手なコマを作りたいという気持ちからか、熱心に作業を進める姿が印象的です。コマが出来あがると一目散にまわしに行く子どもたち。なかなか回せない子に上級生がアドバイスをしている姿は、子どもたち同士のつながりの表れだと思います。大会が始まるととても白熱し、優勝を目指して頑張る姿、戦う友を応援する姿、負けてしまって落ち込む姿。大人顔負けの集中力を出して活動でき、地域の方とも協力でき、たくさんのつながりが見られた活動であったなと実感しています。

◇実践から得た「臨床の知」

子ども、そして地域の力

北野雄大（社会科学教育専攻3年）

私は、中信地区松本市の出身です。「麻績」という地域には大学に入るまで足を踏み入れたこともなく、どんな場所なのかは全く知りませんでした。そんな私ですが、今では麻績という地域と麻績の人たちが大好きです。たくさんの魅力を感じさせていただき、エネルギーをもらい、成長させていただいた場、「麻績」。一年間プラザ長をやってきて「麻績」がかけがえのないものとなりました。

私たちが活動に行くと、いつも元気に迎えてくれる子どもたちの表情は何とも言えません。またこ

こにきてよかった、そう思わせてくれます。子どもたちと元気に活動した後は、麻績の方々とお茶を飲んだりご飯を食べたりしながら語らいの時間をもちます。またここに来たいな、と思わせてくれます。「プラザ長って大変じゃないの？」と聞かれることもよくありましたが、確かに大変なことの方が多かったです。企画をする中で辛い思いをしたこともよくありました。でも、そんな辛いことなど、「麻績」に行けば忘れさせてもらえるのです。不思議と疲れが取れていき、元気をもらえる、麻績村の持つ力はすごいなと実感します。子どもたちの持つ力は、学生の想像の範疇を軽く超えてきます。通学合宿でも、これは難しいかなと思うことでも何食わぬ顔でこなしてしまう姿には驚かされました。そんな子どもたちとの関わりはとても楽しく、自然と笑顔になれました。思い返せば、私の方が年齢は上なのに、子どもたちからたくさんのことを教わったと思います。また、「麻績」の方々には本当に頭の下がる思いです。様々なことに挑戦できたのも、「麻績」の方々の支えがあったからです。楽しく、温かい人柄で、こんな場所で働きたいなんて考えてしまうことがあったくらい本当にいい方々でした。

感謝の気持ちを持つことは、当たり前のことだと思いますが、なかなか感謝を伝える機会はないのでこの場を借りてお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。最後に、たくさんの人に支えられて一年間やれたことに本当に感謝です。この人と人のつながりが「YOU 遊」の魅力であると、プラザ長をやって実感できました。一年間活動してきて得ることができた子ども、そして地域の力を胸に、これからもがんばっていきたいと思います。ありがとうございました。

えがお

新井雅菜（生活科学教育専攻３年）

わたしと「麻績」の出会いは、２年生の時に参加した麻績キャンプでした。引き継ぎの時期になり副プラザ長の話をもらった時、最初わたしには無理だと思いました。人に流されやすく、自分の意見をまとめることも苦手なわたしが、みんなをまとめることはできないと思ったからです。しかし、「おみっこ」が好き！「麻績」の活動をもっとたくさんの人に知ってもらいたい！そんな気持ちから、不安ながらも副プラザ長をやることに決めました。

副プラザ長としての１年間は、あっという間でした。企画に対して見通しを持てなかったり、わたしが副プラザ長じゃなければよかったのかなと悩むこともたくさんあったりしました。それでもわたしがここまでやることができたのは、「麻績」に来てくれる学生や麻績村教育委員会の方々をはじめとする多くの方々の支え、そして活動に参加してくれる「おみっこ」の『えがお』があったからです。子どものことを第一に考え、何回も企画を練り直し、寝る間も惜しんで準備する学生。「なんか手伝えることある？」と気にかけてくれる学生。そういった多くの学生の力があって、企画をやりきることができました。今まで「麻績」の企画に参加してくれた学生のみなさんが一人でも欠けていたら、うまくいかなかったでしょう。そして、学生の無茶な要望に対し、いつも親のようにやさしく見守ってくださった麻績村教育委員会の方々。企画の時点から何回も相談に乗ってもらい、当日の活動ではわたしたちを笑顔で、手厚く支えてくださいました。その支えがあるからこそ、わたしたちは楽しく、思いっきり活動ができました。本当にありがとうございました。そして大好きな「おみっこ」のみんな。企画で何人集まるか毎回毎回不安でしたが、習い事を休んできてくれる子や、親を説得してまで参加してくれる子もいると聞き、本当にうれしくなりました。企画を考えるのは大変ですが、活動中の子どもの笑顔や終わりの会の「たのしかった！」「もう終わっちゃうの？」という声を聞くたび、がんばってよかったな、やってよかったなと感じます。

わたしは「麻績」の活動に参加すると、自然と笑顔になれます。それは大好きな「おみっこ」に会え、「麻績」の人々・地域・自然が作り出す、温かさに触れられるからです。そして、子どもと一緒になって楽しむことができる安心感があるからです。大好きな「麻績」で副プラザ長ができて本当に幸せでした。１年間本当にありがとうございました。

◇地域協力者からの評価

「歩　　み」

麻績村教育委員会 社会教育指導員　小松小百合

「おみっこ元気くらぶ」は、麻績小学校全児童数の８割を越す 91 名の登録を得て、今年度も元気に活動をしています。年間 20 回の活動のうち、「YOU 遊未来」さんが企画する活動はいつも子どもたちに大人気で、児童の参加率がぐんと上がります。学生さんたちの来村を楽しみに待っているのは、子どもたちだけではありません。一緒に活動している地域の方や保護者、事務局スタッフも学生さんたちがいてくれることを励みに思い、我が子や我が孫に接するような姿も見られます。その様子が自然であり、相互に良い交流ができていると感じます。いつも子どもたちに会いたいと麻績に足繁く通ってきてくださる学生さんたちに、心から感謝しております。

さて、今年度の「おみっこ元気くらぶ」は日程の変更が相次ぎ、正副プラザ長の北野雄大さん、新井雅菜さんにはいろいろな面でご苦労をおかけしました。加えて新たな試みである「通学合宿」が、教育実習やキャンプに続いて行われるという、ゾッとするような日程を組まざるを得ない状況下、皆さんが弱音も吐かず、前向きな態度で頑張り通した姿は立派なものでした。何より大きな混乱もなくここまで無事に活動ができたということは、皆さんの努力と情熱の賜物であり、また若さというエネルギーだけでなく、仲間同士の様々な力で支えあっての成果であったと感じます。私自身、今年度は家の都合や体調などにより、大事な場面で事務局スタッフはじめ学生の皆さんにもご迷惑をおかけすることがありました。申し訳ないとは思いつつ、安心して周りの皆さんにお任せできる状況にあったことは何より嬉しく、また有り難いことでした。偶然とはいえその場に居合わせた者でチームを組み、学生さんも含め、この３年間「おみっこ」の活動に携わってきました。「大変！」などと言っている暇も無い時期を過ごし、また活動をめぐっての意見のぶつけ合いも山ほどしてきました。その中で信頼という土台ができ、それぞれの持ち味が上手く融合し、目標に向い一丸となって進めるチームに成長してきたのだと思います。人との関わりが希薄化していると言われるこの時代に、なんて贅沢な経験をさせてもらっていることでしょう。

勿論、「おみっこ」の歩みは今後も続きます。むしろ、これからが真価を問われる時期に入っていくのだと思います。子どもたちの今ある姿をしっかり捉え、先を見据えて関わりながら子どもたちの成長の場に立会い、内から輝く笑顔にたくさん出会えることを願いながら、これからも「YOU 遊未来」の皆さんと共に、一緒に歩んで行けたらと思います。１年間、本当に有り難うございました。

「信大YOU遊未来」須　坂（8年目）

プラザ長　坂田好恵（野外教育専攻4年）

○学生スタッフ名

山崎花奈子（言4）　遠山　芽衣（生4）　羽田　　鋭（実4）　成瀬　貴心（保4）　飯島　莉菜（言4）
宮田巴都樹（特4）　渡邉　玲奈（芸4）　林　志桜里（生4）　松島　宏俊（実4）　横田　克己（社3）
上野なつみ（生3）　三井　夕井（言3）　太田　　咲（言2）

○参加者人数　　子ども　51人

○連携団体　信州すざか農業小学校豊丘校　須坂市教育委員会子ども課　須坂園芸高校やさいクラブ

○プラザの概要

須坂市教育委員会が主体となって運営している活動である。須坂市豊丘「そのさとホール」及び豊丘地区の農地で、4月から翌年2月までの約1年間にわたって、農業体験や調理、遠足などの活動を行っている。年間の活動計画は、須坂市教育委員会子ども課と須坂市教育委員会子ども課に依頼を受けた農家先生が決定する。活動においては、須坂市教育委員会の職員の方々、農家先生、須坂園芸高校やさいクラブの生徒とともに、運営のサポートや子どもたちのサポートをする。

○活動目標

学生が子どもたちと一緒に活動し、子どもたちをサポートすることを通して、異年齢の人々のつながりを活発にすることで、コミュニケーション能力を身に付けられるようにする。

○一年間の活動

活動日	活動内容	
1．4月13日（土）	農業小学校で友達いっぱいつくろう ～これから1年よろしくね～ 畑の授業もはじめよう！　・じゃがいもの植付け	・入学式 ・オリエンテーション
2．5月11日（土）	作物の種を植えて育てよう！ ・とうもろこし、ねぎの植付け　・畑の手入れ	
3．5月25日（土）	泥んこになって田植えをしよう！	・田植え
4．6月15日（土）	さつまいもは苗を植えて根が出るんだ！ 畑の手入れも大事な作業だね！　・畑の手入れ	・さつまいも苗の植付け ・大豆の種まき
5．7月6日（土）	豊丘ダムで夏を満喫しよう！ ～ダムの周りを探検してみよう～	・夏の遠足
6．7月20日（土）	こんなにたくさん取れたよ。 ～小麦粉でおやきやひんのべに～	・麦の刈り取り、脱穀 ・草取り
7．8月3日（土）	初めての収穫たのしみだね！ ～収穫した作物を蒸かして食べてみよう～ そばの実ってこんな形をしていたの？	・じゃがいもの収穫 ・とうもろこしの収穫 ・そばの種まき
8．8月24日（土）	おやき作りは楽しいよ！ 伝統行事を学ぼう！	・おやきづくり ・御射山祭の行事を学ぶ
9．9月8日（日）	こんなに小さい種なの？ ～大きくなるのが待ち遠しいね！～	・秋の野菜の種まき （白菜・野沢菜・大根など）
10．9月23日（祝）	稲の穂が実ったかな？	・稲刈り
11．10月5日（土）	こんなにお米が取れたよ！ さつまいものでき具合はどうかな？	・稲の脱穀 ・さつまいもの収穫

12. 10月19日（土）	そばや大豆をうまく刈れるかな！ 豊丘の地域を散策しよう！	・そば、大豆の刈り取り ・豊丘離山の散策
13. 11月2日（土）	大豆を使って何が作れるのかな？ これがそば打ちの粉になるんだネ。	・大豆の脱穀 ・そばの脱穀
14. 11月16日（土）	収穫はたのしいな！　・野菜の収穫 焼いもと「ひんのべ」で収穫祭だ！！	・焼いもと「ひんのべ」交流会
15. 11月30日（土）	そば打ちをして食べよう！ ～そばを打つのは大変だ～	・そば打ち体験
16. 12月14日（土）	「ペッタン　ペッタン」もちをつこう！ ～収穫したお米でもちつきだ～	・もちつき大会
17. 1月11日（土）	米の粉でまゆだまを作ってみよう！ ～形もいろいろむずかしいよ～	・ものづくり ・どんど焼き
18. 2月15日（土）	もう卒業。さみしいネ！～ありがとうございました～	・卒業式

◇実践から得た「臨床の知」

願　い

坂田好恵（野外教育専攻４年）

私は、須坂の活動に参加し始めて３年が経とうとしています。この３年で活動に参加できた回数は、たった数回です。数回しか参加することができないのに、信州すざか農業小学校豊丘校は暖かく迎え入れてくださいます。子どもたちをはじめ農家先生や須坂市教育委員会のみなさんも、フレンドリーに話しかけてくださいます。そんな雰囲気の信州すざか農業小学校は、農業体験を中心に活動を行っています。私自身は、家に畑があり、幼い頃から農作業の手伝いをしていました。しかし、子どもたちを見ると、鍬の使い方が危なっかしかったり、苗を植えるのにとても苦労していたり・・・。農業離れが進んでいるように実感しました。農業は食生活にも関係のある大切なことです。だからこそ、この信州すざか農業小学校豊丘校は重要な役割を果たしているように思います。私が子どもたちと一緒に活動していると、「大豆ってこんな種なんだ。どんな味するのだろう？」と、植える前の大豆を口に入れた子がいました。その子は、日頃、口にしている大豆について興味を持ち、知ることができたと思います。その手助けを私たち学生はしています。

私たち学生は、活動の補助をするばかりではなく、学ぶことも数多くあります。私自身この活動で多くのことを学びました。農作業についてはもちろんですが、異年齢集団として活動することの意義を考えることができました。子どもたち、高校生、私たち学生、保護者の方、農家先生という幅広い年代の方々と一緒に活動し、お互いのコミュニケーションの取りかたの難しさを感じたこともありますが、その一方で楽しさも感じました。私自身もそうですが、日頃の生活で異年齢の方と接する機会は少なく、この活動を通して異年齢の方と接することの素晴らしさを改めて実感しました。この須坂のプラザの活動は、まだ信大にあまり広まっていません。須坂の活動がもっと広まり、活気あるプラザになることを願っています。

あたたかさを感じて

山崎花奈子（言語教育専攻４年）

入学式、田植え、さつまいも植え、そば、大豆取り、離山散策、野菜の収穫、焼き芋など、今年も農業小学校の活動に参加してきました。今年は一昨年、昨年以上に、子どもたちとたくさん関わるこ

とができたと感じています。「うちのおじいちゃんも白菜つくってるよ」、「農業小はもう３年目だからやり方わかるよ」と、色々な話をしながらの活動はとても楽しかったです。

田植えでは、初めて田んぼに入る子が、はじめは嫌がっていましたが、先に田んぼに入った友達やお母さんが楽しそうにしているのを見て、おそるおそる足を伸ばして、「グニャグニャだー！」と笑顔になっていたのをよく覚えています。恒例（？）の泥んこの戦いもあり、子どもも私も、Ｔシャツと半ズボンがどろどろになりましたが、晴天の下でたくさんの笑顔が見られました。さつまいも植えは、穴を掘ってさつまいもの苗を横たえて、上に土をかけ、池のようにくぼみを作って水を注ぎます。子どもたちは丁寧にその作業をしていました。種をまくよりも手間がかかり、時間もかかりますが、「土が流れないようにくぼみを作る」、「上にたまった水が少しずつ苗に届く」という農家先生の言葉を聞いて、さつまいものための植え方を知ることができたのだと思います。「自分でやってみる」ことを通して、農業の楽しさや、大変さ、食に対する意識を育てることができるのだなあと感じています。

今年は保護者の方と話をさせていただくことも多く、大学のことや教師について、子どもたちの成長についてなど、私たちには分からない親の目線からの言葉をいただきました。その時間もとても楽しかったです。農家先生は、活動日以外も畑の管理をしてくださっていて、子どもたちの活動を支えてくれています。女性の方々は、おやつにおいしいおにぎりやひんのべ汁を出してくださり、おかわりも超大盛りでよそってくださいます。農業を知り尽くした農家先生たちのあたたかい雰囲気の中で毎回活動している子どもたちがうらやましく思います。行くたびに次に来られる日が楽しみだな、と思って活動していました。また、今年は農業小に参加している５年生が２人、「YOU-YOU キャンプ」に参加してくれました。錬成センターで２人を迎えた時はとても嬉しかったです。このようなつながりを忘れずにいたいと思います。

私たち大学生が役に立てた部分は少ないかもしれませんが、いつも温かく迎えてくださる農家先生、事務局の方々、保護者の方には感謝の気持ちでいっぱいです。ひんのべ汁、大きくておいしい野菜もたくさんいただきました！本当にありがとうございました。

◇関係各方面の皆様より

目とからだで覚える

信州すざか農業小学校豊丘校校長　小林道男

農業小学校は、自分で種をまいて手入れをしながら作物の成長を観察し、そして収穫して食べる。実際に農作業を体験し、目とからだで覚える授業です。だから、教科書もノートもありません。畑で鍬（くわ）を使う。素足で田んぼに入って稲を植える。杵（きね）で餅をつく。かまどにくべる薪（まき）を斧で割る。まさに道具の握り方から足の出し方、腰の構え方など、力が道具に効果的に伝わるようにしなければ作業になりません。農家先生が手取り足取りで手ほどきしますが、最初はなかなかうまくいきません。でも、いちど体でこつを覚えてしまうと、次は自分ですいすいとやっていきます。

子どもたちをサポートしてくれている高校生や信大生たちもあまり経験がないので、腰や手足がばらばらでぎこちない形でやっています。こちらも一緒に農作業体験です。それから、女性の農家先生の指導によるおやきづくりやそば打ち体験は「おふくろの味」として親から子へ、子から孫へのノウハウの直（じか）伝授そのものです。機械を使わない手作業や昔の人が使った珍しい農具を使うことをベースにした授業は、素朴な道具を使う作業を通してバランス感覚を体で覚え、さらに昔からの知恵を学ぶことで、普段の生活の中でもちょっとした工夫や発想ができるようになると思います。五感を通じた、あるいは手足や肌での感触など、生活の原点的な体験や思い出が、これからの長い人生のどこかの場面できっと役に立つはずです。

１月のどんど焼きでは、伝統の繭玉づくり、火の粉や炎の熱さ、煙のにおいや目の痛み、太い青竹

の破裂など、危険を含めたくさん体験することがあります。種をまいて育て、収穫するなかで土とふれあい、作物を大きくする自然のいとなみを実際に感じ、安全安心の野菜を調理して食べる。また、毎回楽しみにしているおやつは、農家先生が農業小学校自作の野菜を使って前日から準備したもので、ひんのべや豚汁、五目おにぎりなど、とてもおいしいものです。自然の恵みを受けた食べ物に、そして、調理してくれた人たちに「いただきます」と言って感謝しながら食べる心も大事にしていきたいと思います。農業小学校は、自然の恵みを受けながらスローライフ、スローフードあるいはサバイバル的な自給自足を実感できる体験授業ではないかと考えています。

1年間を振り返って

信州すざか農業小学校豊丘校事務局　百瀬真弓

農業小学校は、子どもたちの健やかな成長を願い、年間を通した自然・体験活動の場として、また異年齢の子ども同士や家族・地域の皆さんとのふれあいの場として、平成 17 年に開校しました。以来、各方面の皆様のご協力を得ながら取り組んでまいりました。活動の拠点である須坂市豊丘は普段は静かな農村地域ですが、週末の授業日ともなると、子どもたちや農家先生の大きな笑い声が響く賑やかな場所へと変わります。今年度は、51名の子どもたちが入学し、1年間活動してきました。例年以上に低学年が多く、従来通りの授業で進めていけるのか、最初はスタッフも心配しましたが、低学年ということで親の参加も多く、親子、家族での作業風景があちらこちらで見受けられるプラスの面がありました。農業小学校の1回の授業はわずかな時間ですが、何かと忙しいお父さんお母さんが子どもと農作業を共にし、じっくり子どもと向き合える大変貴重な時間になると自負しています。

お陰様で、今年度予定していた作業は、比較的天候にも恵まれ無事に終了することができました。農業は楽しいだけではありません。作物を育てるには、暑さ寒さに関係なく畑に出て、草取りをしたり、水をやったりと子どもたちも途中で飽きてしまうような根気のいる作業の繰り返しです。また、鍬や鎌など農機具は常に危険を伴うもので、農家先生方は子どもたちが農機具を使用するたびに、ドキドキハラハラ気が抜けず、いつも以上に真剣な、ちょっとコワイ表情になってしまいがちです。そんな時に、信大の学生さんには大いに助けられました。笑顔で上手に子どもたちに声かけをして次の作業へと導き、常に農家先生と子どもたちとの潤滑油になってもらいました。5月の田植えの時でした。小学生に負けないくらい全身泥だらけになっている信大の学生さんを発見しました。小学生と同じ目線で、同じ体験をし、楽しんでいる姿を見て、口先だけで引っ張っていこうとしても子どもたちはついてきてくれないのだということを教えてもらった気がしました。

4月当初と比べ、子どもたちは畑での作業にも慣れ、どんどんたくましさを身につけていきます。また、回を重ねるごとに新しい仲間が増え、新しい輪ができ、笑顔がはじけている様子に、こちらも一緒に笑顔になります。子どもは遊びの中で育つものですから、これからも楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせたいと考えています。この1年間、ご支援ご協力をいただいた農家先生、応援してくださった保護者の皆様方、信大学生、園芸高校生徒、先生、皆様方に心より御礼申し上げるとともに、このような各方面との連携体制が今後も継続していくことを期待しております。

「信大YOU遊未来」大　岡（6年目）

プラザ長 酒井友輔（理数科学教育専攻3年）
副プラザ長 太田　咲（言語教育専攻3年）

○学生スタッフ名

山崎花奈子(言4)　北見　聖(言4)　後藤　莉奈(言4)　羽田　鋭(実4)　荒井　麻耶(実4)
月岡　優介(社3)　小松　一成(理4)　杣木　亮太(理4)　宮田巴都樹(特4)　北村　隼一(理3)
石川　真人(理3)　宇治　貢(理3)　木田　達也(社3)　飯田　杏奈(社3)　片山　莉沙(特3)
上野　暁(数2)　小宮山翔平(社2)　正木　文華(社2)　松井　六(現2)

○参加者数　子ども約20人

○連携団体　大岡子どもプラザ「わらわらクラブ」　長野市立大岡小学校　長野市大岡支所
農村女性ネットワーク　大岡温泉

○プラザの概要

長野市大岡での活動は今年で6年目を迎えました。月に数回、大岡の放課後子どもプランに参加させていただくことをメインに活動し、9月には5回目となる通学合宿を開催しました。また、来年2月にも、小中学校全学年対象のお泊りキャンプを企画しています。また、今年も福島の養護施設の子どもたちが大岡にキャンプに来て、地元の方々や学生と交流をしました。他にも地元の収穫祭である大岡ひじり三千石祭りのお手伝いや、大根プロジェクト2013や田植え、稲刈りなどの大岡小学校の行事にも参加させていただきました。温かい地域の方々のご協力をいただき、大岡の元気な子どもたちと一緒に、さまざまな活動をしています。

○活動目標

大岡の美しい自然や温かい地域の人たちの交流を通して、子どもたちが様々な人と触れ合うことを楽しみ、ふるさとの良さを感じられる活動をつくる。

○一年間の活動

活動回	活動日	活動内容	活動回	活動日	活動内容
1回	4月19日	わらわら訪問	11回	8月21日	大根種まき（大岡小）
2回	5月10日	わらわら訪問	12回	9月20日	わらわら訪問
3回	5月26日	田植え(農楽里ファーム)	13回	9月22～28日	わらわら通学合宿
4回	5月31日	わらわら訪問	14回	10月12、13日	福島キッズキャンプ
5回	6月7日	わらわら訪問	15回	10月25日	わらわら訪問
6回	6月21日	わらわら訪問	16回	10月28、29日	大根収穫、出荷（大岡小）
7回	7月10日	わらわら訪問	17回	11月毎週金曜	わらわら訪問
8回	7月19日	わらわら訪問	18回	11月2日	大岡ひじり三千石祭り
9回	7月21～25日	福島キッズキャンプ	19回	11月15日	合宿報告会
10回	7月26日	わらわら訪問	20回	12月4日	お礼の会（大岡小）

○各活動内容

大根プロジェクト

今年度も大岡小学校の大根プロジェクトに種まきから収穫・出荷まで、一年間を通して携わらせていただきました。8月のジリジリと焼きつけるような日差しのもとで種をまき、通学合宿中には間引きもしました。子どもたちと一緒に育てた大根が、10月にはとても大きく成長していました。子どもたちが泥まみれになりながら収穫したり、力を合わせてコンテナを運んだりする姿が印象に残ってい

ます。今年度の大根は「三太郎」というもので、先生方もできについて手探り状態だったようですが、甘みのあるおいしい大根に育ったため、子どもたちの笑顔はとても輝いていました。地域の方とも協力し、丹精込めて育てた大根が出荷され、また新たなつながりが生まれていくことのすばらしさを感じました。

大岡小学校のお礼の会では、大根プロジェクトで育てた大根を使ったおでんをごちそうになりました。大岡小学校の様々な行事に参加させていただいたことや、たくさんの方々との関わりを持つことができたことに、感謝いたします。ありがとうございました。

あったかホーム、わらわら

少なくとも月に一回、大岡の放課後子どもプラン、わらわらクラブを訪問させていただきました。わらわらクラブには心が休まるような温かさがあります。そこでは、宿題をする子、本を読む子、ボールで遊ぶ子、中で走り回る子、山を走り回る子など、子どもたちが思い思いの活動をしています。私たちがわらわらクラブを訪れると、子どもたちは笑顔で近寄ってきてくれます。

私たちの本来の目的はわらわらクラブのお手伝いのはずなのですが、ただ子どもたちと一緒に遊びたくて何度もお邪魔しに行ってしまいました。

第5回わらわら通学合宿

「第5回わらわら通学合宿」は、9月22日～28日までの7日間、長野市大岡にある老人福祉センターでを行いました。大岡小学校、大岡中学校の子どもたちが親元を離れて学生と一緒に生活をしながら、学校に通います。第5回を迎えた今年は、途中参加も含め、小学生（3年生以上）6人と中学生4人の合わせて10人でした。子どもたちと11人の学生たち、信州大学教授の土井進先生も参加されて、最大22人で宿泊生活を行いました。

22日の日曜日。同じ学校に通っているといっても一緒に生活することにはさすがに少々緊張気味でした。保護者さんと一緒に荷物を運び入れていた子どもたちの様子が印象的です。また、子どもたちの緊張がすぐに解けて走り回っていた姿を見たときには、ほっとしたことも覚えています。自己紹介やゲームをしたあとには、みんなで夢中になってペットボトルロケットを作って飛ばしました。夜はみんなで大きなテーブルを囲んで手巻き寿司パーティをし、「〇〇取って」などの会話をしながら、わいわいと仲を深めて、にぎやかに合宿がスタートしました。

23日月曜日は秋分の日ということで、午前中は運動会を行いました。かごを背負っている人を追いかけてボールを入れたり、袋に入って一生懸命跳んだり、ピンポン球を落とさないように運んだり･･･。子どもたちが友だちを応援する声が、グラウンドに大きく響いていました。午後は、ゲートボール協会の方々と一緒にゲートボールをしました。ルールや道具の使い方、審判のやり方を聞くみんなの表情は、真剣そのものです。競技が始まると、みんな夢中になってボールを打っていました。なかなかボールがゲートに通らず苦戦する顔、がっかりする顔、するりと通してのとても嬉しそうな顔。たくさんの表情がゲートボール場にあふれていました。夜はバーベキューの予定でしたが、強風のため火がつかず、予定を変更して室内での焼き肉パーティになりました。たくさんのお肉を食べてみんな大満足し、明日からの学校に備えました。

24日の火曜日からは、登校が始まります。「早くしないと遅れるよ！」「準備できた？」と言う声が大広間に響き、玄関では「行ってらっしゃい」「行ってきます」の掛け合いが聞こえてきます。昼間は子どもたちが学校に行っているため学生だけの時間となりますが、学生たちは子どもたちの帰りを心待ちにしながら待っています。元気に登校し、元気な「ただいまー」の声が聞けるのが、学生にとってはいちばんの喜びです。小学生たちは、帰ってきたら宿題をやります。小学生の中には、宿題をやりながら帰ってくる子もいます。宿題を終えるとバスケやバルーンアートで遊んだり、夕食の調理をしたりすると、もうお風呂の時間です。毎日、絶景の大岡温泉につかって一日の疲れを癒しました。夜は、中学生も一緒になって食卓を囲みます。夕食後は遊んだり、きれいな星空を眺めたりして、楽

しいひとときを過ごしました。

27日の金曜日は最後の夜。先生方やわらわらクラブの方を招いて、子どもたちの作った食事を食べたり、子どもたちによる出し物を楽しみました。親元を離れ、料理も身の回りのことも自分たちでこなし、生活した1週間。最終日の夜は一人ひとりみんなが活躍し、共に成長しあえたことが感じられる夜になりました。

＜通学合宿を終えて＞　いつもとは帰る場所も生活するメンバーも違う1週間。そんな生活だからこそ、気づくことや考えることもあります。友達と協力することの大切さを感じ、家族のありがたさやあたたかさを感じた人もいるでしょう。また、少しいやな思いをしたこともあったかもしれません。しかし、最終日には「楽しかったよ」と口にしながら帰って行く姿をみたり、「1か月やってほしい」と言う声を聞いたりすることができました。

通学合宿を通して成長できるのは、子どもたちだけではありません。学生も子どもたちと過ごす通学合宿の中で、今まで見えていなかったことに気づき、子どもたちと一緒に感動し悩み、そして楽しみながら毎日の生活を送りました。今年もこのように貴重な機会を設けてくださり、ご理解ご協力をいただいた地域の方々、保護者の皆様、大岡小学校や大岡中学校の先生方に心より感謝申し上げます。

2013福島キッズキャンプ

7月21日から25日までの4泊5日、福島市内の児童養護施設「福島愛育園」の子どもたち23人と職員さん6人が、大岡の農楽里ファームにやってきました。遠藤さんをはじめとする「福興ファーム点」の方々、アトリエDEFの方々、そして信州大学（信大）の学生7人で福島の子どもたちを迎えました。

一日目、お昼ごろに福島の子どもたちが到着しました。お昼ご飯を食べた後、自己紹介をしました。その後、さっそく自由時間となりました。バスの長旅を感じさせないほど子どもたちは元気に遊んでいました。その後、けん玉交流会をしました。けん玉が初めての子や、やったことのある子とさまざまでしたが、子どもたちはすぐに上達し、みんなが楽しそうにけん玉をしていました。けん玉交流会の後半では太鼓が登場し、これにも子どもたちは熱中していました。中には太鼓のゲームで腕を鍛えた子もいて、上手に太鼓をたたいていました。それが終わるとみんなで大岡温泉に入り、夕ご飯を食べ一日目を終えました。

二日目、起床し朝ご飯を食べた後、親水公園で水遊びをしました。遊んだあと昼食を食べ、班ごとに分かれて畑のお手伝いや夕食のお手伝いをし、二日目を終えました。

三日目、朝食をとった後、今回のキャンプの目的である田んぼの草取りをしました。みんな水着を着て、泥だらけになりながらの草取りになりました。途中で飽きてしまった子がカエルを追っかけていましたが、無事に終えることができました。そして、お昼ご飯は流しそうめんでした。田んぼの草取りでみんなお腹がすいたのか、流れてくるそうめんを必死に取り合っていました。その後、信大生と思いっきり遊んで、三日目を終えました。

四日目、順調にお昼を過ごし、夜になると、恒例となりつつあるお楽しみ会が開かれました。BBQをおいしく平らげた後、子どもたちからダンスと朗読のプレゼントがありました。そして、遠藤さんと副園長さんのライブを楽しみ、最後の夜を終えました。

五日目、子どもたちとしばらくの別れを惜しみながらめいっぱい遊び、子どもたちは愛育園に帰って行きました。

去年のキャンプが2泊3日だったのに対し、今回のキャンプは4泊5日でしたから、子どもたちと過ごす時間が長く、とても濃い5日間でした。去年と変わらず元気な子どもたちの姿を見ることができて、安心しました。

2013福島キッズキャンプ　稲刈り編

10月12、13日の2日間、福島市内の児童養護施設「愛育園」の子どもたちが、今度は稲刈りにや

ってきました。今回は子どもが19人、職員さんが5人で来てくれました。そして今回は、「南カリフォルニア日米協会」の方々がいらっしゃっての異文化交流のキャンプとなりました。

一日目、子どもたちが到着すると、さっそくお昼ご飯を食べました。お昼ご飯を食べた後に少し休憩をはさみ、さっそく稲刈りを開始しました。チーム分けをし、三つのチームに分かれて競争をしながらの稲刈りでしたが、田んぼが二枚あったにもかかわらず、子どもたちはすぐに稲刈りを終え、はぜかけまで終えてしまいました。おやつタイムをはさみ、自由時間がありました。稲刈りを終えても子どもたちは元気が有り余っていましたので、子どもたちが大好きな肩車をしながら走り回りました。大岡温泉で汗を流した後は、おまちかねのBBQでした。鮭をまるまる一匹使ったチャンチャン焼きや、肉や焼きそばがありました。お腹一杯になった後は、恒例行事のお楽しみ会でした。子どもたちは、英語の歌とダンスを披露してくれました。日米協会さんは、英語の遊び歌を歌って下さり、とても盛り上がりました。遠藤さんたちは、オリジナルの替え歌を披露して下さり、心が温まりました。最初から最後まで子どもたちの笑顔は絶えることがなく、お楽しみ会を終え一日目を終えました。

二日目、早朝に展望台まで散歩をしました。朝ご飯を食べた後、楽しい企画が二つ。一つ目は、和太鼓の演奏会です。戸隠山をバックに太鼓の音が周囲の山々に響いて、大迫力の演奏会でした。もう一つの企画は、金澤仁さんによるそば打ちの実演とそば打ち体験です。お昼ご飯に、その打ちたてのおそばをいただきました。その後は再び肩車をしながら走り回り、そしてお別れの時間となりました。

昨年に続き、福島の子どもたちが大岡に来るのは4度目です。お手伝いという形で関わらせていただき、子どもたちから毎回元気をもらいます。こんなに素敵な企画に誘ってくださった遠藤さんはじめ農楽里ファームの皆様、遠くから来て下さる愛育園の皆様、本当にありがとうございました。

◇実践から得た「臨床の知」

原点、大岡

酒井友輔（理数科学教育専攻3年）

この1年間はあっという間に過ぎていきました。YOU遊に関わるようになったのは、第4回わらわら通学合宿がきっかけでした。初めてのYOU遊で初めての大岡、初めて子どもたちと密接に関わり、稲刈りをして･･･と、たくさんの経験をして初めての活動でしたが、大岡という地が大好きになっていました。そんな活動をなくしたくない続けたいという思いから、プラザ長をしたいという気持ちが生まれました。

そんな感じで始まったプラザ長でしたが何をすればいいか分からない。気付いたら通学合宿を企画しなければいけない時期になりました。そして、同時に教育実習の時期でもありました。教育実習を乗り切りながら通学合宿でやらなければならないことを挙げていったのですが、なかなか進まない。なんとか終わらせて通学合宿本番に臨みましたが、本番も準備不足のおかげでドタバタとしてしまいました。途中、1回目と2回目の通学合宿のDVDを見る機会がありました。それを見て衝撃を受けました。先輩方の通学合宿に対する情熱が、自分とは比べられないほど高かったからです。そして、自分が情けなくなりました。悔しい気持ちを残したまま通学合宿は終わりました。それでももちろん楽しい思い出もあります。運動会、花火、ゲートボール、星空観察など、自分のやりたいこと自分らしさを出すこともできたと思います。子どもたちに「楽しかった」、「また来たい」と言ってもらった時は、今回の通学合宿にもいいところはあったのだと思えました。

この1年間で地域との関わりも多くありました。大岡小学校の行事である大根プロジェクトや米作りに参加させていただき、普段かかわることのなかった子どもたちと関わることができたり、学校行事を外部という視点から学んだりすることができました。また、農楽里ファームとの関わりの中で、たくさんの農業体験や福島の子どもたちとのつながりができました。他にも、地元の収穫祭のお手伝い、放課後こどもプランへの参加など、プラザ長だったからできた経験がたくさんありました。

本当に１年間があっという間に過ぎました。そして、確実に１年前と比べ、プラザ長を経験したことにより成長することができました。周りの人から知識やルールを教わりました。この１年間の大岡での関わりは、私の原点となると思います。大岡小学校の先生方、大岡支所の皆様、わらわらの皆様、農楽里ファームの皆様、保護者の皆様、愛育園の皆様、学生のみんな、そして土井進先生。たくさんの人たちの支えがあったからこそ、この１年間を無事に終えることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

意識しなかったことに気づく　　太田　咲(言語教育専攻３年)

私が初めて大岡に足を運んだのは、昨年度の大岡日和の日でした。ずっと行ってみたかった大岡の地で、子どもたちの温かさに触れ、また、自分の考えの甘さに気づかされ、もっともっと大岡に関わりたいと思ったことを覚えています。

酒井くんに副プラザ長のことで声をかけてもらったとき、「自分なんかがやってもいいのかな」と考えましたが、今になってみると、副プラザ長として大岡に関わることができて本当によかったと感じています。

うまく連携がとれず、企画が一つなくなってしまったり、保護者さんに指摘を受けたりすることもありました。そういうことから不安になったり、考えに行き詰まったりしてつらいと感じてしまうこともあったように思います。しかし、「好きなようにやっていいよ」「大丈夫」と声をかけてくれる金澤さんや「せいー」と呼んでくれる子どもたちの笑顔を見ると、もっと何かしたいなという気持ちになれました。また、私たちに意見をくださる保護者さんの言葉からは、子どもたちへの愛情を感じ、大切な子どもたちを任せていただくことの責任も感じました。

大岡のいちばん大きな企画は、通学合宿です。昨年よりも人数は少なかったけれど、子どもたちの協力や気遣い、成長を感じることができました。子どもたちの姿から私自身が気づかされることも多かったです。子どもたちが目の前の問題に精一杯向き合っているように、自分自身ももっと向き合うことがあるように刺激を受けたように思います。通学合宿では子どもたちと学生とが共に刺激しあって成長し、さらに深い関係を築くことができるのだなと感じます。

今まで意識しなかったことに気づくきっかけを与えてくれた大岡の活動、そして大岡の地に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は大岡の皆さん、そして大岡の地が大好きです。私たちのやりたいようにやらせてくださり、フォローをしてくださる金澤さん、いつも温かく迎えてくださる大岡小学校・中学校の先生方、通学合宿や三千国祭りでお世話になった地域の方々、保護者の皆様、一緒に活動を作ってくれた学生の皆さん、今年度の大岡プラザを作り上げてくれた酒井くん、大岡の地で関わることのできたたくさんの方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。

◇地域協力者からの評価

５年目の第一期生　卒業　　大岡小学校長　木村公男

大岡での通学合宿が５年目を迎えました。小学校５年生の時から毎年参加してきた３人の女の子が中学３年生となり、最後の通学合宿に参加しました。中学生も参加している通学合宿が他の地区にもあるのかどうかは分かりませんが、中学生の存在は大きいです。

通学合宿の行われる９月の最終週は、中学校の文化祭の週と重なります。少人数の大岡にあっては中学３年の彼女等は、文化祭の準備の中心でもあります。一人何役もこなしながら、その上で通学合宿にも参加しているのです。最終日、土井進先生や大学生との最後の会がもたれました。中学生が、あふれる５年間の思いを語ろうとするのですが、涙、涙でなかなか言葉になりません。そして、ふり

しぼるように出てくるわずかな言葉。ぽつりぽつりとした言葉ですが万感の思いが伝わってきます。それを受け入れる大学生の目にも涙、涙です。

土井先生は、よく「志」の話しをしてくださいます。体重や身長ははかりで測ることができる。しかし、人間の大きさは何で測ったらいいのだろうか？それは、志を持っているかどうかである、と先生は言います。通学合宿が行われる福祉センターは、決して良い条件ではありません。にもかかわらず、学生たちの表情は明るいです。彼等・彼女等には目指すもの「志」がある。その気持ちが子どもたちにも通じるのだと思います。若いから、遊んでくれるから、そんな単純なものではないと思います。通学合宿は、子どもたちと学生の熱意と絆で満ちています。深いつながりを持った小学生が中学生となり、その中学生が５年目の通学合宿を卒業していく。ゆくゆくはこの子どもたちがリーダーとなって、通学合宿を運営する側に立つときが来るような気がします。

通学合宿という活動を通して、地域の子や大人たちとの信頼関係を築き、学生同士の信頼関係も深まっているようです。また、学生が様々な人々と繋がり、地域社会をより元気にしてくれています。多くの皆さんとの出会いに感謝です。そして、これからのみなさんの活躍を大いに期待しています。

精一杯頑張ってください　　大岡子どもプラザ施設長　金澤　仁

大岡小学校は全校児童 51 名の小規模校であり、子どもたちに起こる出会いというものも極端に少ないと思います。登校・下校もスクールバスでという環境の中で育つ子どもたちは、家に帰れば１人遊び、あるいは、祖父母や親との関わりしか経験がない子どももいます。

そんな環境の中で、学生の皆さんとの出会いや遊びということは、子どもたちの将来にとっても大切なことです。そして、これから教職を目指す学生さんたちにとって、大切なことは言うまでもありません。まして、７日間をともに過ごし生活するとなればなおさらです。子どもたちは既に来年の通学合宿を待ち望んでおり、毎年の恒例行事とするための準備も進めてゆきたいと思います。

これからも、子どもたちにとって良いお兄さんお姉さんとして明るい笑顔で接していただき、近い将来、多くの子どもたちに勇気や努力の大切さ、人を愛することや思いやることなどを伝えられるような先生になっていただきたいと思っています。

大学の授業の合間の活動は大変だと思いますが、これからも子どもたちのため、そして自分自身のために精一杯頑張ってください。

○「大岡プラザ」の誕生：土井進先生の大岡への想い ○

平成 17 年 8 月 27 日（土）に長野市の若里市民文化ホールで第 55 回全国高等学校 PTA 連合会大会が開催され、その特別第１分科会「完全学校週五日制と PTA ～土曜日の有効活用を中心に～」の講師を務めさせていただきました。

この企画を立案され私を講師に呼んでくださったのが、大岡の大平由栄氏でありました。大平さんと２人で「YOU 遊」のことについて語り合う中で、私は大岡へ学生を連れて行きたいと考えました。大平さんから農村女性ネットワークの皆さんを紹介していただき、芹の収穫、竹の子採り、こんにゃくづくり、やしょうまづくりなどを手伝わせていただきました。ここには日本の大事な伝統文化が息づいている。この貴重な食文化を学生に体験させたいと、強く願いました。

大岡のプラザが発足し、学生の皆さんが継承してくれていることに、私は喜びと感謝の念でいっぱいです。

「信大 YOU 遊未来」姨捨の棚田（1年目）

プラザ長　北村隼一（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名

小松　一成（理4）八木英理子（言4）月岡　優介（社4）遠山　芽衣（生4）羽田　　鋭（実4）
林　志桜里（生4）太田　　咲（言3）那須絢太郎（理3）上野なつみ（生3）宇治　　貢（理3）
西村　拓也（理3）宮城　香詠（言3）永原　正裕（特3）横田　克己（社3）花岡　慶祐（理3）
上野　　暁（数2）畔上　達也（理2）長谷川　開（技1）真先　　陸（社1）松元可南子（現1）
鷲澤　栞里（現1）山本　健登（工4）中村　速斗（工3）　　計24名

○参加者数　　子ども12名（保育園児1名、小学生1名、中学生3名、高校生7名）

○連携者・団体　　地域協力者：北村善一氏　後援：千曲市教育委員会

○プラザの概要

姨捨の棚田は、善光寺平や千曲川が眺望できる位置に広がり、重要文化的景観に指定されており、「日本の棚田百選」にも選ばれています。また、最寄り駅である「姨捨駅」から見える景色は「日本三大車窓」として知られています。素晴らしい景色が見える姨捨の地には、「姨捨山伝説」や「松尾芭蕉が詠んだ句」があり、文化的にも有名な面があります。「信大 YOU 遊未来　姨捨の棚田」の活動では、協力者の北村善一氏が所有している10枚ほどの田んぼのうちの1枚をお借りし、千曲市の保育園児、小学生、中学生、高校生と信大生が稲作の体験をすることと姨捨の地を散歩する体験をしてきました。稲作体験、散歩体験を通して幅広い年齢の人たちが交流をする場として活動をしてきました。

○活動目標

稲作体験、姨捨の地を散歩する体験、おもちつきをして食べる体験を通して、保育園児、小学生、中学生、高校生、大学生、大人という幅広い年齢層の人たちが楽しく交流することで「人とつながっていく力」や「生きる力」を養うことができる。また、姨捨の景色や文化にふれ、「姨捨」を好きになることができるとともに重要文化的景観を保持していく。そして、信州大学学生の人間力、実践的指導力の向上を目標としています。

○一年間の活動

活動回	活動日	活動内容
1回	5月25日（土）	春のおばすて散歩、田植え！
2回	6月15日（土）	田んぼの草刈りをしよう！
3回	7月21日（日）	おばすて夏のウォークラリー
4回	9月15日（日）	稲刈りをやってみよう！
5回	9月29日（日）	脱穀をしよう！
6回	11月　3日（日）	秋のおばすて散歩！
7回	12月　8日（日）	姨捨米でおもちつき！（YOU 遊フェスティバル）

○各活動内容

第1回　5月25日（土）　春のおばすて散歩、田植え！　（参加者　子ども10名　学生10名）

姨捨の棚田での初めての活動では、晴天のもと、参加者全員で楽しくおばすて散歩と田植えをすることができました。初めて会う人ばかりで緊張している子どもたちの様子がありましたが、田んぼまでの散歩をする中で、徐々に仲良くなっていきました。田植えの時間になり、参加者全員が裸足で田んぼの中に入って苗を植えていきました。中には初めて田植えをする人たちもいて、初めての泥の感触、稲の植え方を感じ取っていました。全員で時間も忘れて楽しく田植えをしていると、あっという間に田んぼ1枚に苗を植えることができました。協力者の北村善一氏もあっという間に手植えで1枚

を植えてしまったことに驚いていました。田植えを終えた後、田んぼの近くにブルーシートを敷き、お昼を食べました。田植えを終えた達成感で食べるお昼は格別でした。子どもたちや大学生の表情も達成感に満ち、いい笑顔でした。その後は、再び全員で姨捨駅を通って最初の場所まで散歩をしました。途中、景色がいい場所で感想発表をしました。全員が「今日、この姨捨で活動ができて楽しかった。参加してよかった」ということを言ってくれました。また、「大学生と交流することができてとてもいい刺激になった」と言ってくれた高校生もいました。この日の天気のように、すがすがしい気持ちで第１回の姨捨の活動を終えることができました。

第２回　6月15日（土）　田んぼの草刈りをしよう！　（参加者　子ども５名　学生５名）

草刈りの活動は、参加人数は多くはありませんでしたが、５月の田植えの活動に参加できなかった子どもが参加することができました。田んぼの畔に生えた草を鎌で刈っていきました。土井進先生から鎌の研ぎ方を教えてもらったり、一生懸命目の前にある草を刈っていたりする姿が見られました。初めて参加した保育園児は田んぼにいる生き物を夢中になって探したり、初めて持つ鎌で苦労しながら草を刈ったりしていました。なかなか恥ずかしくてしゃべれない姿もありましたが、活動の最後には「楽しかった」と言ってくれました。なかなか草刈りを体験する機会はなく、参加者全員がいい経験をすることができたと思います。人数が少なかったこともあり、異年齢の交流が密にできた活動であったと思います。また、大学生にとっては保護者さんとお話しするいい機会になったと思います。保護者さん同士の交流も初めてすることができた活動でした。ここでの保護者さん同士のつながりも大切にしていってもらいたいと感じました。

第３回　7月21日（日）　おばすて夏のウォークラリー！　（参加者　子ども12名　学生８名）

夏のウォークラリーの活動は、農作業体験ではない初めての活動でした。学生を含めた参加者20名を４つの班に分けて、班ごとに自由に姨捨の棚田などの姨捨の地を散歩する活動でした。ウォークラリーということで、お題にあった写真を班で撮ってくることや、姨捨駅で「姨捨山伝説」を聞いてくるといった、課題解決をしながら楽しく歩くことができるように企画しました。それぞれの班でたくさん面白い写真を撮ってくれたり、普段関われない人と仲良く交流していたりする姿が見られました。今までの関わりとは違って、様々な年代での交流を大切にしていると感じることができました。ウォークラリーをすることを通して田んぼのイネの成長を感じることができたり、松尾芭蕉の俳句を探して姨捨の景色の歴史を感じたり「姨捨山伝説」を知ることができたりと、姨捨の景観と文化を両方楽しむことができる活動になったと思います。また、田んぼで草取りをしている方に草取りの体験もさせていただき、いい機会にもなりました。参加登録者が全員参加することができた初めての活動であったことも、意味のあることだと感じます。幅広い年齢の子どもたちと、楽しく姨捨の地を歩くことができた企画になりました。

第４回　9月15日（日）　稲刈りをやってみよう！　（参加者　子ども10名　学生４名）

稲刈りの活動の日は、朝から雨が降ったり、やんだりする日でした。雨のため、延期も考えましたが、何とかできそうだという判断で活動を行いました。雨の中でしたが、14名も集まってくれました。雨の中の稲刈りは私自身も初めての経験で、とても大変でした。稲刈りのときは、刈っていく中でコツをつかんでいったり、束ねやすいように並べていたりする様子があり、大変な中でも稲刈りのやり方をつかんでいたように思います。大変な稲刈りでしたが、参加者全員で協力して稲を刈り、はぜかけを無事に終えることができました。雨に打たれ、びしょびしょになりながら、ぬかるんだ田んぼでの稲刈りをやる姿、雨の水分で重くなった稲のはぜかけを頑張っている姿を見て、雨の中でやった稲刈りは心に残る経験になったのではないかと感じています。雨の中の稲刈り体験を通して、自然の厳しさやお米を育てる大変さを実感できる活動になったと思います。

第５回　9月29日（日）　脱穀をしよう！　（参加者　子ども９名　学生２名）

脱穀の活動の日は、天気がとても良くいい気持ちで活動することができました。雨の中で刈ったた

くさんの水分を含んでいた稲も、連日のいい天気でよく乾いていました。脱穀の活動では、大学生の人数が少なかったこともあり、今までの活動よりも高校生と中学生、高校生と小学生、中学生と小学生といったつながりを見ることができたと思います。脱穀機（ハーベスター）に稲を入れる人に稲を渡したり、お米が入った袋を協力して運んだり、はぜかけ棒を協力して運んだりする様子が多くみられました。今回の活動では田植えをした田んぼ１枚の脱穀だけではなく、他の田んぼの脱穀も一緒にやらせていただきました。「例年よりも早く作業を終えられて助かる」と、父（北村善一氏）が話していました。また、近所の方が稲刈りをしており、はぜかけの手伝いもやらせていただきました。前回の稲刈りの活動でははぜかけを全員がやることができなかったこともあり、いい経験ができたのではないかと思います。近所の方も「手伝ってもらってすごく助かった」と、おっしゃっていました。多い人数で協力してやれば、早く作業を終えることができる。協力することの大切さや喜びを感じるとともに、助け合っていくことの大切さも感じられる活動になったと思います。

第６回　11月３日（日）　秋のおばすて散歩！　（参加者　子ども９名　学生８名）

秋の散歩では、紅葉がきれいな秋という季節を感じてもらうことと、姨捨の好きな場所を探してもらいたいという思いで企画をしました。７月のウォークラリーと同じように、散歩をしながらお題にあった写真を撮ってくることと、絶景スポットを見つけることを班ごとに楽しみました。この活動でも、７月のように様々な年代の関わりが見られました。７月とは違った班分けにして活動をしたので、また違った交流ができたと思います。散歩では、秋の紅葉を見ながら楽しそうに歩く姿がありました。この活動で姨捨の地での活動が最後ということもあり、11月の何もない田んぼを見ながら、今までの活動を振り返ることもできたと思います。参加している中学生が散歩中に、「高校でやりたいことが固まった。この活動でいい経験ができた」といったことを、話してくれました。１年間の活動の中で、経験したことをこれからの生活にもつなげていってほしいと感じました。また、来年度も「いい経験になった」と感じてもらえるような活動にしていきたい。今年度の反省を活かしてさらによい活動にしていこうと、改めて思うことができた機会にもなりました。

第７回　12月８日（日）　姨捨米でおもちつき！　（参加者　子ども９名＋10名　学生７名）

おもちつきの活動は、信州大学教育キャンパスで行われた「YOU 遊フェスティバル」の一講座として行いました。姨捨の活動に参加してきた９名と、長野市の小学生 10 名が集まって活動をしました。お米を一緒に育ててきた姨捨の参加者にとって、苦労して作ったお米でおもちつきをして食べる経験をすることができ、いい表情が見られました。重い杵を協力して持ってついたり、順番で交代しながら楽しそうについたりする姿がありました。また、ついたおもちにいろんな味つけをして、楽しみながらおもちを食べている姿もありました。お米を育てた子どもも育てていない子どもも、姨捨の棚田でできたお米で作ったおもちを食べ満足そうでした。今年度の最後の活動を笑顔で終えることができたと思います。　★ なお、活動の詳しい様子は、

「YOU 遊フェスティバル」〈姨捨米でおもちつき〉（P.59）をご覧ください。

◇実践から得た「臨床の知」

地元「姨捨」に「YOU 遊」を！

北村隼一（理数科学教育専攻３年）

私が「YOU 遊」の活動に出会ったのは１年生の４月、先輩が活動の紹介をしてくれたのがきっかけでした。興味をもって先輩に連絡先を教えてもらい、茂菅農場の活動に参加しました。初めてだらけで緊張して参加した茂菅の活動は、今でも心に残っています。大学生になって初めてかかわった子どもたち、自然、農業体験、すべてがとてもいい刺激でした。その後も茂菅の活動に参加していき、茂菅のよさを感じていきました。２年生にあがり、茂菅、青木、大岡、湯谷、麻績とたくさんのプラザの活動に参加していく中で、茂菅だけではなく、子どもと関わる「YOU 遊」の活動の魅力にひか

れていきました。そして、「YOU遊の活動の魅力を地元の子どもたちにも感じてほしい」、「姨捨の魅力をいろんな人に感じてほしい」と思い、活動を立ち上げようと考えて土井進先生に相談に行ったのが、「姨捨の棚田」の出発点でした。家族へ協力をお願いしたり、千曲市の教育委員会に後援をいただきに行ったり、チラシを各学校、保育園に配ったりなど、大変なことも多くありましたが、地元でYOU遊の活動をすることができるうれしさでわくわくしながら活動の準備をすることができました。

活動をしていくにあたって大切にしたことは、「異年齢との交流」、「農作業体験」、「姨捨らしさ」でした。予定していたよりも幼児から小学生の参加が少ない中でのスタートでしたが、参加してくれた方にいい経験をしてもらおう、人とのつながりを大切にしていってもらおうという思いで、7回の活動をしてきました。準備不足な面があったり、連絡をするのが遅くなってしまったりと、参加者の皆さんや家族に迷惑をかけてしまうことも少なくなかったと思います。それでも、毎回の活動を楽しみにしてくれる子どもたち、活動に協力してくれる家族がいてくれることが何よりもうれしいことでした。各回の活動でたくさんの笑顔を見たり、楽しかったという声を聞いたりするたびに、「この活動を立ち上げてよかった」と思うことができました。参加者の皆さんから「幅広い年齢層の交流をすることができてよかった」、「米作りの大変さを知ることができた」、「姨捨でのウォークラリーが楽しかった」といった声があり、大切にしてきたことを感じてもらうことができ、うれしく思います。また、「来年度以降も続けていってほしい」という声が、いくつもありました。今年度の活度を振り返り、より良い活動にして来年度以降も続けていこうと思います。最後に、参加してくれた子どもたち、学生、保護者さん、支えてくれた家族、活動を立ち上げることに喜んで背中を押してくれた土井先生、関わってくれたすべての方々に、心から感謝しています。ありがとうございました。

◇地域協力者の声

おばすて棚田～初めての活動～

協力者　北村善一

「信大ＹＯＵ遊未来」の活動を、息子から聞きました。ある時、我が家の田圃を使い活動したいと言ってきました。どんな活動をするのか年間計画のプランを聞いて、とてもいい活動だと思い、協力することにしました。田植え・草刈り・稲刈り・脱穀と、稲作の主な農作業を地元の子供たちに体験させ、収穫したもち米を使い餅つきをするというものでした。

地元の子供たちを対象に募集を始めていましたが、なかなか応募が少なく活動ができるのか心配になりましたが、やがて応募する子供たちも増え、“ほっと”しました。田植えは初めての子供もいたり、慣れない学生さんもいたりしましたが、裸足で田圃に入り泥の感触に喜んだりしていました。子供たちと共に一列にならび楽しく田植えをしたり、慣れない草刈りや雨で泥だらけになりながらの稲刈り、脱穀では隣の田圃のおばちゃんを手伝っていました。地域とのつながりということからも、積極的に取り組む姿勢を大切にしているな～と思いました。指導する学生さんも、慣れない作業を苦労しながら子供たちに教えていました。集まった参加者が全員で協力し合いやっていたことは、とてもいい経験になったと思います。

また、おばすての棚田という中山間地域での稲作を体験し、棚田で稲作をやる苦労などを子供たちや学生さんたちも感じとっていることでしょう。普段あたりまえのように食べている米ですが、苦労して収穫した米の有難さを感じてもらい、無駄にすることなく大切にすることを学習したのではないでしょうか。また、地域の子供たちとのコミュニケーションを積極的に取ろうとしている学生さんたちの姿は、とても頼もしく感じました。初めての「おばすて棚田」の活動でしたが、12月8日に開催された「YOU 遊フェスティバル」での餅つきでは、思ったよりとても美味しい餅になったのでほっとしました。参加された地域の子供たちや学生さんたちの感想や意見などをお聞きしたいな～と思います。そしてまた、この経験を今後も生かしていけるような活動に期待しています。

第12回YOU遊フェスティバル

実行委員長　池田隼人（保健体育専攻３年）
副実行委員長　小塚尚士（野外教育専攻３年）

○実行委員名

中野　直輝（社３）　井上　陽介（技２）　村松　知美（美２）　松井　六（現２）　上原　瑛美（現２）
関口 美桜（現２）

○講座長名

北見　聖（言４）　仁張　雄太（心３）　月岡　優介（社４）　太田　宏平（数２）　榊原　典子（言４）
八木英里子（言４）　上野　暁（数２）　杣木　亮太（理４）　北村　隼一（理３）　三井　夕衣（言３）
成瀬　貴心（保４）　田中　優（社２）　則竹　美玖（現２）

○参加者数　子ども277人　保護者105人　学生209人

○連携団体　長野市PTA連合会　信州大学教育学部附属長野小学校ほか

○プラザの概要

「YOU遊フェスティバル」とは、年に１度、教育学部キャンパスに子どもたちを集めて講座を開き、子どもたちと学生たちが一緒になって活動するイベントです。

学生主体のイベントであるため、実行委員会と各講座の講座長を中心に運営されます。また、毎年活動の内容が異なり、どのような「YOU遊フェスティバル」にするのかは、実行委員で検討します。

第12回「信大YOU遊フェスティバル」では、＜参加するすべての人が楽しむこと＞を、意識しました。子どもたちも学生も、「楽しそう、面白そう」というシンプルな動機で参加を決めていると思い、まずは参加してくれた子どもたちに楽しんでもらうことと、笑顔で帰宅してもらうことは絶対条件として、その上で学生も「子どもたちを楽しませること」を楽しんでもらえたら、という思いからこのテーマにしました。

当日１日目は講座や、講座以外の学生同士が交流を深め、同期や先輩後輩、他学部の学生や他大学の学生とのつながりができるように、学生レクレーション、前夜祭を行い、多くの人とコミュニケーションが取れるように配慮しました。

また、今年度は多くの大学のイベントと日程が重なったため、学生数は去年より少なくなってしまいましたが、長野県短期大学、横浜国立大学、関西学院大学、広島大学、茨城大学の５大学から参加していただき、お互いの大学の活動が聞けるなど、有意義な交流ができました。

○当日の日程

＜平成25年12月7日（土）＞

9：00 学生集合	
10：00 学生レクレーション	
13：00 各講座ごと準備	
17：30 前夜祭	20：00 解　散

＜平成25年12月8日（日）＞

7：30 食堂で朝食	14：00 閉会式
8：30 子ども受付	15：00 子ども解散・片付け
9：00 開会式	17：30 後夜祭
10：00 各講座での活動	20：30 解　散

○会計報告

収　入

参加費	140,200円
前夜祭	84,800円
後夜祭	181,500円
子ども参加費	83,100円
合　計	489,600円

支　出

運営費	310,453円
講座物品等	128,798円
実践記録作成費	50,349円
合　計	489,600円

＜ 教職プロジェクトより、学長裁量経費として物品購入費　203,231円 ＞

○講座一覧

	講　座　名（講座内容）	講座長（専攻・学年）	学　生 スタッフ
1	おーーーっきいシャボン玉	北見　　聖（言語・4年）	15人
2	みんなでつくろう X'mas キャンドル	仁張　雄太（心理・3年）	9人
3	咲け！ 闇に光る 万かいの華 鏡の不思議	月岡　優介（社会・4年）	14人
4	スノードーム	太田　宏平（数学・2年）	17人
5	写真をつなげてアニメをつくろう！	榊原　典子（生活・4年）	23人
6	にんじゃりばんばん	八木英里子（言語・4年）	25人
7	飛び出せ!! 絵本の世界！	上野　　暁（数学・2年）	10人
8	ギネスに挑戦！ 紙飛行機に夢をのせて･･･	杣木　亮太（理数・4年）	14人
9	姨捨米でおもちつき	北村　隼一（理数・3年）	7人
10	Bigでフワフワ☆グリグラパンケーキ	飯島　香純（実践・3年） 三井　夕衣（言語・3年）	15人
11	絶 望 要 塞	成瀬　貴心（保体・4年）	23人
12	ファインディング・イモ ～やきいも大会～	田中　　優（社会・2年）	15人
13	みんなで踊ろう！ ソーラン節！	則竹　美玖（現教・2年）	14人

○一年間の活動

5月～7月	実行委員・講座長募集、第1回実行委員会、第1回講座長会
夏季休業中	講座長追加募集
10月上旬	1年生・他学部・他大学スタッフ募集
10月下旬／11月	子ども募集 ／ 講座長会・実行委員会随時開催
12月7日・8日	第12回「信大YOU遊フェスティバル」開催

○講座内容

1　講座名　お ーーーっきいシャボン玉

講座長　北見　聖（言語教育専攻4年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

後藤　莉奈(言4)　山崎花奈子(言4)　小松　一成(理4)　秋元　雄喜(心4)　宮澤　友真(心4)
齊藤　智也(理4)　酒井　友輔(理3)　鈴木　哲朗(生3)　日高　景互(生3)　木田　達也(社3)
加藤　貴浩(社3)　林　奈央子(社2)　和田　彩（県短1）　荻原朱美（県短1）

○参加者人数　　子ども22人　保護者10人

○講座の概要

シャボン玉の実験をしたり、ハンガーやうちわ、フラフープなどを使って、大きなシャボン玉を作ったりする。

○一日の活動日程

10：05　アイスブレイク	
10：25　シャボン玉Show	12：00　お昼、写真撮影
10：45　シャボン玉装置の製作	12：50　シャボン玉で遊ぼう
11：20　シャボン玉で遊ぼう	13：40　記念品贈呈

○当日の子どもたちの様子

子どもは幼稚園から小学５年生までが参加してくれたが、そのほとんどは３年生以下だった。Showでは、水中シャボン玉、触れるシャボン玉、ドライアイスを使ったシャボン玉を学生が披露し、子どもたちは見たことのないシャボン玉に驚き、シャボン玉に興味を示してくれた。おかげで、室内でやった水中シャボン玉、触れるシャボン玉、外でやった大きなシャボン玉も、飽きずに一生懸命やってくれた。子どもたちには少し難しいかと思っていたが、だからこそ、一生懸命やってシャボン玉ができたときの、子どもたちの嬉しそうな笑顔があったのだと思う。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

当初は、こぢんまりとした企画を考えていた。知らぬ間に、学生がたくさん集まってくれ、予想以上に大きな講座となった。シャボン玉で何ができるか、一日飽きずに遊べるか、子どもは小さい子が多いができるかなど、不安な点もあったが、学生スタッフのみなさんが子どもと一緒になって遊んでくれたので、私も純粋に楽しませてもらった。プレの段階から子どものようにはしゃぎながら遊んでいる学生スタッフのみなさんがいたからこそ、雰囲気のいい講座になったと思う。当日、こんなにたくさんの笑顔にあふれたのは、実行委員のみなさん、学生スタッフのみなさんが頑張ってくれたからです。一日中笑顔でいられて、最高な YOU フェスでした。ありがとうございました。

２　講座名　みんなでつくろう X'mas キャンドル

講座長　仁張雄太（心理臨床教育専攻３年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

板倉はるか（心３）　田中梨恵子（家２）　日比野綾（家２）　佐藤雅彦（カ２）　澁谷和歩（カ２）
堀　綴菜（カ２）　山木　柚子（カ２）　山之内椎菜（カ２）

○参加者人数　子ども 23 人　保護者８人

○講座の概要

オリジナル X'mas キャンドルの製作

○一日の活動日程

午前：クリスマスツリー形キャンドルの製作　午後：３色カラーキャンドルの製作

○当日の子供たちの様子

朝は知らない者同士で全員が緊張していたが、アイスブレイクや午前中の活動を通して次第に子ども同士でコミュニケーションが取れるようになり、午後には全員が笑顔で活動することができていた。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

活動の中で一番良かった点は、子どもたちの笑顔が見られたことです。自分が作ったキャンドルを持って、私たちに満面の笑みで「上手く作れたよ！」と報告してくる姿を見ると、講座を開いて良かったとスタッフ全員が思いました。また、活動ではキャンドルを作るということで火を使う必要がありましたが、誰も怪我なく楽しく活動を終えることができたのは、本当に良かったと思います。

午前中のツリー型のキャンドルは、作成過程で紙コップで作った型を使い、出来上がりがどうなるのか子どもたちには想像しにくかったためか、型を外す際は全員がワクワクとドキドキが入り混じったような表情になっており、子どもの興味を引き出せたと思います。午後の３色カラーキャンドルは、型にガラスカップを使ったため、視覚的に子どもたちの興味を引き出すことができました。

反省点としては、火を使うということで、その管理をスタッフがする必要があり、子どもたちに十分目が行き届いていなかったということです。熱いものを扱うときには十分な注意を払っていましたが、蝋が固まるまでの間の時間は立ち歩いて黒板に落書きをする子どももおり、蝋が固まるまでの時間も十分考慮に入れた計画を立てる必要があったと思います。また、途中で材料が足りなくなるというハプニングもあり、これも十分に計画が練られていなかったことを表していると思います。

全体としては、誰も怪我をすることもなく、子どもたち全員が「楽しかった」と言って帰路についてくれたことが、なによりだったと思います。本講座に参加いただいた子どもたち、保護者様、サポートを行ってくださいました実行委員の皆様には、大変感謝しております。このたびは誠にありがとうございました。

3　講座名　咲け！闇に光る　万かいの華　鏡の不思議

講座長　月岡優介（社会科学教育専攻４年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

鷹野ふゆみ(社４)　三好由佳里(社４)　青山　莉香(社４)　梅津　翔子(数４)　森田　文子(数４)
荒井　麻耶(実４)　近江佐紀子(実４)　山崎　真歩(社２)　保崎衣芙季(社２)　勝野　里穂(社２)
正木　文華(社２)　柳田健太(広大４)　若井田萌(茨大２)

○参加者人数　子ども２７人　保護者５人

○講座の概要

万華鏡の土台を作って、ビーズやカラーセロハンで万華鏡の中身を決めて、暗い部屋で光る万華鏡を作って、みんなで光らせる！

○一日の活動日程

9：45　自己紹介　アイスブレイク	13：00　写真撮影・投影
10：10　活動開始　万華鏡作り・装飾	13：30　みんなで投影
12：00　お　昼	13：50　終わりの会・移動

○当日の子どもたちの様子

初めのアイスブレイクでは、初めて会う友達同士で協力し合えるゲームを考えました。工作企画は初めて会う子どもたち同士がなかなか仲良くなりきれないのが難しいところであると思っていましたが、導入のゲームから名前を使ったものを行ったことや、作業が比較的早く行える６年生たちができていない子に教え合う姿も多く見られ、講座を通して自然と仲良くなっていく子どもたちがとても微笑ましかったです。早くできてしまう子に対する配慮も、飾り付けでたくさん時間をとることができ、なおかつ、装飾についても子どもたちがやりたいことを自由にできる環境（折り紙の数、ペンの数など）を整えておくことができたので、子どもたちも飽きずに工作を続けていくことができたと思います。万華鏡の飾りの中で周りに絵を描き、自らの作品にストーリーを加える子もいて、本当に子どもたちの発想力には驚かされた。

○YOUフェスを振りかえって（感想や反省）

講座長という立場で、YOUフェスには今回を含め、３年間参加させていただいた。また、学生間の意識統一に始まり、私が「やりたい」と思ったことのすべてをやり尽くせました。今回の企画をする上で、大切にしたことは２つです。１つは、参加してくれた子どもたちが、学年を問わず、同じクオリティのものを作り、その中で個性を出し、笑顔で帰ってもらえるようにすることでした。準備段階での試行錯誤はありましたが、学生たちの細かな準備によって、子どもたちみんなが個性的な万華鏡を作り上げることができました。もう１つは、感動を共有することであります。作品をつくっても時間の関係などから、なかなか全員分の作品を見せ合う時間は今まであまりありませんでした。この投影万華鏡ですと、みんなで見せ合うことができます。一緒に手伝った学生、一生懸命作った子どもたちの作品が、全員で共有し合える場を創ることが重要であると考えたからです。

試行錯誤、細かな準備、そして一生懸命作り上げた子どもたちのがんばりの結果が、すべて最後に子どもたち全員で万華鏡を投影した際の「うわぁー」という歓声に集約され、喜び、感動、幸せを一気に全員で感じ合うことができたのだと思います。幸せに包まれたひと時を過ごすことができました。

３年間で感じたことは、「出会いの数だけ笑顔があって、笑顔の数だけしあわせがある」というこ

とです。３年間にわたり、たくさんの学生の協力、「YOU フェス」のスタッフさんたち、他大生や保護者さんたち、そして何より子どもたちとの素敵な出会いをいただきました。

みなさん、本当にありがとうございました。

４　講座名　スノードーム

講座長　太田宏平（数学コース２年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

信州大学生　長澤尚汰（技２）　小宮山翔平(社２)　工藤千尋（現１）　木寺祐貴（現１）

県立短大生　宮川紗恵　丸山杏子　松本夏美　宮嶋　茜　石井綾華　山崎里歩　長屋　栞　岡沢織江　前澤里美

長野西高生　穂刈汐里　加藤千尋　染川みちる

○参加者人数　子ども 28 人　保護者５人

○講座の概要

空き瓶を用いたスノードームづくり。中に飾るマスコットは、プラ板で自作する。

○一日の活動日程

10 時～自己紹介　10 時半～プラ板作り　12 時半～昼ごはん　13 時～飾り付け、完成

○当日の子供たちの様子

それぞれの子どもたちがとても楽しみにして来てくれたようで、子どもたちが「どんなふうに作るの！？」といったように質問しながら積極的にスノードームを作っていく姿が見られました。

仕上がったプラ板やスノードームを見てとても嬉しそうにしている様子でした。多くの笑顔を見られたかと思います。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

去年の「YOU フェス」では「スノードーム」の講座にスタッフとして参加させていただき、自分もやってみたいと思って、今回の「YOU フェス」でもこの講座を立ち上げました。

本当にたくさんの子どもたちの笑顔を見ることができて、幸せな一日を過ごすことができました。

課題としては、企画の細かいところを詰め切れずに、前日であたふたしてしまう場面があったことや、前日の準備の時間ではプレを行うまでスタッフさんに具体的な企画を伝えられず、お手伝いを頼むこともほとんどなかったので、なにもかも自分一人で背負いこみすぎたことかと思います。

来年以降は、もっとスタッフの学生さん方に協力してもらいながら、さらに質を高めた講座にしたいと思います。本当にお疲れ様でした。

５　講座名　写真をつなげてアニメをつくろう！

講座長　榊原典子（生活科学教育専攻４年）
遠山芽衣（生活科学教育専攻４年）
手塚亮介（理数科学教育専攻４年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

宮田巴都樹（特４）　田口　詩織（言４）　加々美理沙（言４）　藤本　千穂（心４）　櫻井　賢成（心４）
織田　裕二（生４）　長谷川ゆか里(生４)　内田　万結（生４）　宇治　貢（理３）　石川　真人（理３）
太田　咲（言３）　片山　莉沙（特３）　宮城　香詠（言３）　那須絢太郎（理３）　古瀬　祐貴（特３）
岸　琢人（生３）　堀米　美穂（言２）　中村　速斗（工３）　石渡　千晴(関大４)　寺嶋めぐみ(広大３)
岡村　玲（横大２）

○参加者人数　子ども 26 人　保護者４人

○講座の概要

【主な設定】 アニメ製作所「スタジオパシャリ」の見学会にやってきた子どもたちは、TEZUKA監督の最新映画を一足早く観ることになる。しかし、その映画は途中で止まってしまい、このままでは全国での公開に間に合わない！そこで監督は子どもたちに、絵コンテとイメージ曲に基づいてアニメを作ってほしいとお願いするのだった。果たして子どもたちは映画を完成させ、無事に上映会に間に合わせることができるのか･･･。

【内容】 童謡の歌詞をコマ撮りアニメで映像化する。グループごとに、絵コンテに基づいて紙や粘土などを使って各場面を作り、写真を撮り、つなげてアニメを作る。

○一日の活動日程

10：00～10：40	導　入	12：40～13：30	お昼休憩
10：40～12：40	アニメ製作	13：30～13：45	上映会、エンディング

○当日の子どもたちの様子

学生が思っていた以上に、子どもたちは集中して作業に取り組んでいた。最初は緊張していた子どもたちも、徐々に自分のアイデアを出しながら、製作していくことができるようになった。

お昼の時間になっても、「まだ続けたい！」 という声がたくさん聞かれた。また、午後からの上映会では、自分たちで作った動画を食い入るように観ている子どもたちの姿がとても印象的だった。

○YOUフェスを振り返って（感想や反省）

私たちの最後の「YOU 遊フェスティバル」は、とことん世界観にこだわって、子どもたちも学生も全員が楽しめるようにしたい！･･･というのが講座長としての目標でした。準備の多い講座ですから、学生スタッフにはたくさん負担をかけてしまいましたが、前日まで、また夜遅くまで、一生懸命準備をしてくださり、講座長として本当に感謝の気持ちでいっぱいです。皆さんのおかげで、子どもたちも楽しんでくれたんだと思います。コマ撮りという予測不可能で難しい挑戦は当日まで不安でいっぱいでしたが、子どもたちから「楽しかった！来年もやりたい！」という声を聞いた時には、「やってよかった」と、心から思いました。

6　講座名　にんじゃりばんばん

講座長　八木英里子（言語教育専攻４年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

羽田　　鋭(実４)　百瀬あきほ(実４)　飯島　莉菜(言４)　斎藤　　恵(言４)　馬場　綾菜(言４)
林　志桜里(生４)　内山　将也(野４)　光田　拓也(野４)　今井ひかる(地４)　長坂　朋美(特４)
髙木　淳子(言３)　室橋　美咲(言３)　土屋　孝将(理３)　古田　剛輝(理３)　新井　雅菜(生３)
土屋　祥太(工３)　岩澤ひかり(特２)　大原佑里奈(特２)　柳平　　結(特２)　城田凌麻（理学２）
松村拓哉(関学２)　飯坂　祥子(横１)　曲山　康平(茨１)　池田実穂（西高１）

○参加者人数　　子ども26人　保護者９人

○講座の概要

世は戦国時代。14ある国が互いに敵対し、お互いに天下統一を目指していた。激しくなる戦争の陰では、忍者たちによる戦いが繰り広げられていた。彼らは互いの正体を知られぬように行動すると同時に、敵方の忍者の正体を突き止め、それを奉行所に密告していたのだった。

○当日の子供たちの様子

ゲームの性質上、ルールが多く理解できないのではないか、後ろ向きで逃げてこけてしまったりしないかなど心配な点はありましたが、当日は学生スタッフの協力もあり、怪我をすることもなく、とても楽しんでくれていました。学生１人子ども２人の「国」を作ったことでお互いに声を掛け合って助け合い、笑い合う姿をよく見ることができました。また、同盟ゲームではそれぞれ２つの国で、BOSS

戦では全員で、ゲームを通して自然と仲良くなっていました。

設定であった「忍者」になりきり、こちらに向かって「にんにん！」とポーズをしてくれたり、各武器屋で真剣な表情でゲームと向き合う姿がとても印象的でした。結果としては、仲間で協力したり真剣になって取り組んでくれたりしたことはとても良かったなと思いますが、なによりも、1番の目的であった「楽しい」という思いを持ってもらえたことがとてもうれしく思います。

○一日の活動日程

10：00　はじめの会	11：20　西エリア封鎖	
10：10　IB：伝説の剣豪ゲーム	11：30　モンスター出現・同盟ゲーム	12：40　インターバルムービー
10：20　オープニングムービー		12：50　BOSS 戦開始
10：40　密告中スタート	11：50　全員密告・追放	13：20　BOSS 撃退
10：45　武器屋開店	12：20　お昼ご飯	13:30　エンディングムービー

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

頭の中には企画案がありましたが、こうして実現できたのは、「YOU 遊フェスティバル」の実行委員をはじめ近くで支えてくれた学生スタッフみんなのおかげでした。自分1人ではきっと始めることすらできなかった企画でしたが、スタッフみんなの協力もあり、当日は怪我もなく笑顔いっぱいの1日にすることができて本当に良かったです。子どもたちは学校やキャンプ、通学合宿などでは協力したり、時には我慢したりして取り組まなければならないことがあります。それはとても大事なことです。しかし、「YOU 遊フェスティバル」という場で私が一番に望んだことは、みんなが「楽しい」と思える企画にする、ということです。みんなで「楽しむ」ために協力し、「楽しい」から真剣に取り組む。そんな姿を見ることができ、講座長として発案して、本当によかったなと思います。また、この講座に携わってくれた学生スタッフには、とても感謝しています。忙しい中で準備を進め、当日もずっと笑顔で企画運営をしてくれていました。誰1人欠けても成り立たない、本当に素敵な仲間です。そんなみんなに「ありがとう！」と何回でも言いたいです。

7　講座名　飛び出せ!!　絵本の世界！

講座長　上野　暁（数学教育コース2年）

○学生スタッフ名（専攻・学年：五十音順）

畔上　達也(理2)　塩﨑　健介(数2)　尻無浜由衣(数2)　田中　健介(現2)　田名部藍(繊維1)
水本　侍樹(特2)　宮川　　諒(数2)　宮原　有彩(数2)　山本　脩太(数2)

○参加者人数　子ども 11 人　保護者0人

○講座の概要

クリスマスをストーリーの題材として、飛び出す絵本を工作する。

○一日の活動日程

10：00　アイスブレイク　10：30　活動開始：
背景を決める　⇒ キャラクター作成　⇒ 昼　食　⇒ 飛び出す仕組みの作成　⇒ 製　本

○当日の子供たちの様子

はじめは同じ小学校の友達がいない子どもでも、アイスブレイクを行ってから活動を開始するころには仲良く打ち解けていて、活動の最中も会話が絶えずに楽しく活動していた。また、工作に対しては得手不得手はあるものの、子どもたち全員が満足のできる作品ができたように感じました。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

学生スタッフの募集をかけるのが遅かったため、必然的に講座の準備も遅れてしまい、準備不足の面が目立ってしまいました。学生スタッフには直前でばたばたさせてしまい、申し訳ないと思いました。次回に講座を開かせていただく際は今回の失敗を活かして、学生スタッフと連携して、さらに良

い講座にしたいと思います。

講座としては、子どもたちの充実した顔が見られたのが一番の収穫でした。講座を開くという経験もできましたし、今回の「YOU遊フェスティバル」において、自分も成長することができました。

8　講座名　ギネスに挑戦！　紙飛行機に夢をのせて・・・

講座長　杣木亮太（理数科学教育専攻4年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

金子　智（理4）　島田　桃子（理4）　久保　博文（理4）　五味　大紀（理4）　遠藤　美奈（理4）
三石　順紀（理4）　青木保奈美（理4）　百谷　知沙（理4）　小野　翼（理4）　松井　大輝（理4）
堀内　翼（理4）　入倉　大輔（理4）　吉田　脩人（理4）

○参加者人数　子ども21人　保護者6人

○講座の概要

この講座では紙飛行機を飛ばしてギネス記録を目指すことを目標としている。ちなみに、ギネス記録は、距離69.1388m、滞空時間27秒9となっているが、これを目指すのはほぼ不可能に近いと感じ、小学生記録の距離25.13m、滞空時間13秒を目指した。結果としては記録には届かなかったが、中には限りなく上記の記録に近いものを出した子どももいた。また、巨大紙飛行機にも挑戦し、紙飛行機という普段から扱っている教材を非日常的な範囲にまで融合した。

○一日の活動日程

10：00～10：30　始めの会　アイスブレイク	
10：30～11：45　紙飛行機制作	12：30～14：45　紙飛行機飛ばし
11：45～12：30　昼　食	14：45～14：50　終わりの会

○当日の子どもたちの様子

紙飛行機を扱うとあって、本講座に参加した子どもは低学年、そして男の子が非常に多かった。企画前は、子どもたちが途中で飽きるのではないか、つまらないと思うのではないかという不安があったが、紙飛行機を制作するのも一生懸命に色々な種類の紙飛行機を作り、紙飛行機飛ばしの際には、どうやったら高く飛ぶのか、前に飛ぶのかを考え、子ども同士の触れ合う姿が多く見られた。そして何より、子どもたちの多くの笑顔にふれあうことができた。

○YOUフェスを振り返って（感想や反省）

私の個人ごとではあるが、今回「YOUフェス」を通して、自分の殻を破りたかった。「YOU遊」の活動にはある限られた人しか来ない、内輪でやっているという声を良く聞いた。自分にとって、それは腑に落ちないことであった。だからこそ、この「YOUフェス」は今まで「YOU遊」に参加したことがない人たちで構成した。その結果、自分にとって今までの活動では見られないような新たな気づきが生まれ、視野が広がった。もちろん、準備不足等の数多くの反省もあるが、それ以上に得られるものが多くあったと思う。今回参加してくれた、子どもたち、学生スタッフ、運営に本当に感謝しています！有り難う！

9　講座名　姨捨米でおもちつき

講座長　北村隼一（理数科学教育専攻3年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

永原　正裕（特3）　花岡　慶祐（理3）　横田克己（社3）　長谷川　開（技1）　松元可南子（現1）
鷲澤　栞里（現1）

○参加者人数　子ども10人＋9人（姨捨）　保護者　5人＋2人（姨捨）

○講座の概要

姨捨の棚田での活動で収穫したもち米を使っておもちつきをして、たくさんの味付けの中から一番おいしい味のおもちを投票で決定する。

○一日の活動日程

10：00～　自己紹介・アイスブレイク・導入劇
10：30～　おもちつき・味つけ（班ごと交代で）
12：00～　昼食（おもちも一緒に）・おもちの味の投票
13：00～　片付け・自由遊び
13：40～　終末劇・感想発表

○当日の子どもたちの様子

活動の初めの子どもたちは緊張もあるのか、少しかたい表情の子どもたちが多かった。アイスブレイク、クイズをやる中で緊張もほぐれていった。おもちつきの活動が始まると笑顔で楽しそうに杵でおもちをついたり、たくさんある味の中から選んでおもちに味をつけたりする姿があった。

幼児の子どもから高校生まで幅広い年齢が集まっての活動だったので、いたるところで異年齢の交流を見ることができた。小学校低学年の子どもが重い杵を持つときには高校生が一緒に持ってあげたり、また、一緒におもちに味をつけて楽しんでいたりしていた。このように、どの年齢も活動を楽しむことができていたと思う。

おもちの味つけを何種類も用意していたので、子どもたち一人ひとりがいろんな味付けをしておいしそうに食べていた。投票をしてもらうと、味付けの人気１位、２位はきな粉、ごまと定番のものだった。３位は粉チーズだった。なかなか普段は食べない味だったが、子どもたちには人気があるようだった。ぜひ、試してみてください。おもちつきの活動が予定よりも早く終わったので、自由遊びの時間ができた。子どもたちは外で楽しそうに鬼ごっこをしたり、学生と話したりしていた。小学校が違う子どもたちが楽しそうに仲良く遊んでいる姿があって、とてもうれしかった。１日の活動を通してたくさんの笑顔、異年齢の交流が見ることができ、とてもいい活動になったと思う。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

「姨捨米でおもちつき」の活動を振り返り、子どもたちの笑顔をたくさん見ることができて、この講座を企画して本当によかったと感じた。当日にバタバタしてしまったり、しっかりと決めていないところがあったりして準備不足を感じることも多くあったが、子どもたちが１日を楽しく過ごすことができたということが何よりもよかったことだと思う。学生スタッフの人数が少なく、１人ひとりに対する負担が大きくなってしまったが、みんな状況を見ながらよく動いてくれたから、子どもたちのいい姿を見ることができたと感じている。学生スタッフを多く集められず、申し訳ない気持ちもあったが、スタッフが少なかった分、学んだことも多くあったのではないかと感じる。

姨捨の一年間の最後の活動としての講座だったが、子どもたちや学生が楽しく活動できて本当によかった。参加してくれた３人の３年生、松本から来てくれた１年生３人のスタッフの支えがあったからこそできた企画だった。最後に、「YOU フェス」を陰から支えてくれた実行委員の皆さん、参加してくれた子どもたち、支えてくれた学生スタッフ、関わってくれたすべての人に心から感謝します。ありがとうございました。

10　講座名　Big でフワフワ☆グリグラパンケーキ

講座長　飯島香純（実践科学教育専攻３年）
講座長　三井夕衣（言語教育専攻３年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

長幅 美希(言３)　桐山 祐希(言３)　小田切美紗(特３)　山崎　圭(特３)　立野 まき(理３)
金沢 優花(実２)　山屋 智香(特２)　丸山　翔平(特３)　小針 華恵(工２)　郭若　竹(工２)
山田 彩夏(実１)　山田 千恵(実１)　Vo ngoc hanh(院)

○参加者人数　子ども32名　保護者6名　教育学部生12名　教育院生1名
工学部生2名　長野西高校生2名　（計55名）

○講座の概要

班で協力してグリとグラのパンケーキの絵本で出てくるようなパンケーキをフライパンで焼き、生クリームやフルーツで思い思いの飾り付けをする。

○一日の活動日程

10：00～10：15 はじめの会・自己紹介 10：15～10：30 手順説明	10：30～12：00　パンケーキ作り 12：00～12：50 ケーキの飾り付け 12：50～13：30 ケーキを食べる	13：30～13：50 片付け、終わりの会

○当日の子どもたちの様子

班ごとの調理では「順番ね！」「やりたい！」と、子どもたちが積極的に調理に参加しようとする姿が印象的でした。また「やったことないけど…」と言いながらも、電動泡だて器や包丁など、初めてのことにチャレンジする姿がたくさんありました。卵を黄身と白身に分ける作業を苦労しながら一生懸命やってみようとする姿や、自分で焼いたパンケーキを大切にこだわりをもって飾り付けをする姿など、様々なすてきな姿がありました。

○YOUフェスを振りかえって（感想や反省）

グリとグラの絵本のような、ふわふわのパンケーキをフライパンで焼こうと試行錯誤を繰り返した1か月、なかなかうまくいかず投げ出したくなってしまうこともありました。

しかし当日、子どもたちの前で見本のパンケーキを焼いたとき、「わあ～！」と声をあげた子どもたちと保護者さんの顔を見て、妥協せず、ぎりぎりまで試行錯誤を繰り返してきてよかったと思いました。活動には反省点もありますが、みんなでおいしくパンケーキを食べることができたことが本当にうれしかったです。今年の「YOU遊フェスティバル」が子どもたちにとって、素敵な思い出の一つになってくれればいいなあと思います。

最後になりましたが、参加を希望してくれた子どもたち、保護者の方々や土井進先生、調理室を提供してくださった高崎禎子先生、運営スタッフのみなさん、参加してくれた学生、ご協力いただいたたくさんの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当に、ありがとうございました。

11　講座名　絶望要塞

講座長　成瀬貴心（保健体育専攻4年）
副講座長　渡邉玲菜（芸術教育専攻4年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

岩瀬　由依（言4）　小平　早紀（地4）　北野　雄大（社3）　畠山　智晴（社3）　上野なつみ（生3）
大嶋　拓優（現2）　森下　結衣（現2）　土屋ひかり（現2）　宮崎　誠也（英2）　丸山　竜次（英2）
渡辺　　海（保2）　渡邉　祐菜（特1）　平片　萌果（特1）　堀江　俊文（横3）　安居院崇人（横1）
山崎　麻貴（茨1）　大木　千晶（広3）　轟　丈瑠（長野西）　田中那奈（長野西）　水島夏歩（長野西）
東條　恵（長野西）

○参加者人数　子ども31人　保護者1人

○講座の概要

テロリストが信州大学を占拠。人質として捕えられた子どもたちはいくつかの部屋に連れて行かれるが、数々の暗号を解き脱出を図る、いわば「脱出ゲーム」。

午後は再び捕まえようとするハンターから逃げ、信州大学に仕掛けられた爆弾を力を合わせて解体するいわば「逃走中」。

○一日の活動日程

10:00～　アイスブレイク　　11:00～　第二次脱出　　12:00～　昼　食
10:30～　脱出ゲーム開始　第一次脱出　　11:30～　第三次脱出　　13:00～　逃走中開始

○当日の子どもたちの様子

今回のこの講座は４～６年生に限定し、子どもたちだけで行動することが中心だったが、学生に頼ることなく班の子どもたちと相談し協力し合いながら、いろいろな問題を解いていく様子が印象的であった。問題が解けた時などは、みんなで喜びあったり、友達をたたえたりする場面が多く見受けられた。午後は外でハンターから逃走中を行ったが、寒い外で一生懸命にハンターから逃げ、捕まって牢屋に入れられた子どもたちも大きな声で、「ハンター来てるぞ！」「逃げろ、逃げろ！がんばれ！」などと、友達を一生懸命に励ます姿がとても印象的であった。その日初めて会った子どもたち同士だったが、終わった後には肩を組んで一緒に歩いている子や、また会おうねと声を掛け合っている姿を見ることができ、子どもたち同士のつながりを作り出すきっかけ作りができたのかなと感じた。

○YOU フェスを振り返って（感想や反省）

今回は講座長として参加させてもらったのだが、うまくいかないことが多く苦労することが多かった。当日までバタバタしていたが、子どもたちの楽しんでいる姿を見ることができて、報われた気がした。今回の講座は学生があまり口出しせずに、子どもたち同士で話し合い相談し合うことを目的として計画したのだが、そのぶん学生が子どもたちと関わる機会が少なく、もう少しやり方を工夫する必要があった。ただ、子どもたちが本当に楽しそうに活動してくれていて、その企画や準備をしてくれた学生、この講座に参加したいと言って参加してくれた子どもたち、その子どもたちを送り出してくださった保護者の方々、この講座に関わってくださったすべての人に感謝したい。最後の YOU フェスで貴重な経験ができて本当によかった。

12　講座名　ファインディング・イモ ～やきいも大会～

講座長　田中　優（社会科教育コース２年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

髙田　敏生（社２）　舘林　洸一（社２）　ヘッド　岬（現２）　牛山　麻衣（社２）　小林　大輝（現２）
石井　貴大（野２）　西澤　敏光（社３）　熊﨑　草太（社３）　田中　綾乃（芸３）　竹本　崇史（生３）
花井 香歩（県短）　長谷部あや乃(県短)　大森はる枝（県短）　小林美月(長野西)　内村日菜(長野西)

○参加者人数　　子ども 18 人　保護者１人

○講座の概要

この講座は、「YOU 遊フェスティバル 2013」で出された講座の１つであり、土井進先生が担当しておられる授業「社会教育演習」のメンバーを中心に、社会教育実践の一環として行われたものです。主な活動内容は、教育学部の敷地内の４ポイントにミニゲームを設置し、ゲームをクリアするごとにイモの在り処を記したヒントカードをもらい、イモを探し出し、探し出したイモを用いてやきいもを行って、最後に美味しくいただく講座です。

○一日の活動日程

9：45～10：00	始めの会・自己紹介ゲーム
10：00～11：00	人間知恵の輪 → 終了した班から、ミニゲーム・イモさがしへ
11：00～12：30	やきいも準備 → 終了後、ドッジボールやバレーボール等を行う
12：30～13：30	昼　食・やきいも完成とやきいも
13：30～13：50	記念撮影・終わりの会・土井進先生の挨拶

○当日の子どもたちの様子

活動全体を通じて、子どもたちが笑顔で楽しく活発に活動している様子を多く見ることができました。特にドッジボールの場面では、「当たったら、相手のチームに入る」という特殊ルールを設けたことで、全員の子どもが飽きずに楽しく活動することができました。また、やきいもには「美味しい」という感想をもらい、全ての子が残さず食べてくれました。このようなことから、子どもたちが、各々のスタイルで、楽しく活動に参加できたと思います。

○YOUフェスを振り返って（感想や反省）

反省としては、ミニゲーム内容が簡単すぎたという反省があげられます。これは、イモさがしでイモの在り処を求める際に、ゲームを通してヒントを渡すという活動を行った際、チェックポイントにある様々なゲームの難易度に関して、数名の小学校6年生男子児童から「簡単すぎる」という反応が見られたために生じたものです。下は年中さんから上は小学6年生まで、年齢がバラバラの参加者全てのニーズに合わせた活動をどのように企画すれば良いか分からずに、企画してしまったことに原因があると考えられます。今後、もし、同じような企画を行うことがあれば、学年別にゲームを分けたり、低学年および高学年がそれぞれ活躍できるゲームを企画したりするなど、工夫を凝らす必要があると思われます。

とはいえ、子どもたちをはじめ、参加スタッフ全てにとって、笑顔で楽しい講座になったことは、講座の活動自体が成功であったことの証です。私は講座長として、土井先生をはじめ、実行委員や学生スタッフ、参加してくれた子どもたち全員に感謝します。本当にありがとうございました。

13　講座名　みんなで踊ろう！ ソーラン節！

講座長　則竹美玖（現代教育コース2年）

○学生スタッフ名（専攻・学年）

太田　綾(心3)　勝山　愛美(英2)　小山ひかり(国2)　加地里帆子(現1)　山田真由美(現1)
寺澤　直子(実3)　坂口　加緯(現1)　松本未来(人文3)　望月久美(人文2)　望月康平(理学2)
柳澤和宏(繊維1)　三輪祐子(農学1)　香穂さん（高校生ボランティア）

○参加者人数　子ども11人

○当日の子どもたち・学生スタッフの様子

初めにアイスブレイクを取り入れたことで、子どもたちも学生スタッフも緊張がほぐれ、笑顔が見られた。また、いきなり「ソーラン節」を踊ることは、恥ずかしさや難しさがあると考え、まずは体操としてラジオ体操を取り入れたり、レクリエーションで「ソーラン節」の動きに近いものを取り入れたりして、工夫をした。子どもたちは恥ずかしがるどころか、休憩中にまで踊っていた。それを見た学生スタッフには、疲れているにも関わらず、積極的に指導をする様子が見られた。

子どもたちが学生スタッフに質問をしたり、アドバイスをもらいに行ったりする様子も見られた。スタッフの高校生も、大学生と同じように指導したり、子どもたちと触れ合ったりしていた。「ソーラン節」発表の際は、子どもたち、高校生、大学生が一つにまとまって踊れたように感じた。

○YOUフェスを振り返って（感想や反省）

なによりも、子どもたちの笑顔をたくさん見ることができて嬉しかった。事前の準備や企画の面では大変なこともいくつかあったが、悩んだり工夫したりの努力があったからこそ、子どもたちに喜んでもらえたのだと思う。全体を通して、運動量的にも時間的にも、きつかった部分があったとは思うが、それを上回る楽しさを子どもたちにも学生スタッフにも感じてもらえていたら、私としては嬉しい限りである。参加してくれた学生スタッフには、感謝の気持ちでいっぱいである。

反省としては、司会・進行の役で自分があまり動いていなかったため、休憩をとるタイミングや回

数が分からなかった点である。一案としては、時間で区切って休憩をとっていくべきであったと思う。また、子どもたちと学生スタッフの交流は多くあったが、子どもたち同士の交流の機会があまりなかったように感じた。なんらかの工夫をして、子どもたち同士も交流ができるようにしたら、よりよい企画になるのではないかと考える。

◇実践から得た「臨床の知」

つながる「力」

実行委員長　池田隼人

「YOU遊フェスティバル」は年に一度の開催で、実際に子どもと関わることのできる時間は約半日とそれほど多くありません。しかし、その半日間、多くの学生たちが子どもたちを楽しませるために半年も前から企画し、準備を行ってきました。学生だけでなく、大学の庶務係、学務係、会計係、生協や教職員の皆様方など、多くの方々のご協力のおかげで本番を迎えることができました。その「YOU遊フェスティバル」で感じたこと、学んだことを記したいと思います。

○周りの人々とのつながり　「YOU遊フェスティバル」の準備の段階から、非常に多くの方のご理解とご協力をいただきました。長野市PTA事務局長柳沢様には、各学校園にチラシを配布させていただくご配慮とご協力をいただきました。そして、各小学校の教職員の方々にはそのチラシを各家庭へ配布していただきました。保護者の皆様はお子様の参加を快諾していただき、当日の送迎や一緒になって参加してくださり、活動を温かく見守ってくださいました。また、「YOU遊未来」の関連団体の皆さまにもたくさんのご配慮をいただきました。「YOU遊未来」のプラザである麻績村は、募集を村でかけていただき、バスでの送迎をしていただきました。その他のプラザでも、貴重な活動内でチラシ配布のお力添えをいただきました。心より感謝申し上げます。これからも、皆様の期待と信頼に応えられるような活動であるよう、さらなる努力をしていきたいと思います。

「YOU遊」の活動は学生主体といっても、学生の力だけではこんなに大きな企画はできません。平野吉直学部長先生をはじめ、田中敏副学部長先生、永松裕希副学部長先生、土井進先生をはじめとした諸先生方や、大学生協、庶務係、会計係、学務係の職員の皆様のご理解とご協力が無ければ「YOU遊フェスティバル」を開催することはできませんでした。教室の使用許可、物品の貸し出しなど、学務係や会計係の方々に何度もお世話になり、その都度、親身になって対応してくださいました。また、体育館や調理室などを貸していただいたり、使用を譲っていただいた先生方や各団体の方々にはご迷惑をおかけしました。生協様には、休日であるにもかかわらず、当日朝の炊き出しのために、２日間も生協の施設をお貸しくださいました。本当にありがとうございました。

「信大YOU遊未来」指導担当の土井進先生には格別のご支援とご協力をいただきました。土井先生のご支援がなければ「YOU遊フェスティバル」は開催することができませんでした。運営で行き詰まった時はいつも声をかけ、手を差し伸べてくださいました。必要なときには関係各所へ橋渡しをしてくださったり、対応を間違えた時は一緒に先方に謝罪してくださいました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

多くの方々に「YOU遊さんなら」という言葉をたくさんいただきました。その言葉に、20年間で積み上げられてきた信頼の大きさを感じました。私たちを信頼していただいているからこそ、「YOU遊フェスティバル」という大きな企画を、学生主体で行わせていただけました。「YOU遊未来」、そして「YOU遊フェスティバル」の活動で得た信頼関係というつながりを、これからも続けていけるように尽力していきたいと思います。

○学生同士のつながり　講座長、学生スタッフを募集するにあたり大事にしていたことは、活動の輪を広げることと、「やりたい人が、やりたいようにやる」ということでした。今年は全国フレンドシップ活動のホスト校ということで、教職プロジェクトとの連携から、教育学部だけでなく、他学部や他大学の学生にも参加してもらおうと考えました。他大学や他学部の講座長が実現しないなど、意図したとおりとはいきませんでしたが、参加した学生に楽しんでもらうことはできたと思います。今年

の試みが来年以降につながってくことを願います。

また、「やりたい人が、やりたいようにやる」ということで、多くのことを講座長やスタッフに一任しました。講座の内容やスタッフについて、こちらからお願いすることはできるだけ少なくしました。そうできた背景には、普段の生活や「YOU遊未来」の活動で築かれた学生同士の信頼がありました。実行委員と講座長、講座長とスタッフとの間に信頼関係があり、「あの人なら大丈夫」と思えたからこそ、やりたいようにやってもらえたのだと思います。

○反　省　全体を通して多くの反省がありました。長である自分の力不足が大きな要因ですが、反省をまとめると、情報の把握や共有不足があげられます。物品や教室の確認や日程や係の仕事の連絡が遅れるなどがあり、それが準備不足や遅れの原因となってしまいました。他にも多くの反省があり、「反省だらけのYOU遊フェスティバル」であったと感じました。反省を来年に活かしてほしいです。

○最後に　様々な問題点、反省点がある中で、大きな怪我もなく、子どもたち、学生どちらも笑顔で「YOU遊フェスティバル」を終えることができました。目標であった「参加するすべての人が楽しむこと」が実現できたのは、多くの方々の協力と、学生スタッフの努力があったからです。関わったすべての人に感謝を申し上げます。これからも、笑顔あふれる「YOU遊フェスティバル」が続いていくことを願っています。

人のちから

副実行委員長　小塚　尚士

「第12回YOU遊フェスティバル」が開催できて、本当に良かった。2日間を終えて最初に感じたことです。副実行委員長としてやると決まった日から当日まで、本当にあっという間に時が過ぎていったように思います。それは自分が充実していた日々だったからだと、後から感じました。

「子どもに笑顔を」という考えを持った多くの人が集まり、話し合い、企画し、一つのものを作り上げていくことが、本当に楽しかったです。この「YOU遊フェスティバル」を作り上げていく中で思ったことは、「人ひとりが与える影響というものは計り知れないものである」ということです。同じ言葉であっても、別の人が言えば別の意味になってしまうこともあります。どの言葉をどの人が伝えればよいか、さらに言えば、この言葉を伝えるにはどんな人になればよいか。そんなことを考えさせられたように感じています。大きなことをするためには、その分たくさんの人の協力が必要です。そして、協力してもらえうる人にならなければなりません。どのようにすればよいかなど、まだ答えは見つかりませんが、このことに気づけたことは大きな一歩であると確信しています。

さらに、もう一つ感じたことがあります。それは、人が集まることによって生まれる力です。子ども300名弱、学生約200名、保護者さんや先生方であふれかえった体育館は、想像を超える熱気と迫力でいっぱいでした。活動中、子どもたちと学生たちが走り回ったり、たくさんのものを作ったり、驚いたり、はしゃいだりしている姿をたくさん見ることができて、幸せな気持ちでいっぱいになりました。こんなに素敵な瞬間を作ることができる「YOU遊フェスティバル」は本当に素敵な活動であると感じられたし、第11回、第12回とこの「YOU遊フェスティバル」に実行委員として関われたことを本当に誇りに感じました。

「YOU遊フェスティバル」を開催するにあたっては、本当にたくさんの方のご協力をいただきました。そして、わかっていたつもりでいた去年とは違い、開催される裏でどれだけの人に支えられているかが、副実行委員長をさせていただき具体的にわかった分、さらに感謝の気持ちが膨れ上がりました。「YOU遊フェスティバル」にご協力いただいたすべての人たちのためにも、より良いものを作り上げなければという気持ちにもなれました。ご協力いただき、本当にありがとうございました。

最後に、「第12回YOU遊フェスティバル」がこのように開催できたのも、土井進先生をはじめたくさんのご協力者とともに、たくさんの学生たちの「想い」があったからこそであると感じています。この「想い」がこの先もどんどん続いていき、そして「YOU遊フェスティバル」がずっと続くことを願っています。

第３回 YOU-YOU キャンプ（３年目）

キャンプ長　五味大紀（理数科学教育専攻４年）
副キャンプ長　成瀬貴心（保健体育教育専攻４年）
監督者　土井　進（信州大学教育学部教授）

○学生スタッフ名　〈キャンプネーム〉

林志　桜理＜ウェルチ＞(生４)　荒井　麻耶＜ひまわり＞(実４)　杣木　亮太＜ネ　ス＞(理４)
北見　　聖＜のんたん＞(言４)　月岡　優介＜メ ラ ミ＞(社４)　羽田　　鋭＜ももや＞(実４)
長谷川ゆかり＜げ　ん＞(生４)　山崎花奈子＜ザーボン＞(言４)　小野　　翼＜KARA＞(理４)
宮田巴都樹＜キ ッ ズ＞(特４)　近江佐紀子＜あ る と＞(実４)　畠山　智晴＜こまち＞(社３)
上野なつみ＜サ ト シ＞(社３)　北村　隼一＜タ ロ ウ＞(理３)　北野　雄大＜チャン＞(社３)
宇治　　貢＜エネゴリ＞(理３)　新井雅菜＜くろちゃん＞(生３)　竹本　崇文　＜蓮＞　(生３)
木田達也＜ゆってぃー＞(社３)　小宮山翔平＜ヘイポー＞(社２)

○参加者人数　子　ど　も　男子 19 名　女子 22 名　計 41 名　監督者１名
学生スタッフ　男子 11 名　女子 11 名　計 22 名　合　計 66 名

○連携団体　・長野市青少年錬成センター　・大岡ふるさとランド「わらわらクラブ」
・青木村教育委員会　・湯谷小こどもランド保護者会　・麻績村教育委員会
・麻績村公民館　・週刊長野新聞社

○活動目標

子どもたちが非日常の中で初めて出会う仲間と触れ合うことで、人とつながることの楽しさや難しさを感じ、子どもが将来多くの人と関わろうとするきっかけにする。

○キャンプまでの活動

活動日	活　動　の　内　容
3月 6日	・YOU-YOU キャンプ紹介　・キャンプテーマ募集
4月 6日	・キャンプテーマ決め
4月 10 日	・キャンプネーム決め　・係決め
4月 17 日	・新企画について
4月 24 日	・キャンプのストーリーについて
5月 1日	・各係で全体に聞きたいこと
5月 8日	・係、１次案発表
5月 15 日	・施設の情報共有　・キャンプのストーリーとテーマの関連について
5月 22 日	・ストーリー再検討
5月 29 日	・リフレクションについて
6月 19 日	・係、２次案発表
7月 3日	・子どもたちの記念品について
7月 10 日	・野外炊飯メニュー決め
7月 17 日	・ストーリーとテーマの関連再検討
7月 24・31 日	・係、３次案発表・手直し
8月 7日	・子どもとの関わり方　・ＴＳ確認　・しおり読み合わせ
8月 8日	・全日程最終確認　・荷物つめこみ

日　程：2013 年８月 11 日（日）～８月 14 日（水）
対　象：各プラザ・長野市内の小学校児童（小学４～６年生）
場　所：長野市青少年錬成センター　＜長野県長野市大字山田中 2100　TEL.026-229-3731＞
予　算：参加者１人　8,000 円　＜内訳：食費、宿泊費、活動物品費、保険加入費など＞

○各活動内容

１日目	２日目	３日目	４日目
	7:00 朝　食	7:00 朝　食	7:00 朝　食
子ども到着	8:00 団結企画	8:30 みんなの１日	8:30 アルバム作り
12:45～ 受　付	11:00 カレー作り		10:00 リフレクション
13:10 保護者説明会	14:00 ゆったりタイム		11:00 掃　除
14:00 アイスブレイク	16:00 計画タイム	15:30 お祭り	12:00 昼　食
15:00 ネーム作り	(お祭り＆みんなの１日)		12:30 ゆったりタイム
17:30 焼きうどん作り	18:00 夕　食	19:00	14:00 ふりかえり
19:30 入浴＆就寝準備	19:00 ナイト企画	キャンプファイヤー	14:30 終わりの会
20:30 班ミーティング	20:00 入浴＆就寝準備	20:00 入浴＆就寝準備	15:00 解　散
21:00 就　寝	21:00 就　寝	21:00 就　寝	

１．**アイスブレイク**　この企画は、出会ったばかりである子どもたちが、いろいろなゲームをすることを通して緊張を解き、４日間のキャンプへの期待を持ってもらう目的で活動しました。
　初めは緊張していた子どもたちでしたが、ゲームをみんなでクリアしたり、協力し合ったりすることを通して、仲良くなっていた様子でした。

２．**ネーム作り**　この企画は、４日間使う自分の名札をフェルトを使って作りました。友達と案を出し合いながら作る姿や、試行錯誤しながらも真剣に作業に取り組んでいる姿が印象的でした。

３．**団結企画**　この企画は、少しずつ打ち解けてはきたが、まだ自分が出せずにお互いに距離がある子どもたちが、数々の課題を仲間と協力して解決することを通して達成感を共有し、つながることの楽しさや大切さを実感し、班の仲間・班としての仲（まとまり）を更に深めていくことを目的として活動しました。時間の経過とともにしだいに班で協力して活動している姿がみられるようになり、活動の前と後での班の会話の数が多くなったことが印象的でした。

４．**ナイト企画**　この企画は、団結企画です。班の仲が深まっただろう子どもたちが、夜の自然の中を歩くことを通して、みんなと一緒にいる安心感や、協力し合うことの大切さを感じることを目的として活動しました。夜の自然の中を、課された課題をクリアしながら、時にはおばけに驚かされながら、時にはみんなで大声で歌を歌いながら歩いていきました。子どもたちは「怖かった！」「今年は参加できてよかった！」などと話していて、とても盛り上がっていました。

５．**みんなの一日**　このキャンプのメイン企画です。他の活動は学生が企画をしているものですが、この活動は生活班で一日何をやるか計画をするものです。その中で班としての輪を感じてもらうことを目的として活動しました。他の班と合体して逃走中を行うする班や、バーベキューをする班、焼きビー玉をする班、それぞれの班の特色が現れていました。時には自分の意見を主張し時には友達の意見を聞き入れて活動に移る姿が多く見受けられ、それまでの３日間の中での成長が見られた活動でした。

６．**お　祭　り**　この企画は、班を混ぜた新しい仲間と屋台を経営する中で、班の枠を超えた仲間と協力する楽しさやつながりを築く喜びを感じることを目的として活動しました。子どもたちは、屋台を成功させようと手作りで看板を作ってお客さんを呼び込んだり、一生懸命に声を出してお店を経営していました。

７．**キャンプファイヤー**　この企画は、皆でおこした火を囲み、輪になって歌ったり踊ったりする

ことを通して、３日間共に過ごした仲間との絆をより深めることを目的として活動しました。係の企画を基に子どもたちは一生懸命に声を出して踊っていて、３日間の中で一番声を出して楽しんでいた様子でした。

８．班ミーティング　今年は初めて子どもたちだけで行う班ミーティングの時間を、毎日の就寝前に取り入れました。理由は、４～６年生にもなれば、学生に頼らずに自分たちの力である程度のことはできると考え、自主性を育てるために、次の日の予定や持ち物、今日の反省など、班長を中心に話し合いました。やはり、高学年生です。このミーティングにより、持ち物が分からない時や集合時間などが分からない時には、子どもたちだけで解決する場面が前年より多く見受けられました。

９．リフレクション　この企画は、毎日の出来事や思ったことを文字に起こすことで、一日を振り返りいろいろなものへの感謝の気持ちであったり、友達のありがたさを感じてもらうことを目的として活動しました。子どもたちは真剣な雰囲気の中、言葉や絵にして、楽しかったことや辛かったこと、苦労したことなどを書き表していました。後日、子どもたち全員が書いた感想文を冊子にまとめ、各家庭へ送りました。

○子どもたちの感想文（一部抜粋）

・１日目に新しい友達とオリジナルグッズを作ったり、夕食を作ったりできてよかったです。
（麻績小６年女子）

・まきわりは楽しかったけど、初めてなたを使うから少し怖かった。二回目は、真っ二つになって気持ちよかった。（城山小４年男子）

・この四日間、本当に短かかったです。大学生や班の人たちにお世話になりました。ありがとうございました。（青木小５年男子）

・みんなの１日では水玉合戦やお昼のバーベキューでは仲良くできた。幸せを感じた。
（若槻小５年男子）

・YOU-YOU キャンプは２回目だけど、２回目は違う班のみんなとたくさん思い出ができてよかったです。（麻績小６年女子）

・キャンプファイヤーは火がとっても熱かったけどそのまわりを楽しくおどれてよかった。
（昭和小５年男子）

・２日目は「対・かいとう YOU 訓練」のときに、みんなでどこにいくのかとか、いっしょにさがしたりのゲームで、協力して犯人をつきとめられたのでよかったです。（若槻小５年男子）

・はじめて会う人もいた中での班だったからなれるのは難しかったけど４日間を振り返るといつのまにかなかよくなっていました。（麻績小６年女子）

・友達ができないかもと思ってたけどＡ君やＢ君みたいな楽しい友達ができてよかったです。
（緑ヶ丘小４年男子）

・みんなでテントの中で寝袋でねました。寝袋は初めてだったのでとても楽しかったです。
（吉田小６年女子）

・四日間アルバム作りが楽しかった。学生さんのサインがもらえてよかった。（麻績小５年女子）

・みんなとわかれるまえにはもっともっと遊びたいなと思いました。（裾花小６年男子）

・小学校生活最後の夏休みに、とっても楽しい思い出ができてよかったです。（麻績小６年女子）

・２日目の夜のないと企画は、ぼくは怖いのは苦手なので、いやだったけど、ギブアップしませんでした。（若槻小５年男子）

・このキャンプはつかれたけどそれ以上に楽しく、それ以上に最高なキャンプでした。
（麻績小６年男子）

・４日目はアルバムを作りました。アルバムは一人一人がオリジナルで色々な個性がでていてすごいなと思いました。（青木小６年女子）

・あたまがいたくなったり、おなかがいたくなったりしたから少し残念だった。でも班やキャンプの仲間、大学生がいたから楽しかったし、良いキャンプだったと思う。（青木小６年女子）
・お祭りではかき氷の屋台をやった。うでがいたくて、大変だったしほかの屋台もガンバッテいてすごくおいしかった。（麻績小６年女子）
・ゆったりタイムのときドッジボールをしたらたくさん友達ができたのでよかったです。（若槻小５年男子）
・とても楽しかったです。本当に楽しい四日間でした。ありがとうございました！（麻績小６年男子）

○学生スタッフが YOU-YOU キャンプで学んだこと、感じたこと（一部抜粋）

・ほとんどの子と初対面でしたが、楽しく過ごすことができました。初めのうちは一人の子がなかなか他の子と打ち解けられず、つきっきりになってしまった場面がありました。その中で、できるだけ他の子とつながることができるような声がけを心がけました。子どもたち同士がぎこちない段階では、学生の「みんなを巻き込む」ような話の仕方が大切だと思いました。ずっとくっついていた子も、最終日には私を呼ぶ回数がぐっと減って、同じ班の友達と一緒に遊ぶ姿がたくさん見られてとても嬉しかったです。子どもたち同士も初めて会うというキャンプに参加したことがなかったので、打ち解けていく様子がとても印象的でした。その中で自分に何ができるかを考え、子どもと学生のつながり以上に子ども同士のつながりを考えて行動できたかなと思います。
・子どもたちは１人ひとりいろんな思いを持って過ごしているのだなと改めて感じました。学生は今までずっと一緒にやってきたから何かあっても助け合えるという学生間の信頼関係もあるし、かわいい子どもたちと関われるし、頑張ってキャンプを成功させようっていう強い思いもあるけれど、そのそばで、初めて会う子どもたちの中にいることの緊張や不安から頭が痛くなってしまっている子、班の中での自分の居場所が分からなくて家に帰りたいと必死に涙をこらえている子、体調はすごく悪いのにみんなと遊んだり次の企画が楽しみだったりして自分の中で葛藤をしている子、そんな風にいろんな思いを抱えている子どもたちが自分のそばにいるんだということを忘れてはいけないなと思いました。

　キャンプをするうえで、時間どおりに進行したり、企画を問題なくやったり、そういうこともすごく大切だけれど、それが目的になったらいけないと、改めて感じました。

・４日間、何をしていても常に 41 人の子どもたちのことを考えていました。“子どもたちのために動く”ことの楽しさを実感した４日間でした。子どもたちのことを陰で支えることを経験できて、とても勉強になりました。直接関わるよりも、陰で支えたり準備したりする方が、常に先のことを考えて動く場面が多かったからです。子どもたちがもっと大きくなったとき、「YOU-YOU キャンプ」という名前は忘れてもいいけど、たくさんの人とつながれる大人、人とつながる楽しさを知っている大人になってくれていたら嬉しいなと思います。
・今回のキャンプを通して先輩方・子どもから学んだことは非常に多かった。子どもへの声掛けが難しいと感じた。「どのように言えば子どもたちはこちらの言うとおりに行動してくれるのか」と、自分の中で考えながらキャンプ中過ごしていたのだが、やはりこの短いキャンプの中で答えというか手ごたえを得ることはできなかったので、これから他のプラザでもっと子どもと関わっていきたいと心から思った。先輩たちの様子をみて、声掛けにもいろんなアプローチの方法があることを学んだので、実践して行こうと思う。
・今年のキャンプは途中で帰る子どもも出ず、最後までみんなで過ごすことができたということが、本当に大きなことだったと思います。ゆったりと子どもたちとかかわることもでき、とても有意義なキャンプでした。また、キャンプは学生一人ひとりの意識が高くないと絶対に成功しないものだということを感じました。私は本当にみんなに助けられながら動いていたと思います。自分が子どもたちと関わったり、他の学生が子どもたちと関わったりしている姿を見る中で、子どもとの接し

方や支援の仕方などもたくさん学びました。常に子どもを真ん中において考え行動するみんな（学生）の姿をみて、見習いたいと強く思いました。

・班つきが常に声をかけなくても子どもたち同士で声を掛け合って、支え合って４日間を過ごしていく姿に、子どもの力がなければキャンプを安全に終わらせることはできなかったのだなと、子どもの力の大きさを感じました。自分（学生）が「子どもではない立場」としてできるのは、子どもが見通しを持って活動できるように環境を整えること、子ども同士のつながりが主となって活動できるようにうまく間に入ることなのだなと感じました。

◇実践から得た「臨床の知」・

人とのつながりを意識したキャンプ

五味大紀 ＜ファービー＞（キャンプ長）

初めに、このキャンプを支えていただいたたくさんの方に感謝を申し上げたいです。キャンプの監督者として多くのことをご指導いただいた土井進先生、ご理解とご尽力くださった各プラザ責任者の方々、「YOU-YOU キャンプ」を優先し、施設を貸していただいた錬成センターのスタッフの方、子ども募集に協力していただいた週刊長野の方、保険会社の方、僕たちに子どもを預けていただいた保護者の皆様、全力で子どもたちのことを考えた 21 人の学生スタッフ、そして、元気に３泊４日を過ごした 41 人の子どもたち、本当にありがとうございました。

初めてキャンプ全体を企画していく立場になり、このキャンプは何のためにするのか。この活動は何のためにするのか。安全管理は大丈夫か。学生スタッフは集まるのかなど、悩みや不安はとても多くありました。ただ、そういったことを考えていく中には、必ず、子どもにとっての１番を考えていこうという想いがありました。軸となるものが子どもにとってどうするのがいいかということにすることで、キャンプの軸は、ぶれることなくできたと感じています。それは、私一人の意識ではなく、学生スタッフの子どもたちに対する熱い想いがあったからこそ、できたものだとも思います。

今年で３回目の「YOU-YOU キャンプ」は、一昨年は土屋克明さん、昨年は楢崎亮人さんという素晴らしい先輩から引き継いだ企画です。子どもたちに、つながることを実感し将来たくさんの人と絆をつくってほしいという願いが、このキャンプにはあります。私は、過去２年間キャンプに参加していて、学生と子どもはつながることができたが、果たして子ども同士もつながることができていたのか、といった疑問が少しありました。そこで、子どもの班ミーティングの時間を新たに作り、子どもたちが次の活動に向けて自主的に、仲間たちと動く様子を見たいと思いました。その結果、子ども同士が話す場面が増え、子ども同士の中は深まったのではないかと感じています。また、キャンプを企画していく中で、私自身がたくさんの方とつながり、支えてもらうという経験もさせていただきました。人とつながることのよさを、このキャンプを通して、改めて学ぶ機会をいただけたことに、とても感謝しています。

キャンプ当日は、子どもたちから様々な姿を見ることができました。アイスブレイクではまだまだ緊張してこわばっている姿、ネームを作りでは集中して自分のネームを作ろうとする姿、野外炊飯では友達と協力してご飯を作っている姿、団結企画では班の仲間同士と協力し合い色々な課題に取り組む姿、また、みんなの１日の計画を積極的に話し合っている姿、ナイト企画では、みんなとまとまり固まって歩いていく姿、みんなの１日を楽しんでいる姿、屋台を他の班の子どもと一緒に運営していく姿、キャンプファイヤーで楽しそうにゲームやダンスに取り組む姿、アルバムに自分の想いを飾っていく姿など、本当にたくさんの姿を見ることができました。そんな楽しんだり、喜んだりする姿以外にも、親と離れた環境に慣れず悩んでいたり、仲間と意見が合わずに悩んだりと、子どもたちはたくさんの経験をしたのだと思います。

このキャンプでは、学生スタッフは全員が見守るスタンスをとり、時には一緒に楽しんだり、時には厳しく注意などをして過ごしました。その中で子どもたちは、キャンプをただ楽しい思い出だけとするのではなく、様々な経験をも積み重ねることができたと思います。そして子どもたちには、キャンプで41人の仲間、22名の学生スタッフとつながる楽しさを経験し、人とつながることの本当の楽しさを少しでも実感できたといえるキャンプであったと、思ってもらえたらと思います。

子ども同士がつながるキャンプを目指して

成瀬貴心 <ナベアツ>（副キャンプ長）

今回は本部という形だったので、子どもたちと直接関わる機会は少なかったのですが、前回に比べて子どもたちが学生に頼ることなく、自分たちだけで行動する場面が多く見受けられ、今回自分が目標としていた部分に関してはとても満足しています。

前回のキャンプで自分が一番気にかかったのが、キャンプ最終日に子ども同士別れるのがさみしいのではなく、学生と別れるのがさみしくて泣いている子どもが多かったことです。「YOU-YOU キャンプ」は、いりいろなプラザに参加している子どもたちがプラザという枠を越えてつながりを持ってもらうことを目的としているが、子どもよりも学生と別れることを悲しんではいけないと感じ、本部となりそれを改善したいと思いキャンプに参加しました。今回のキャンプでは班ミーティングなど子どもたち自身で考え、行動する形を多く取ったからか、子どもたち同士の関わりがこれまでより多く見受けられたように感じます。リフレクションにも、「○○さんと仲良くなれた」「今日は○○くんと仲良くなった」「○○ちゃんと遊んで楽しかった」と書く子どもが増え、子どもたち同士の関わりが増えたという点に、自分が目指していたところでもあり、満足しています。

キャンプのスタッフ集めについては、本部でたくさん時間をかけて話し合いました。その結果、「YOU 遊」はやりたい人がやりたい時に参加する活動なので、参加したいと思っている学生が参加できなければ「YOU 遊」ではないと感じ、このキャンプに参加したいと思っている人をスタッフとして集める形をとりました。その形をとったことで、意識の高い学生が集まり、参加率が高く、質のいい話し合いができ、キャンプに臨むことができました。

キャンプ本番に関しては、係一つひとつが面白く、興味のわく企画を考えてくれて、子どもたちが本当に楽しそうに活動している姿が印象的でした。本部の仕事のため、子どもたちが活動している様子はあまり見ることはできなかったのですが、終わった時のいきいきとした顔や言動で、子どもたちが本当にキャンプを楽しんでくれたのだということを実感ました。

最後に、支えてくださった先生方、センターの方々、保護者の皆様、41人の子どもたち、学生スタッフ22人で作り上げてきたキャンプは、最高のものになりました。学生最後の「YOU-YOU キャンプ」が、このように多くの方々に支えられ、最高の形でやってこられて本当によかったです。ありがとうございました。

「信大 YOU 遊未来」未来道場（２年目）

プラザ長　栗林詩菜（芸術教育専攻４年）

副プラザ長　宮田巴都樹（障害児教育専攻４年）・織田裕二（生活科学教育専攻４年）

○協力者　信州大学教育学部の先生方　他

中川弘泰先生（信濃毎日新聞社ＮＩＥ担当、元長野県小学校校長会会長、元後町小学校長）

小岩井彰先生（元長野県教育委員会東信教育事務所生涯学習課長、上田市立北小学校長）

○プラザの概要　若い教師にとっての基礎基本を鍛錬する場として平成 10 年度に開講された「現代教師学演習」を前身とし、全国各都道府県の教員採用試験に合格できる実力を磨くとともに、学校現場に出てから有能な戦力となることができる人間力を練磨することを目的に、早朝の稽古を開始した。現在までに通算 553 名の学生が参加し、参加者は全国各地で教員として活躍している。このプラザは全国の教員採用試験を受ける信州大学教育学部４年生が、教員採用試験で実施される実技や小論文、面接の練習などを通して、一人ひとりの資質能力を高めていく場である。また、教師として実際に教育現場に出る際求められる実践的指導力を習得するため、学部の先生方や外部の先生方、OB・OG の方々から専門分野や実践活動についてお話を聞き、個人の視野や知見を広げる場としている。

○活動目標・活動内容　参加者の教員採用試験合格、資質能力の向上、広い視野や知見の獲得

８：00～８：15　体育館の清掃やキャンパスのゴミ拾い	８：50～９：10
８：15～８：30　準備体操、ランニング、マット運動等の実技練習	グループ討論、面接練習
８：30～８：50　学部の先生方や外部講師の方からの講義	９：10～９：30　小論文練習

◇実践から得た「臨床の知」・―　　道場から始まる一日　　栗林詩菜（芸術教育専攻４年）

未来道場で多くの仲間、先生、先輩と出会い様々な考え方を知るうちに、自分の世界が広がりました。毎朝人に会い掃除や体操をして、多くのことを考え伝えまた考える。この道場から始まる一日は、とても気持ちの良いものでした。教員採用試験が近づき仲間が増えていくと、「今日はどんな話ができるだろう」と、わくわくしました。道場で出会った多くの仲間とともに、教師を目指すという目標に向かえたことをとても嬉しく思っています。同じ目標を持った人が集まる場所は一見狭い世界に見えますが、一人ひとりの考えにしっかり目を向けると、そこにはとても広い世界があることを知りました。道場での学びを糧に、これからも多くの人の考えに触れながら、広い世界を感じていきたいです。

「３文」以上の得　　宮田巴都樹（障害児教育４年）

実践記録を書きながら、教員採用試験を不安に思いながら勉強していた昨年の今頃を思い出しています。最初は「めんどくさいなあ」と思っていたのですが、仲間と共に続けることで苦手だった掃除も集団討論もだんだん楽しくなりました。朝早いけれど、３文以上の得が得られたと思います。他の YOU 遊の活動と違って、子どもと関わるという時間はないけれど、その分、自分自身と自分の夢に向き合うことができた時間でした。未来道場を通じてたくさんの先生、仲間に出会えたこと、その仲間とともに自分の夢に挑戦できたこと、それをこうして振り返られる今があることがとても幸せです。

道場で得た教師への第一歩　　織田裕二（生活科学教育専攻４年）

未来道場での活動は、今後の私のとても大切なものになると思います。同じ志をもった友たちと同じ夢に向かって自己を高め合う時間は、私にとって、とても貴重なものになりました。毎朝、掃除から始まります。一緒に身体を動かすことで、怠けていた生活習慣が正されました。このことによって、未来道場以外の部分でも、１日を充実させることにつながりました。仲間との協力や生活習慣などは、教師として社会に出てからも当然必要になってくるものです。その基礎を養ってくれた未来道場は、私にとって、社会へ出る基礎、社会人としての基礎力を培う場になったと思います。私を副道場長に任命してくださった土井進先生、道場長の栗林さん、副道場長の宮田さん、そして道場に参加しともに高めあった仲間たちに感謝いたします。皆様、ありがとうございました。

「信大YOU遊未来」夢　村（2年目）

発起人 市川香織（千曲市立東小学校）　宮尾　亘（諏訪市立下諏訪北小学校）
服部直幸（須坂市立森上小学校）　三石梨沙（中野市立中野小学校）

○活動参加者

社会人：　市川香織　宮尾　亘　服部直幸　三石梨沙　太田真耶　三枝裕紀　柳沢秀樹　加藤博美　北澤瑞樹　吉越　真　田中沙結美

学　生：　飯島香純（信大・教）　横田克己（信大・教）　北村隼一（信大・教）　藤本歩玖（信大・理）　近松大資（信大・理）　小山俊滉（信大・理）　佐藤　梓（長野大）　中村仁哉（長野大）

○参加者数　社会人11名、学生8名　　**○顧　　問**　小岩井 彰（上田市立北小学校長）

○連携団体　地球クラブ、タイ暁の家プロジェクト

○プラザの概要

「信大YOU遊世間」OB・OGを中心に発足したプラザである。学校現場には同年代の教員は少なく、日々の悩みや考えを語り合う機会もあまりない。現場に出るとなおさら学生時代に得た仲間たちとのつながりが恋しくなり、自身の夢や悩みについて語りたい！聴いてほしい！という願いが大きくなる。それが「夢村」を生むきっかけとなり、今年度で2年目を迎えた。学生時代より青木村や大岡小学校でお世話になってきた小岩井彰校長先生を顧問に、青木村を拠点とし、さまざまな方とのご縁をつなげていただきながら活動している。学校の中のせまい価値観では、本質的な教育はできない。学校教育のみならず、世界的な視野や地域とのつながりという視点から、多様な人と出会い、つながらせていただくなかで、人として、教師として成長させていただける場所である。

○活動目標

① 人として、教師としての“かまえ”を築く

② 多くの人と、出会いつながらせていただくなかで、“ご縁とおかげさま”を学ぶ

○一年間の活動

活動回	活　動　日	活　動　内　容
第1回	6月22日(土)	講演会：「ラーメンづくりで子どもと私が学んだこと — 人とつながり、支えられ、委ねられて —」 講　師：信大OB生　三枝裕紀さん（佐久市立泉小学校）
第2回	7月30日(火)	講演会：「芝浦と場の歴史と差別2」（東信地区人権教育リーダー養成講座） 講　師：東京都中央卸売市場芝浦と場　栃木裕さん
第3回	11月25日(月)	東京都中央卸売市場　芝浦と場視察研修
第4回	11月30日(土)	講演会：「忘れない、くじけない — 子どもたちに夢と希望を —」 講　師：福島県南相馬市立大甕小学校・前校長　平間勝成先生

＊ 毎回の活動後に懇親会を開き、参加者同士で思いや悩みを語り合う時間も、大事な活動です。

◇参加者の声

夢村の価値や意義

夢村の発起人として活動させていただき、2年目が終わろうとしています。教員として仕事をさせていただいてつくづく思うことは、自分の視野の狭さです。周りの先生方のお力もあって毎日過ごすことができていますが、一日一日と仕事に追われ、気がつけばもう子どもたちが帰る時間、気がつけばもう夜になっています。あっという間に過ぎていく日々ですが、充実しているが故に外の世界に目を向けようとせず、去年と同じようなことを繰り返している気がします。そんな私に「もっと色んな

人と繋がらなければ」と喝を入れてくれるのが、夢村という存在です。南相馬市大甕小学校平間勝成先生のご講演では東日本大震災についてお話いただき、同じ国で起こっていることを、自分とは遠い場所の違う世界のことだと思い込んでいたのではないかと考えさせられました。ちょうど勤務先の小学校の人権の研究授業で「自分の近くのこと（人）として、心を寄せていくことの大切さ」についてご指導いただいた後でした。募金だ何だといっても、そもそも私の向き合い方が間違っていたのだとハッとしました。夢村に関わらせていただいてたくさんの方と繋がり、話をすることができました。自分の知らない様々な世界のことを知り、心を寄せていくことができたと思います。そのおかげで教師としての在り方、人としての生き方を考えさせられました。これらの全てが、私にとって貴重な財産です。発起人という立場でありながら企画運営は周りの先輩方に頼りっぱなしで、２年を終えようとしています。この場を借りて、お礼を申し上げます。来年度は自分からも繋がりを作り、またたくさんの方との繋がりを増やしながら心を寄せ、自分の成長を通して恩返しをさせていただきたいと思います。

三石梨沙（中野市立中野小学校）

わたしにとって夢村は、自分の甘さを痛感する場です。私事ですが、今年度社会科研究授業をやらせていただくなかで自己課題にもがき苦しむことが多かったので、夢村で出会う人たちのまっすぐな瞳や、自分を信じてたくましく生きようとする姿がとてもまぶしく、一種の憧れのような思いと共に、いつも胸にやきついていました。ラーメンづくりの実践発表をした三枝裕紀さんからは、論理だけでなく実践を通して自分の信念を形にあらわしていく力強さを学びました。芝浦と場の栃木裕さんからは、自分や仲間を信じきってぶれることのない根の深さを感じました。福島の現状を伝えてくださった平間勝成先生からは、辛くても前を向き、希望をもって生きることの尊さを教えてもらいました。「自分なんてまだまだ･･･」と思わせてくれる夢村は、わたしにとってかけがえのない場所です。けれど大抵は「いいな～あの人は」で終わってしまうところが甘いのです。来年は、論理だけでなく実践で、思っているだけではなく言葉で、“自分”という根をしっかりと張り巡らせる年にしたいです。

また、夢村は地球クラブと共同体で活動させていただいています。そのおかげで、２年目を無事に終えることができました。今後も青木村で地球クラブと共に歩ませていただければ幸せです。「会いたい人がそこにいる」だからわたしは、夢村に参加しています。卒業してもなお、大好きな青木村で、尊敬する先生の下で学ばせていただけることに、感謝の気持ちでいっぱいです。

市川香織（千曲市立東小学校）

今回原稿を書くに当たり、夢村の意義を確認するために、もう一度昨年度の自分の原稿を読み直してみました。すると、そこにはこう書いてあります。――「思いを持って現場に出ても、職場の環境や忙しさから、いつの間にか自分の夢や信念を忘れてしまう人はいるのではないでしょうか。そうした仲間が、みんなと集まり、講演会を聞き、一緒に活動し、飲みながらお互いの思いをぶつけあう事を通して自分の夢を見失わないようにする場、夢を持った人が集まる場が「夢村」なのではないかと私は思います。」―― 私も悩み、自分の信念を忘れそうになることが何度もありました。その度に、夢村に何回も救われてきました。また、今年は、福島から平間勝成先生をお呼びし、ご講演をいただきました。震災当時の様子や、今も続く福島の現状を聞き、今の自分たちにいったい何ができるのか、もう一度考えさせられました。こうした講演を聴き、自分自身の心のチャンネルを広げていくことも、夢村の大きな意義の一つだと思います。運営面でまだまだ、軌道に乗らず課題も多い夢村ですが、仲間やお力添えをしてくださっている小岩井先生や地球クラブの太田さんと協力し、続けていけたらと思います。

宮尾　亘（諏訪市立下諏訪北小学校）

夢村で私が学んでいること

NPO 法人 響育の山里 くじら雲 研修生 太田　真耶

「夢村」で学ばせていただいて２年が経とうとしています。私は、学生の頃から小岩井彰先生が主宰する「地球クラブ」のスタッフとして、子どもたちと野外体験や野外遊び、無農薬の野菜作り、キ

ャンプを行うための企画運営を学んできました。現在は、地球クラブに「森のようちえん」をつくることを目標に保育の現場で働いていますが、他の仕事をしている人たちから話を聴く機会は普段なかなかありません。夢村には、信州大学のＯＢ、ＯＧほか、大学生や短大生、教員、保育士、福祉現場で働くことを目指している学生、企業で働いている人･･･。様々な背景を持って仕事をしている人も集まり一緒に学ばせていただいています。私は、夢村で出会い、共に学び、多くの考えに触れる機会を何度もいただいてきました。夢村の活動を終えた数日間は、夢村で話したこと聴いたことが頭から離れません。「学びを得た」という実感があるのです。夢村では「教育」を切り口に、講師の先生をお呼びしてお話を聴いたり、草刈り機を持って草刈りをしたり、海外に一人旅をした学生の話を聴いたりしたこともありました。そして、今まで自分がやったことのない経験に触れる機会をいただいてきました。私自身「何を悩み、何をしたいのか、自分自身がどうしたいのかが分からない」という時期がありました。自信が持てず、失敗を恐れていたのかもしれません。そんな私が、夢村で何でも話し、どんな意見を言っても受け止めてもらえることで、自分をさらけ出し、やったことのないことにチャレンジさせてもらう経験を通して、少しずつ自分を見つけることができてきました。ある学生が言いました。「これまでは自分のことばかり考えてきたけど、こんなに他人（ひと）のことを考えたことがなかった」と。夢村の大きな意味は、自分とは違う考えや思いに触れ、その後、自分の考えが修正されたり、自分の考えに改めて自信が持てるようになったり、もっとこれについて知りたい！と前向きになれるところにあるように思います。

夢村のもう一つの魅力は、活動の後の懇親会です。用意するのは、「瓶ビール」です。乾杯の後は、それぞれがビールを手に「お酌」にまわるのです。小岩井彰先生も若者のところにまわって下さり、お酌をして励まして下さいます。ここには勢いがあります。一人でいる人がいれば、必ず誰かが隣へ行き、お酌から会話が始まります。１対１の会話の中に、もう一人、また一人と加わり会話の輪ができることもあります。夢村には、参加している誰ひとりも寂しい思いをさせない雰囲気があります。その雰囲気の中に、後輩が入り、新しいメンバーも入ってきますが、その雰囲気と、「お酌にまわるんだよ」という先輩の一言から学ぶのです。そして実際にやってみて、「お酌」の意味を知ります。お酒が入って、話しやすくなった雰囲気の中での学びも多くあります。日頃の愚痴も出ます、悩みも出ます。「私もあるある」と聞いてもらえるだけで、心が軽くなり、「それは、本当はこうなんじゃないの」と言ってもらえるだけで、はっと気付かされます。これまで得た知識や経験の中にプライドを持っていたり、「こういうもんだ！」というものも持っていたりしますが、そのプライドが覆されるような話を聴くこともあります。「なにくそ！」と思う中で、「この人も頑張っているんだ、私もまた頑張ろう」と、奮起する気持ちが生まれます。

私は、28才になりますが、振り返ってみると20代は自分の芯の土台を作るときなのだと思うようになりました。様々な経験をさせていただく中で時には理不尽に感じるようなこともありました。失敗や挫折も今でも多くあります。でもその中で問われるのは自分自身の在り方で、自分自身を見つめ直す必要がでてきます。嫌な自分と向き合わなければならないこともあります。でもその中からしか自分自身の成長にはつながらないのだということも実感として分かってきました。さらに、多くの人と出会わせてもらい、生き様に触れる中から「自分はどうしていきたいのか」という芯が少しずつできてきたようにも思っています。私自身は、夢村では傷をなめ合うような関係ではなく、互いに刺激し合いながらお互いを高め合い、また頑張ろうと前向きな力をもらえる場にしたいと思っています。私は、「何を話したいか、何を学びたいと思っているのか」ということを持って夢村に臨むことにしています。「自分なりに何が得られたか」というものを求めた学びを今後も仲間と共にしていきたいです。仲間と共に広い視野と目標を持って地道に歩んでいこうと思える場で学ばせていただいていることに感謝しています。これからも、夢村のスタッフとして、仲間と共に学びの場を創っていきたいです。

☆「信大YOU遊未来」連携活動の紹介☆

放課後子どもプラザ　信　里（3年目）

プラザ長　加々美理沙（言語教育専攻4年）
副プラザ長　月岡　優介（社会科学教育専攻4年）

○学生スタッフ名

宮田巴都樹(特4)　木田　達也(社3)　大嶋　拓也(実2)　小松　一成(理4)　横田　克己(社3)
村松　知美(芸2)　北見　　聖(言4)　上野なつみ(社3)　関口　美緒(生2)　岩瀬　由依(言4)
三井　夕衣(言3)　正木　文華(社2)

○参加者人数　子ども　60人

○プラザの概要

「放課後の子どもたちの居場所づくり」という長野市放課後子どもプランのボランティア団体に登録し、長野市立信里小学校に併設する子どもプラザにて活動しています。学校が終わって保護者の方が迎えに来られるまで、子どもたちと遊んだり宿題指導をしたりしています。学校が休みの日は、施設の方が企画してくださった各種イベントに参加しています。

○一年間の活動（イベント）

活動回	活動日	活　動　内　容	活動回	活動日	活　動　内　容
1	5月	茶臼山動物園へ遠足			
2	7月	水鉄砲大会・ザリガニ釣り	5	10月	おはぎ作り
3	8月	夏野菜カレー作り	6	10月	ハロウィンパーティー
4	8月	夏 祭 り	7	12月	クリスマスパーティー

○各活動内容

遠　足	子どもたちと、歩いて30分ほどの茶臼山動物園まで一緒に歩きました。動物園を見て回った後、お弁当を食べてアスレチックで遊びました。
ザリガニ釣り	施設の近くの池で手作り釣竿に「するめ」をつけて、ザリガニを釣りました。全員で100匹以上捕まえることができました。
料　理	地域でとれた野菜やもち米などを使って、カレーやおはぎを作り、子どもたちと一緒に食べました。
季節のイベント	夏祭りにはたくさんの屋台を出し、ハロウィンでは仮装をしてお化に入るなど、季節に合わせたお祭りにみんなで参加しました。

◇実践から得た「臨床の知」

信里での出会いとつながり

月岡優介（社会科学教育専攻4年）

私にとって、信里は先輩とのつながりがあって訪れたのがきっかけでした。「YOU遊」のプラザとして大きく確立はしていません。しかし、「YOU遊未来」の名をお借りし、プラザの施設長さんや鳥羽さんのご理解とご協力のもと、活動に参加させていただきました。なによりも子どもたちに出会わせていただきましたことを、本当に感謝しています。

信里の子どもたちは、私たち学生の存在が珍しく、子どもたち同士で遊ぶ感覚と同じように、私たちも毎回の活動の中で触れ合っています。遠足、ザリガニ釣り、夏祭り、ハロウィン、クリスマス会、

おはぎやカレー作りなども子どもたちと一緒に行いました。学生として一歩引いた目線というよりも、プラザで企画していただいた内容を子どもたちと同じ目線で楽しませていただきました。自然に囲まれた信里地区で、素敵な施設の方々、元気いっぱいな信里の子どもたちとの出会いを、「もっと多くの学生に知って欲しい」という想いで、理沙と協力をして今年度の活動の宣伝活動を行ってきました。幸い、活動に興味を持ってくれた学生が多く、昨年度に比べ多くの学生が信里の地を訪れてくれ、信里の子どもたちとたくさん関わってもらうことができました。約2年間この場所での活動に協力させていただき、本当に子どもたちや施設の方との楽しい思い出ばかりです。来年から私自身がこの地で関わりをもてなくなります。施設の鳥羽さんからいつも言われていたことは、「来年もよろしくお願いします」ということでした。毎回のように言われるその言葉は、先輩方から続くプラザと信大生との信頼関係がこれまでに築けたからこそ、「是非また来てほしい」「つないでいってほしい」と思っていただいているのだと、強く感じています。

子どもたちやたくさんの人の「出会い」と「つながり」は、喜びや幸せで満ち溢れた気持ちにしてくれます。信里での出会いとつながりを大切に感じていただける学生たちに、是非とも施設の方の想いを汲んで来年度以降もつながっていき、広げていけるような活動になることを願っています。ここでの活動に参加させていただき、本当にありがとうございました。

福島愛育園訪問（2年目）

代表　月岡優介（社会科学教育専攻4年）
代表　北見　聖（言語教育専攻4年）

○学生スタッフ名

山崎花奈子(言4)　成瀬　貴心(保4)　小平　早紀(地4)　北野　雄大(社3)　加藤　貴浩(社3)
木田　達也(社3)　畠山　智晴(社3)　横田　克己(社3)　酒井　友輔(理3)　新井　雅菜(生3)
上野なつみ(生3)　松井　　六(現2)　宮崎　誠也(英2)　勝野　里穂(社2)　小宮山翔平(社2)
田中　　優(社2)　保崎衣芙季(社2)　正木　彩華(社2)　上野　　暁(数2)　松元可南子(現2)
土屋　祥太(工3)

○参加者人数　子ども　約30人　　**○連携団体**　社会福祉法人 福島愛育園

○企画の概要

私たちは、昨年から大岡農楽里ファームさんと福島愛育園さんのつながりの中に、信州大学の学生スタッフとして、活動の支援に参加させていただいています。

昨年度2月には、卒業された北沢瑞樹さんの企画のもと、福島愛育園さんを訪問させていただく機会を設けていただきました。今年度に入っても、大岡の遠藤夏緒さん、愛育園さん、信大生とのつながりは継続し、大岡での4泊5日の夏のキャンプ（福島キッズキャンプ）、同様に10月の稲刈りとご協力をさせていただきました。そして、昨年度に続き、「もう一度福島を訪問させていただきたい」「子どもたちに会いたい」という想いをもった学生がいました。

この学生たちの想いをつなげ、なにより代表者のふたりが愛育園の子どもたちに会いたいという気持ちで、この企画に至りました。

○企画の内容

訪問期間：平成26年2月8日（土）～2月10日（月）
内　　容：子どもたちとの交流会、園長講演会、職員の方々との交流会等

◇実践から得た「臨床の知」

出会いの数だけ笑顔があって、笑顔の数だけしあわせになる

月岡優介（社会科学教育専攻４年）

震災があってから約３年の月日が流れようとしています。様々なメディアを通して見た衝撃的な事実に対し、「自分もなにか行動したい」と思うことはあっても、実行するには至りませんでした。そんな中、昨年度、大岡農楽里ファームさん、福島愛育園さんのつながりのもと、福島の子どもたちに出会うことができました。愛育園さんに訪問させていただいて感じたことは、「平和、のどか、変わらない日常」、そんな言葉が妥当でしょうか。しかし、地震の直接的な被害よりも、福島の子どもたちは目に見えない放射能の被害を受け続けていたのでした。

私は愛育園に訪問したことがきっかけで、それから大岡で協力させていただき、また子どもたちと職員の方々と出会い、お腹いっぱい食べて、たくさん笑って素敵な時間を共に過ごしました。そして生まれた想いが、「もう一度愛育園の子どもたちに会いたい」でした。「つっきーまた来てね」、子どもたちからもらったその言葉がすべてです。

私と北見のその想いが主で、今年度も訪問させていただくことができます。この企画の一番の目的は、「子どもたちを笑顔にしたい」ということ。復興支援の意も込めて、私たちができることとして一番にできることは、それではないかと思っています。これは愛育園に限ったことではないかもしれませんが、愛育園の子どもたち、職員の方々、大岡の遠藤さんをはじめとする方々、そして学生と、たくさんの出会いがある中で私が感じることは、「出会いの数だけ笑顔があって、笑顔の数だけしあわせになる」ということです。「子どもたちに会いたい」という想いは、長野県という枠を超えて私たちを動かし、出会い、笑顔に触れることで、その分だけ「しあわせ」をいただいています。ご理解、ご協力いただいている方々への感謝とご縁を忘れず、もう一度訪問してきます。　　（出発をひかえて）

当たり前の幸せ

北見　聖（言語教育専攻４年）

2011 年 3 月 11 日、私は 19 歳になりました。その日、死者の数が増えていく報道を聞きながら、自分の誕生日を素直に喜べない私がいました。

映像で見る福島は別世界のように見え、誰かがどこかで亡くなることは悲しいことだけれど、どうも他人事のような気がして、もどかしいような感覚になりました。そのとき私は、使命感ではないですが、「福島に行かなくては」と思いました。

昨年、北沢瑞樹さんが企画をしてくださり、福島に行く機会ができました。大岡に来てくれた子どもたちに今度は自分が会いに行きたいという想いもありましたが、「福島に行かなくては」という、あのときの想いが強くありました。愛育園では、目に見えない被害を受けている子どもたちと関わり、子どもたちの抱えているもののお話を聞き、私は「この子たちを笑顔にしたい」とひたすらに思いました。私には父親がいません。それもあってか、子どもたちと一緒にいると、思い切り愛情をそそいであげたいと思うのです。大好きな子どもたちがいるから、今年も福島へ行きます。

今日は私の誕生日だけど、毎日誰かの誕生日で、毎日誰かの命日。これが、19 歳の誕生日に感じたことです。今、生きていること、家族がいること、誰かに愛されること。当たり前のように過ごしてしまっている毎日ですが、「感謝しなくては」と、思います。

毎日実感するのはとても難しいことだと思いますが、それでも私は、当たり前が当たり前にあることの幸せを忘れないでいたいのです。

今年は 23 名で愛育園へ行かせていただきます。一緒に行ってくれる学生にとって、何か得るものがあれば、幸いです。　　（訪問を前にして）

高大連携事業（長野県立長野西高等学校）（２年目）

北野雄大（社会科学教育専攻３年）

○参　加　者　　長野県立長野西高等学校生

○プラザの概要

本年度で、長野西高校との連携は２年目の活動となりました。普通科と国際教養科を対象にした「YOU 遊フェスティバル」への参加と、通信制と何か連携できないかというところからスタートした通信制学習サポートが行われました。

○活動目標

学生と生徒とが互いに手を取りあいながら行う高大連携の中で、地域貢献につながる活動や新しい発見が得られる活動を計画し、学生と生徒の両方が自らの能力を深め合い、成長できる場をつくっていきます。

○一年間の活動

活動回	活 動 日	活　動　内　容
1	11 月　5 日	長野西高生徒への「YOU 遊フェスティバル」の紹介
2	11 月 19 日	長野西高での「YOU フェスティバル」の説明会
3	11 月 24 日	第一回通信制学習サポート
4	12 月 7 日・8 日	「第 12 回 YOU 遊フェスティバル」への参加
5	12 月 15 日	第二回通信制学習サポート

○各活動内容

「第 12 回 YOU 遊フェスティバル」への参加をしました。教育に興味がある生徒や、子どもが好きな生徒など、参加した理由は様々でしたが、全力で楽しんでいるように見られました。

初めての子どもたちとの関わりを通して、「子ども目線になって関わることを学んだ」とか、「一つの企画を成功できた達成感が味わえた」など、大変有意義な時間が過ごせたようでありました。

「通信制学習サポート」では、初めての試みなのでうまくいくか不安な部分は大きかったが、通信制の生徒と関われたことは双方にとってメリットが大きかった。お互いにコミュニケーションをとることで見えてくるものがあり、人と人との関わりの大切さを改めて実感できるものでした。

◇実践から得た「臨床の知」

人との関わり

北野雄大（社会科学教育専攻３年）

長野西高校との連携事業は２年目になりますが、この活動が続けられたのも様々な方々のご協力があったからであり、感謝いたします。改めて人と人との繋がりを実感することができました。高校生との関わりは普段の生活ではなかなかありませんが、関わってみることで、私たちもそして高校生も得るものは存分にあり、細々とでも続けてほしい活動です。「YOU 遊フェスティバル」では、参加している高校生の顔がとても生き生きとしていて、時間が経過するにつれて成長している姿は、とても印象的でした。「また参加してみたい」という声がたくさん聞かれ、とてもうれしく思いました。

「通信制学習サポート」では学習支援はもちろんですが、会話をしてみることで見えてくるものの良さを感じました。笑顔あふれるあの空間を、西高校の通信制にも来年度広げていけたらと思います。今年度の活動では、長野西高校の西澤浩先生と志津千代子教頭先生に多大なご尽力をいただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。私たちの活動は、本当にたくさんの人に支えられているのだなと思います。この連携事業については、来年度以降のさらなる発展を期待して努力したいと思います。

☆「全国フレンドシップ」活動の紹介 ☆

第14回「全国フレンドシップ活動」in 信州　(2014(平成26)年3月)

実行委員長：小塚尚士（野外3）　副実行委員長：北野雄大（社会3）
青木村責任者：羽田　鋭（実践4）・那須絢太郎（理数3）
麻績村責任者：成瀬貴心（保体4）・渡邊　玲菜（音楽4）
湯谷小責任者：月岡優介（社会4）・林　志桜里（生活4）

1．特　色

文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC)」に信州大学が応募したテーマ「信州を未来へつなぐ、人材育成と課題解決拠点」、通称「信州アカデミア」が採択されたことに伴い、<第14回「全国フレンドシップ活動」in 信州>をこのプロジェクトの一環として位置づけてもらうために、次のような申請書を信州大学本部に提出した。

2．地域志向教育研究支援事業「教育補助」

事　業：信大生が地域の子どもと交流することによって村を活性化するプロジェクトの開発

経費申請の目的・理由：

※地域と大学の連携促進、大学の地域貢献活動をより効果的・効率的なものとする観点で記載すること

本学の学生が「青木村」の子どもたち、「麻績村」の子どもたちと体験活動を始めて9年目、長野市湯谷の子どもたちとの交流は12年目になる。この3地域に全国11大学100名の学生が入り、子どもたちとの体験活動を協働開発し実践する。また、村長、教育委員長、教育長、村会議員などと全国学生による地域活性化プロジェクトの開発についての懇談会を開催する。

3．支援希望額：252,000円（バス借り上げ代、大型バス2台84,000円×3日、信州大学教育学部と長野市青少年錬成センター間の学生移動のため）

4．全国11大学100名の学生が、村長、保護者会会長と語る懇談会の開催

3月7日（金） 20:00～21:00	青木村：北村政夫村長の講演と懇談会　：青木村文化会館 講演題目：「青木村の行政課題及び少子化対策」
3月7日（金） 18:00～20:00	麻績村：高野忠房村長の講演と懇談会　：麻績村第二公民館 講演題目：「麻績村の地域の課題」
3月8日（土） 14:30～15:30	長野市湯谷地区：近藤和巳会長の講演と懇談会　：長野市立檀田地区センター 講演題目：「湯谷小子どもランド12年の実践と課題」

5．学生派遣申請書

○○大学　学長・教育学部長　様　　平成25年11月27日
信州大学教育学部長　平野吉直

第14回「全国フレンドシップ活動 」in 信州への学生の派遣（依頼）

時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は、「全国フレンドシップ活動」に温かいご理解とご協力を賜り、心から御礼申し上げます。

さてこの度、第14回「全フレ」を本学部がホスト校となって開催することになりました。青木村、麻績村、長野市湯谷の3地域の子どもたち、地域住民とともに学生パワーの斬新な発想による村の活性化のための体験活動の開発と村の指導者の皆さんとの村の人材育成と課題解決のための懇談会を、下記の通り実施致します。

つきましては、貴大学の学生さん○名を派遣していただきたくお願い申し上げます。

なお、フレンドシップ事業ご担当の○○先生にも、この派遣申請を送付してありますことを申し添

えます。

記

（1）日程：平成26年（2014）3月5日（水）～9日（日）

（2）宿泊場所　3月5日(水)・6日(木)・8日(土)：　長野市青少年錬成センター

3月7日(金)：　青木村文化会館、麻績村第二公民館、長野市青少年錬成センター

（3）学生参加費　2万円（宿泊費・食費・保険料・その他）

（4）参加人数　子ども3地区合計で約110名　村長、教育委員長、教育長、地域住民約50名

（5）参加大学名と参加学生数　11大学100名

茨城大学(5)、関東学院大学(4)、岐阜聖徳学園大学(8)、熊本大学(4)、上越教育大学(7)、中部大学(7)、鳴門教育大学(6)、広島大学(12)、福井大学(12)、横浜国立大学(12)、信州大学(23)

6．活動日程（タイムスケジュールの概略）

タイム	5日	6日	7日			8日			9日
	青木・麻績・湯谷共通		青木	麻績	湯谷	青木	麻績	湯谷	共通
6:00		起床	起床			起床	起床朝食	起床朝食	
7:00		朝食	朝食			朝食	公民館発	移動	起床
8:00	長野駅送迎	朝のつどい 錬成→信大	朝のつどい 錬成→信大			食器洗い 準備	体育館着 受付	準備	朝食 掃除
9:00	受付	企画②	企画④			受付	企画本番	受付	積み込み
10:00	開会式					企画本番		企画本番	信大着
11:00	大学紹介								ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ
12:00	昼食	昼食	昼食						昼食
13:00	ｱｲｽﾌﾞﾚｲｸ	企画③	移動				片付け		閉会式
14:00			荷物整理	体育館着	ﾘﾊｰｻﾙ	片付け	ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ	片付け	
15:00	ﾌﾟﾗｻﾞ説明		児童ｾﾝﾀｰ	ﾘﾊｰｻﾙ		ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ		地域懇談	信州大学
16:00	・企画①			移動	移動	移動		移動	から送迎
17:00	信大→錬成	信大→錬成	入浴	公民館着	善光寺詣		移動	入浴	
18:00	夕食	夕食	ﾘﾊｰｻﾙ	夕食・地	夕食	荷物整理	荷物整理	ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ	
19:00	入浴	入浴	夕食・地	域懇談会	入浴	全体リ	フレク	ション	
20:00	ﾌﾘｰﾀｲﾑ	ﾌﾘｰﾀｲﾑ	域懇談会	入浴	ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	入浴	入浴	夕食準備	
21:00	ﾌﾘｰﾀｲﾑ	夜のつどい	ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	ﾌﾘｰﾀｲﾑ	慰	労	会	
22:00	ﾎｽﾄ校会議	ﾎｽﾄ校会議	ﾌﾘｰﾀｲﾑ	ﾌﾘｰﾀｲﾑ					
23:00	就寝	就寝	就寝	就寝	就寝	就		寝	

7．参加学生名簿（略：信州大学生のみ）

関口美桜（2年）　金沢優花（2年）　村松知美（2年）　上原　瑛美（2年）　小宮山翔平（2年）
土屋孝将（3年）　木田達也（3年）　中野直輝（3年）　北村　隼一（3年）　宮田巴都樹（4年）
北見　聖（4年）　畠山智晴（3年）　新井雅菜（3年）　上野なつみ（3年）　山崎花奈子（4年）

実行委員

小塚尚士（3年）　北野雄大（3年）　月岡優介（4年）　那須絢太郎（3年）　羽田　鋭（4年）
成瀬貴心（4年）　渡邉玲菜（4年）　林志桜里（4年）

「信大YOU遊未来」20周年記念シンポジウム 〈分科会の記録〉

1．**目　的**：「信大YOU遊未来」の活動が、先輩から後輩へと20年にもわたって継続されてきたことを慶祝し、この活動を通して培われた「臨床の知」を世代をこえて共有することにより、地域・子どもたちと共に歩む「信大YOU遊未来」の更なる発展をめざす。

2．**日時・会場**：平成25年8月10日（土）13：30～20：00・ホテル信濃路（TEL. 026-226-5212）

3．**参加費**：第1部：シンポジウムは無料。参加者全員に『「信大YOU遊」20周年記念誌－地域・子どもたちと共に歩んだ地域貢献の教員養成－』を贈呈。　第2部：懇親会は参加費5,000円

4．**タイムスケジュール**

時　間	第1部：シンポジウム
13：30	受付開始（畠山智晴・上野なおみ：20期副運営委員長）
14：00	総合司会　服部直幸（森上小学校）・三石梨沙（中野小学校）
	開会の言葉（木田達也：20期運営委員長）
14：05	実行委員長挨拶（山口直行：20周年記念シンポジウム実行委員長）
14：10	学部長挨拶（永松裕希：副教育学部長）
14：15	講演会（30分）　講　師　小岩井彰先生：上田市立北小学校長
	演　題「地域からみたYOU遊の価値－青木村と大岡での通学合宿を通して－」
14：45	シンポジウム ①「YOU遊」体験によってどのような力が身についたか？」（45分）
15：40	シンポジウム ②「YOU遊」体験のなかで最も楽しかったことは何か？」（45分）
16：25	閉会の言葉（横田克己：20期副運営委員長）
	第2部：懇　親　会
17：10	開会の言葉　（土井　進教授）
	乾杯のご発声（藤沢謙一郎：元信州大学理事・副学長）
19：30	中　締　め　（白井　敬：20周年記念シンポジウム副実行委員長）
	万歳三唱　（漆戸邦夫：元教育学部長・附属教育実践研究指導センター長）
20：00	閉会の言葉　（那須紋子：20周年記念シンポジウム副実行委員長）

5．**シンポジウムの記録**

○司会・花岡慶祐　　記録・髙木淳子

参加者氏名　漆戸邦夫（元実践センター長）　平田　治（全国自問清掃の会・理事）
山口直行（松本市立丸ノ内中学校）　川口(井戸)陽子（諏訪市立四賀小学校）
浅川(蓼沼)夏子（栃木県岩舟町立岩舟中学校）　比留間淳也（長野県立箕輪進修高校）

①　大学1年次に「YOU遊フェスティバル」に参加してから「YOU遊」の活動に参加するようになった。2年次に参加した「湯谷キャンプ」では2年生が0からキャンプを作り上げ、やりがいや達成感を得た。同時に反省点も多く、反省を活かしてもっと子どもたちと多く関わりたいと思うようになった。毎回の活動で子どもたちとともに過ごす時間をとても楽しみにしている。

②　「YOU遊サタデー」に関わっていた。教育実習でアイスクリーム作りをしたことを土井進先生に話したところ、「YOU遊サタデーでその講座長をしてみないか」とのこと。それで「YOU遊」の活動に参加するようになった。自分の思いを持って運営ができたことが今も活きていると感じている。「YOU遊」では、子どもとも仲間ともとても濃く関われることが楽しかった。

③　信州大学教育学部卒業後、34年間小学校教師をした。その後信大大学院の土井進先生の下で自問清掃の研究を始める。「YOU遊」に直接に関わっていたわけではないが、「実際に活動してみること」が大切だと感じている。リフレクションも大切なことだが、そればかりでなく、「まずやっ

てみる」ことで分かることもたくさんある。活動をしていく中で、思い通りにならないことは山ほどある。実際に社会に出てみると、ほとんどのことが思い通りにならない。思い通りにならない経験や、失敗の経験を学生のうちにできることはとても意味の大きなことである。今、何気なく生活していると「失敗」を経験することは少ない。リーダーシップを発揮していた人が社会に出て挫折を味わい、折れてしまうこともある。学生のうちにどんな経験を積むのかがその後に大きく関わると感じる。教師の同僚性が大切だという言葉はよく聞かれ、多くの人がそれに賛同しているが、その大切さを実感した経験がないと本当の意味で理解できないこともあろう。「YOU 遊」のような「活動」に「参加」すること自体が、学生にとっては大きな意味を持つと思う。

④　「YOU 遊」では子どもとの触れあい方を学ぶことができた。少し離れて距離を保ちつつ接することがいい場合も、思いっきりべたべた甘えさせてあげることも、どちらも大切なのだということを活動に参加する中から学んだ。自分が実際に体験すること、そこから感じたこと、考えたことをまた次の機会に生かしていけることが良かった。「今度はこうしたい」という思いを持って子どもたちと接することが大切だなと感じる。

⑤　平成 6 年「YOU 遊」発足に立ち会うことができた。「YOU 遊」に直接参加したわけではないが、人に教えてもらうこと師を持つことは大切だと思う。人との出会いを大切にしていってほしい。

⑥　信州大学工学部卒業後、教師になりたいと思い教育学部に入った。主に青木村での活動に参加していたが、誰もが一つの活動に真剣に向かっていく姿がとても印象的だった。仲間たち一人ひとりが活動に向かっていく姿がお互いを刺激し合って高め合っていける場だと感じる。

⑦　発足当初、どうやって地域の子どもを集めるのか、その広報活動に苦労した。責任問題など様々な問題があり、小学校などの理解を得ることが難しいこともあった。1 回目は 57 人だった参加者が、NHK の全国ニュースで取り上げられたこともあり、2 回目以降はとても規模の大きなものになっていった。「まず、やってみよう」という気持ちを大切にしていってほしい。

○司会・北見 聖　　記録・林　志桜里

参加者氏名　関川光彦（元 XY サタデースクール校長）　荒谷喜美子（辰野町立辰野中学校）
中元順一（中央大学教授）　大澤安貴子（上田市教育委員会）
加藤博美（岡谷市児童養護施設）　塚原　淳子（中野市立南宮中学校）

①　信大生が教材作りをしてくれたのが印象に残っている。茂菅の副プラザ長をしていた。子どもたちと一緒に農作業をしたことが楽しかった。林部信造さんのお手伝いをしたり、子どもと関わったりするなかで、学ぶことも多かった。調べ学習に興味があった。

②　土井先生が指導教員のときに“教師の資質”について研究していた。「ふきのとうキャンプ」で不登校の児童と関わった。

③　児童養護施設で働いている。XY プラザが最初の活動で、「青木の通学合宿」に参加した。「お母さんってすごいな」と思い、家庭からの支援ができる職に就きたいと感じた。それが今の仕事につながっている。

④　「YOU 遊」の活動の中で企画力が身に付いた。子どもを大学に招いていた時に「YOU 遊」に参加。活動後の飲み会が印象に残っている。子どもたちとの触れ合いのあと、先輩などから色々なお話を聞くことができた。子どもと活動している時も楽しいが、学生と企画をしている時も楽しい。

＜子どもたちとの関わり＞　青木村で子ども・学生・地域の方とのつながりを大切にした、冬の大三角。ゲートボールや料理をした。その中で、「おかげさまだな」、「ご縁だな」と感じた。地域や　子どもと関わること、直接触れ合うことも体験ができる。

＜今に生きていること＞　先生にとって一番大切なことは、「聴く能力」を持つこと＝傾聴。先生の感性が大切。子どもは、見えないけれども、いろんな経験・想いを抱えている。洞察力が大切。年をとると、子どもを大雑把に見てしまう。30 人の子どもがいても、一人ひとりの違いが分かるよ

うに。慣れは大事だけれど、えてして自分をだめにする。

⑤ 分かることとできることは違う。できていても分かってないこともある。先生がやる気なくなった時、苦しい時、鏡で自分を見て笑う。子どもに対して笑顔でいることで子どももやる気になる。保護者、地域、関係機関とどのような関わりをしていた？障害のある子の親もメンタルが弱くなっている時がある。相手の思いを感じ取る。その人その人に応じた伝え方でうまく入っていけるように調整したい。

○司会・林 志桜里　記録・北見　聖

参加者氏名　島田和典（大分大学准教授）　服部直幸（須坂市立森上小学校）
市川香織（千曲市立東小学校）　荒谷喜美子（辰野町立辰野中学校）

① 「YOU 遊」は子どもと関われる。叱る大事さを学んだ。学生の時に楽しむけど、頑張っておくと、社会人となってから頑張れる。　② 子どもとの活動をわくわくしながら計画する。無くなってしまうものでもわくわくできる。こういう人がいると、学校が楽しくなる。

③ 理想と現実のギャップ。小岩井先生の言葉「おかげさまでやらせていただいている」。真正面から立ち向かうこと。地域とのつながり。やりたいことを提案する力。

＜地域とのつながり＞　企画力。修学旅行や保護者会。サッカークラブの講師を呼んだり、１週間学校を開放したり。土曜参観。地域の方の読み聞かせ。種植えを地域のプロの方に教えてもらう等をやってみたい。何でつながりたいかが大事。人とつながることが地域と関わること。開かれた学校。戦争の話は戦争を経験した人に話してもらうのが一番。朝読書。TT をやる。部活動や、登山のボランティアを募る。

＜大事にしているもの＞　生徒指導がいくら忙しくても、授業準備はしっかりやる。子どもの将来を考えること。子どもが自分の将来を楽しく描けるような。やらせていただいていること。礼儀。人間として深まりたい。子どもには自分の人間を通して伝わるから。

④ 一人ひとりが一生懸命。つながるとおもしろい。子どもがこの人とつながったらおもしろい、と想像する。子どもたちにはすべて話す。いろんな人がいることを伝える。地域コーディネーターがいてくれたらいい。

○司会・花岡慶祐　記録・髙木淳子

参加者氏名　関川光彦（元ＸＹサタデースクール校長）　近森憲助（鳴門教育大学副学長）
大澤安貴子（上田市教育委員会）　ボー・グオック・ハン（信州大学大学院、ベトナム）
平林　照世（長野市立川中島小学校）　市川(吉澤)麻衣子（山之内町立東小学校）

① 「YOU 遊」の活動をしていたことがすぐにどう活きているということではないかもしれないが、自分が困った時に他の人に聞ける力が付いたのではないかと感じる。また、教えていただいたことに対して応えようとする気持ちがついた。受け身ではなく、自分から求めて外へ出ていくことに抵抗がないことも「YOU 遊」の活動をしていたからこそかもしれない。

② ４年次に「YOU 遊サタデー」で自分の講座を持ち、０から自分で考えたものが子どもたちに受け入れられた経験が、今、直接活きているかは分からないが、現在の自分の基になっていると感じる。普段は、どうしても同じ専攻の友達や先輩とばかりの関わりになってしまい、他専攻の人との関わりはなかなか持ちにくい環境にあるが、「YOU 遊」では専攻に関係なく議論できる。専攻の異なる人たちと本気で議論をする経験ができたことが自分にとって大きな収穫だったと感じる。

③ 現在、上田市教育相談所で不登校の児童・生徒の支援を行っている。学校、家庭との連携、最近では児童相談所との連携もとる形で子どもたちの支援にあたっている。保護者にどのように接していくかが現状を良い方向に変えていくために必要なことだと強く感じる。初めにどのような印象をもたれるかでその後の関係性が変わってくる。「子どものことを想って･･･」の気持ちは教師も親も

同じ。「YOU遊」では、学生のうちに保護者と関わる機会が持てることも良い経験になると思う。

④ 教師はマイノリティであることに尽きる。マイノリティで一人ひとりがきちんとしていることが大切だ。大きい団体にいると、どうしても権力が関わってきてしまう。教師と権力はそぐわない。自分が信じる道を進んでいくこと、小さいグループでもそれを突き詰めていくことが大切。これから教師になろうとする人は、このことを心のどこかに留めておいてほしい。

⑤ 子どもと一緒に活動してきた経験がその後どう活きてくるかは個人差がある。しかし、学生時代に悩んだり、苦しんだりして、それを乗り越えてきたことが、壁にぶち当たった時に何かしら自分の後押しになることは間違いないのではないか。座学の授業だけではつけることのできない、「子どもと関わる力」がつく。大学の授業だけでは、「子どもの前に立つ」ことはないが、様々な活動の中で、子どもの前に立つ経験ができることも貴重なものである。実習などでは、学校の中での子どもの様子しか分からないが、活動に参加すると、学校では見られない子どもの姿を見ることができる。一つ方向からだけでなく、色々な面を知ることが重要なことである。子どもと関わってきた経験を生かすも殺すも自分がどうとらえるかによる。学び、体験し、振り返る。この中で何をどう学んで、明らかになった課題はなんなのか、振り返り、また活動に参加していくこと、自分が0から作り上げたもので人が喜んでくれる経験をすること、そのすべてに意味がある。

○司会・北野雄大　　記録・新井雅菜

参加者氏名　那須紋子（三重県鈴鹿市立一の宮小学校）　飯島理沙（上田市立塩田中学校）
高池亮輔（15期・東京都足立区立花保小学校）　柳沢秀樹（オリオン機械）
角田正和（岡山県倉敷市立西中学校）　林部幸子（茂菅ふるさと農場・書家）
松本(押澤)由記（御代田町立御代田北小学校）

＜「YOU遊」をやり始めたきっかけ＞　① 1年生の時の「YOUフェス」がきっかけ。

② 実践的な体験が必要といわれた時代だった。友だちに誘われ、いつの間にかやっていた。

③ 先輩方が楽しそうだったから勢いに負けて入った。

＜どうして続けていこうと思えたのか？＞　① 林部さんのあたたかさ。

② 仲間とどうやっていけば問題が解決できるかを語れたから。 ③ 人とのつながりがあったから。

④ 前回長野に来たときは「信大茂菅ふるさと農場」10周年のシンポジウムだった。同じ目標に向かって頑張った仲間がいたから。 ⑤ 今は「YOU遊」をやっていて楽しいという人が多いが、始まったばかりの頃は信濃毎日新聞に記事を載せてもらったり、はがきを送ったりと、大変なことの方が多かった。学業とどっちが本業かといわれたこともあった。

⑦ 実践的な体験ができる場が提供されていたからそこへ行った。場が無かったらできなかった。

⑧ 年に3回だけの時は継続することが本当に難しかった。 ⑨ 通学合宿では笑顔と喜び、厳しさや苦しさを学んだ。 ⑩ 茂菅の英語活動は農業という伝統的なものに英語という新しいものが含まれ、保護者の方にも好評。 ⑪ いろいろ食べさせてもらえた。

○司会・北澤瑞樹　　記録・池田隼人

参加者氏名　吉澤正彦（大町市立大町南小学校）　金井素子（静岡県伊東市立宇佐美幼稚園）
西澤俊輔（7期・鉢盛中学校）　三枝祐紀（14期・佐久市立泉小学校）
市川祥介（麻績村教育委員長）　門脇厚司（茨城県美浦村教育長・筑波大学名誉教授）
土田絵理子（和歌山県紀見小学校）　林部信造（農業）
吉澤嘉壽（何でも手作り吉澤学校校長）　後藤莉奈（信州大学4年）

＜「YOU遊」の体験で最も楽しかったことは何か？＞

① 人見知りであったが地域の方や仲間との交流から他者への興味が湧くようになった。様々な人と関われることが楽しかった。

② 得意なことを一生懸命やれること。また、教育現場ではなかなかできないことを現場に出る前に経験できてよかった。
③ 多くの人と出会い、関わることでたくさん良い刺激をもらえた。
④ 活動する中で、子どもへの愛着を感じ、子どもを中心にする考えができるようになった。
⑤ これまで関わってきた学生の成長した姿を見るのを楽しみにしてシンポジウムにきた。
⑥ 6週間の教育実習では、教師となるのに足りないと感じていたので、実践経験をつめる「YOU遊」の活動はとても素晴らしい。
⑦ 小、中、特別支援を経験することは、管理職になる上でも必須条件である。同じ所ばかりだと視野が限られてしまいがちであるし、何より多様な子どもたちに対応できない。多様な子どもたちに対応するためには多様な経験をつみ、広い視野を持つ必要がある。
⑧ 誰がどう遊んでも安全であるという教材を準備することは非常に難しい。逆に、子ども自身が何が危ないか判断できるように教えることも必要になってくる。
⑨ 教師自身が楽しんで授業できる環境が必要。それがないと教師は利己的な思考に走りがちになる。

＜「YOU遊」の体験が現在の教育実践にどのように生きているか？＞

① 「YOU遊」で1から自分でやることの大切さを学び、小学5年生の田植えで、ただ植えるだけでなく他の作業も行った。　② 農場長をしていたので、田植えの際に活かせた。
③ 子ども中心で考える、ということを念頭に置いて子どもと関われるようになった。
④ よく子どもとの接し方がうまいと言われるので、子どもの扱いは確実に上手になっている。
⑤ 土井進先生に叱られてから、「ホウ・レン・ソウ」をしっかりすることの大切さを学んだ。縦のつながり、横のつながりどちらでも話し合いをし、筋を通すことが重要である。
⑥ 14年間で様々な学生を見てきて、毎年新しい学生に会えることがとても楽しみである。明るく、まじめで、前向きな学生たちと関わることができるのが幸せである。
⑦ 人と人とのつながりの大切さ。多くの人の努力で活動が成り立っている。
⑧ 服や髪などの外見のおしゃれも大事であるが、言葉もおしゃれな使い方をしてもらいたい。そうしたことのできる教師には子どもが寄り付き、慕われるようになる。
⑨ 物事の本質を見極めることが大事である。

○司会・井口　哲　　記録・土屋孝将

参加者氏名　市川麻衣子（4期・山ノ内町立東小学校）　土井美知子（第1期・保護者）
安達仁美（信州大学教育学部）　山本真望（9期・岡谷市立岡谷小学校）
松永泰幸（安曇野市立穂高東中学校）　寺島亮太（福井大学社会科2年）

＜楽しかったことについて＞

① 「YOU遊」の中では主に小学生を相手に活動してきたが、この間、高校生と一緒に子どもたちと活動する機会があった。その中で、子どもの成長の早さだけでなく、高校生の成長の早さにも気づくことができたことは、とても自分の中で勉強になったことだし、とても楽しかった。
② 第1回目の「YOU遊」の活動の時は、講座も少なくて右も左もわからない状態だった。そんな中で、近所の人にビラを配ったり、「YOU遊」の説明をしたりと本当に大変な思いをした。でも、その時の友達と頭や手足を使って活動したこと全てが楽しかったと思える。近所の人や当時は子どもだった人から、「YOU遊」がとても楽しかったと言ってもらえることは、とてもうれしく思う。
③ 「YOU遊サタデー」の講座長をしたが、私はそれまで何かの長になったことがなかったので、色々と大変だった。でも、一つの活動を作っていく過程がとても楽しかったと思う。
④ 私のころ、「YOU遊サタデー」がなくなり「YOU遊プラザ」になり、「YOU遊プラザ」がなくなり「YOU遊ワールド」になった。色々「YOU遊」が変わったが、私は「やりたいことをやりたい」という思いで参加し続けた。また、出会いの中で学んだことがある。それは、ある活動のリフ

レクションの中で、私の中では良い行動だと思っていたことが、ある学生からしてみると悪い行動に見えていたことがあった。そのことから、色んな視点で物事を見ることの大切さを知った。

⑤ 「YOU 遊サタデー」の発足に携わった。最初は「何をしたらよいのか」から言い合いがあって、本当に手探りな状況だった。第１回から参加しようとしたが、自分が考えた講座がボツになり、第２回からの参加となった。今までの「YOU 遊」の活動から、準備をすることの大切さや自分を見返すことの大切さを学んだ。子どもと出会える場が与えられたことは、とてもよかった。

＜苦しかったことについて＞

① 最初は仲の良い学生同士で集まったはずなのに、喧嘩ばかりしてしまってとても苦しかった。皆子どもたちのことしか考えていないのに、空気が悪くなってしまって、とても嫌な思いをした。

② プラザ長としての活動に参加していたので、班付学生になれずとても辛かった。

③ 喧嘩が絶えなかったことが辛かった。でも、大学生になって真剣に喧嘩ができる環境というのは、あまりなかったので、今となっては、自分のためになっていると思っている。

＜その他＞ ① 苦難を乗り越えれば何か感動できるものがあることを「YOU 遊」で知っているからこそ、教師として子どもと接することができる。 ② 大学には、明確に何かをする機会があまりないから、「YOU 遊」があることでとても集中することができる。 ③ 大学に対立する機会が中々ないので、対立することは十分に活かすべき。

○司会・記録 宮田巴都樹

参加者氏名 佐藤宏樹（長和町立和田小学校） 白井 敬（佐久市立岩村田小学校）
杉山雅幸（静岡県静岡市立竜南小学校） 土田恵久（和歌山県橋本市立高野口小学校）
中山(清水)美香（長野市立大豆島小学校） 髙橋淳子（元信州大学学務係）
藤木孝明（麻績村教育委員会）

＜「YOU 遊」体験の中で最も楽しかったことは何か？＞

① 仲間とともに悩んでいる時、一つのことに向かってみんなと何かをすること。 ② 飲み会などでいろんな人と話すこと。自分に足りないものに気づかせてくれた。 ③ 悩みながらの準備期間が楽しかった。 ④ 準備の時期がとても不安。活動中、活動後に子どもと学生の笑顔を見るのが楽しい。 ⑤ 学生同士の意見が合わず、たくさんの話し合いをしたこと。自分の本気度に驚いた。 ⑥ 「YOU 遊」の活動が大学の外に広がった時。長野市以外のところとつながりができた時。 ⑦ 土井進先生の突然の「百姓をやる」宣言。 ⑧ 全国フレンドシップ活動の旗揚げ。上越教育大、熊本大、横浜国立大、鳴門教育大、広島大の人たちとの出会い。 ⑨ 土井先生の研究室で煮干しを食べたこと。奥様との馴れ初めを聞いたこと。 ⑩ 「YOU 遊サタデー」から「YOU 遊広場」への転換期のメンバーが多かったため、転換期の話を中心として、全国フレンドシップ活動や小岩井彰先生が通学合宿を始めたころのことなどを話した。 ⑪ 学生だった方々は準備期間を悩みながら、ぶつかりながら仲間と過ごしたことが楽しかったという方が多かった。教育委員会の方は、活動に関わり、そのなかで子どもや学生の笑顔を見られることが楽しいとおっしゃっていました。

＜「ＹＯＵ遊」体験が現在の教育実践にどのように生きているか。＞

① 「叱る」こと。飛び出して行ってしまう子や、活動に参加したがらない子どもへの接し方。

② 子どもたちの目線に立つ力。 ③ 地域の方、保護者の方との関わり方。保護者の方、地域の方の理解、後押しのおかげで活動ができること。それによって子どもの可能性も広がっていく。

④ 人数が少なかったため、17 分科会の方と合同で行いました。司会は高見澤誠さん。 ⑤ 今までの先輩方の一つ一つの活動の積み重ねの中で、地域の方、保護者の方との信頼関係が築かれてきて、その中で自分たちが活動をさせていただいている、ということを実感しました。プラザごとのカラーは違っても、思いは同じであり、プラザに来てくれる人との温度差があったとしても、一度活動に来て、何かを学んでくれればいい、そしてまた来たいと思って次に繋がっていけばいいと思って活動し

ていたという言葉から、「YOU 遊」の活動が私たちの代まで繋がってきた理由や、私たちがこれからも「YOU 遊」を受け継いでいきたいという気持ちの根源にあるものが分かったように思いました。

6．ご来賓出席者名簿（敬称略・五十音順）

Web上では非公開

7．卒業生出席者名簿（期ごと）

氏　名	期	専攻
山口　直行	1	数学
土井　　進	1	教員
新井　清規	2	理科
小谷　将紀	2	社会
角田　正和	2	社会
松永　泰幸	2	数学
吉澤　正彦	2	社会
渡辺　一博	2	英語
知野真里子	3	生活
宮沢　　元	3	理科
柳沢　勇志	3	数学
市川(吉澤)麻衣子	4	国語
小池　祐介	4	実践

氏　名	期	専攻
坂田　典子	7	国語
笹崎　典子	7	数学
杉山　雅幸	7	野外
杉山(井上)真裕子	7	理科
平野(山田)理恵	7	実践
両角　孝之	7	数学
大澤安貴子	8	実践
小黒あかり	8	実践
小林　則雄	8	野外
白井　克典	8	社会
中山(清水)美香	8	実践
西澤　俊輔	8	理科
林　　一真	8	生活

氏　名	期	専攻
鈴木　亮子	14	生活
田村　将太	14	実践
土田　恵久	14	社会
土田(石井)絵理子	14	社会
常盤　千明	14	実践
比留間淳也	14	理科
菅原　勇介	15	理科
中川　　茜	15	生活
飯島　理沙	16	理科
市川　香織	16	実践
中村　恵理	16	音楽
藤田　裕介	16	社会
布山　朋和	16	実践

竹下　雅道	4	数学
塚原　淳子	4	生活
登坂　美恵	4	生活
中條　　悟	4	理科
森下　房枝	4	生活
佐藤　宏樹	5	社会
登坂　武人	5	社会
池田　裕美	6	生活
川口(井戸)陽子	6	生活
白井　　敬	6	国語
千野加世子	6	生活
松本(押澤)由記	6	生活
安達　仁美	7	実践
金井(相磯)素子	7	幼児
榊原　研太	7	理科

浅川(蓼沼)夏子	9	生活
小池(花村)尚美	9	理科
髙橋　和之	9	理科
那須　紋子	9	生活
山本　真望	9	実践
足立(藤田)優子	10	生活
池田(神林)彩井	11	生活
末松　辰則	12	理科
青木(松井)泉樹	12	生活
平林　照世	13	国語
丸山　晃男	13	実践
青木　智博	14	実践
石山　裕貴	14	理科
加藤　博美	14	実践
島田英一郎	14	数学

宮尾　　亘	16	実践
小賀坂佳子	17	理科
草間　信一	17	実践
高見澤　誠	17	理科
土屋　克明	17	理科
三石　梨沙	17	理科
内川　舜也	18	実践
大井このみ	18	理科
服部　直幸	18	理科
北沢　瑞樹	19	数学
花見　直樹	19	社会
鈴木喜多朗	19	理科
勝海　公平	19	社会

8．在学生出席者名簿（専攻ごと）

氏　　名	期	専攻・年
髙木　淳子	20	言語３
太田　　咲	20	言語３
岩瀬　由依	19	言語４
後藤　莉奈	19	言語４
飯島　莉菜	19	言語４
北見　　聖	19	言語４
八木英理子	19	国語４
斉藤　　恵	20	国語４
鷲澤　栞里	20	現教１
飯島　香純	20	実践３
小口真奈美	20	実践３
小松　令尚	20	実践３
羽田　　鋭	19	実践４
杣木　亮太	20	実践４

氏　　名	期	専攻・年
齋藤　智也	20	実践４
手塚　亮介	20	実践４
井口　　哲	19	実践４
名取　亮介	19	実践４
小宮山翔平	20	社会２
北野　雄大	20	社会３
木田　達也	20	社会３
横田　克己	20	社会３
中野　直輝	20	社会３
月岡　優介	19	社会４
那須絢太郎	20	数学３
北村　隼一	20	数学３
土屋　孝将	20	数学３
五味　大紀	20	数学４

氏　　名	期	専攻・年
上野なつみ	20	生活３
新井　雅菜	20	生活３
林　志桜里	19	生活４
池田　隼人	20	体育３
成瀬　貴心	19	体育４
永原　正裕	20	特支３
宮田巴都樹	19	特支４
花岡　慶祐	20	理科３
立野　真紀	20	理科３
酒井　友輔	20	理科３
小松　一成	19	理科４
ボーグオックハン	大　院	教育１

9．「信大 YOU 遊」20 周年記念シンポジウム・実行委員会（◎実行委員長　○副実行委員長）

◎山口直行（松本市立丸ノ内中学校）　○白井　敬（佐久市立岩村田小学校）

○那須紋子（三重県鈴鹿市立一の宮小学校）　渡辺一博（安曇野市立穂高西中学校）

新井清規（長野市立朝陽小学校）　知野真理子（信州大学大学院教育学研究科）

西澤俊輔（松本市山形村朝日村組合立鉢盛中学校）　両角孝之（塩尻市立塩尻西部中学校）

平林照世（長野市立川中島小学校）　小黒あかり（グリーン・ヒルズ小学校）

市川香織（千曲市立東小学校）　服部直幸（須坂市立森上小学校）

三石梨沙（中野市立中野小学校）　山田高弘（教育実践科学専攻４年）

岩瀬由依（言語教育専攻４年）　木田達也（社会科教育専攻３年）

畠山智晴（社会科教育専攻３年）　上野なつみ（生活科学教育専攻３年）

横田克己（社会科教育専攻３年）　安達仁美（教育科学講座）　土井　進（教育科学講座）

「信大 YOU 遊未来（CHANCE)」にご協力いただいている団体・個人のご紹介

学生が自己の純粋な立場に基づいて、主体的・自主的に実践している地域貢献活動が「信大 YOU 遊未来」である。この活動は、「信大 YOU 遊サタデー」(1994)、「信大 YOU 遊広場（PLAZA)」(2001)、「信大 YOU 遊世間（WORLD)」(2003)、そして「信大 YOU 遊未来（CHANCE)」(2012）へと受け継がれて、今年で記念すべき第 20 期を迎えることができた。今年度も地域社会の様々な団体・個人の皆様と連携・協働させていただいた。その際、大学側からお願いしていることは次の４点である。

① 学生が子どもの育成や世代間交流などのふれあい体験に参加できること。
② 学生が連携団体の事業に企画段階から参加させていただくこと。
③ 連携・協働は１年単位で更新し、自然体験や社会体験は通年の取り組みとすること。
④ 子どもの安全に関する責任は、連携・協働する団体に属し、学生の安全に関する責任は大学側に属すること。

これらの条件に照らして、両者の間で合意を形成しながら活動を進めていく。学生は、地域社会のご期待に応えられるように、汗と知恵を出す。

実践記録『「信大 YOU 遊未来」の教師教育学研究』が第 20 集となった。この１年間、学生は地域社会の皆様から陰に陽にご指導ご鞭撻を賜り、大きく成長することができた。この１年間お世話になった団体・個人の皆様を次に紹介し、深く感謝の意を表したい。

１．JA 長野中央会・JA ながの・長野市農業公社

茂菅の農地の斡旋、営農指導（苗代づくり・代掻き・田植え・稲刈り・はぜかけ・脱穀・餅つき・野菜の植え付けなど）、国際協力田運動への参加などの農業体験を通して、学生は掛け替えのない学びを修得している。大地を耕す“土づくり”をとおして、人格を形成する“人づくり”が行われている。学生にとっても子どもたちにとっても、茂菅の大地は第２のふるさととなった。

２．長野市茂菅地区農家

「信大茂菅 Farming Village」の水利用に当たっては、茂菅地区の４軒の農家から成る用水組合の輪の中に入れていただき、学生も朝 6 時のポンプ当番を 20 日間担当している。特に地元農家の林部信造・幸子ご夫妻には、農場と地域社会との調整役を果たしていただいている。

感　謝　状

JA ながの 営農指導部長 小池宏明 殿

貴組合は、教員養成における農業体験の重要性について深い理解を示され、平成 11 年度から 14 年間にわたって、茂菅地区の圃場を提供してくださいました。

この間に、3.000 名を超える学生が農場での実体験を通して、教師に求められる「臨床の知」を磨くとともに、農場の近隣の皆様、農場に参加された 500 名を超える児童の皆さん、そしてその保護者の皆様と楽しく交流し、掛け替えのない絆を結ぶことができました。

よってここに、貴組合の教員養成に果たされた多大な貢献に対し、深く敬意を表し感謝申し上げます。

平成 25 年 10 月 13 日

信州大学教育学部長　平野吉直

３．　長野市立湯谷小学校保護者の会「湯谷小子どもランド」

長野県短期大学と信州大学教育学部の学生が連携し、「湯谷小子どもランド」の皆さんと交流させていただいている。

４．　青木村教育委員会・麻績村教育委員会・須坂市教育委員会

村や市をあげて学生を迎え入れてくださっている。地域の皆様との交流を通して学生は伝統文化を学び、社会人基礎力を培っている。

５．長野市大岡支所・長野市立大岡小学校・大岡子どもプラザ

学生は大岡子どもプラザ（わらわら）や大岡小学校の大根プロジェクトに参加させていただいている。また、老人福祉センターを通学合宿の場として活用させていただいている。

６．千曲市教育委員会・北村善一様

重要文化的景観に指定されている「姨捨の棚田」での農作業体験が、千曲市教育委員会のご理解と地元の農家北村善一様ご夫妻のご協力によって今年度から始まった。地元の小学生から高校生までが参加し、棚田での米作りに汗を流した。

長野市が大雪に見舞われた平成26年2月8日(土)14時から、図書館2階にて、土井進先生の最終講義が行われました。内容は、教師を目指している私たちに語りかける〈「信大YOU遊」の誕生秘話とその精髄〉でした。先生のご了解を得て、「思い出・想い」として「講義の要旨」を掲載します。　（第20集編集委員長 横田克己）

「思い出・想い」

「信州大学における教員養成の実践研究」

教育科学講座教授　土井　進

1．碓氷峠を越えて、いざ、信州へ！

今から22年前の平成4年（1992年）3月、トラック2台に家財道具一切を積み込んで川越から信州に向かった。碓氷峠のつづらおりの山道を上り詰めると、右手に浅間山の雄姿が目に入ってきた。「おお、ここが信州か」と思うと、緊張感が全身に漲った。

信州は、教育にとりわけ力が入っている土地柄である。縁もゆかりもないこの地で教員養成の使命を授けられたことの重大性を感ぜずにはおれなかった。腰掛的な気持ちでは到底任が務まらないと思い、本籍を長野市に移し、名実ともに長野県民となった。お茶の水女子大学附属中学校、同大学文教育学部（非）講師から信州大学助教授として教育学部に赴任するに当たって、お茶の水女子大学の教授が、次のように励ましてくださった。

「あなたはお茶の水にいるより、「信州教育」の地で本気で教師になろうと志している学生たちの教員養成に携わる方に意義がある。「信州教育」という伝統があるから仕事は大変だと思うが、あなたは「実践」で来ている人だから、「理論」の人には負けません。じっと聞いていなさい」と。

この力強い言葉を支えにして、私の信州大学での実践が始まった。

2．「こんな授業、必修でなければ出たくありません！」信大生からの先制パンチ

中学校教育現場から大学教員として着任した私に与えられた仕事は、「教育実習事前事後指導」という1単位の教職科目であった。信州大学で平成5年度から初めて開設され、全学部生の必修科目であったため、休業土曜日に開講された。第1回目の授業を終えた私のところへ、10人ほどの学生がつめより、次のように抗議した。

「こんな授業、必修でなければ出たくありません。この授業はいかに教育実習をうまくやるかのノウハウを教え込むためのものですか？　もっとしっかりした内容のある授業を充実させてくれ。今までの教育法などは一体何の役に立つんだ。矛盾だらけだぞ！」

この痛烈な学生の訴えは私の胸にグサリと突き刺さり、寝ても覚めても離れなかった。この声に真摯に対応していく以外に打開の道はない。そう覚悟して、抗議した学生一人ひとりにこの授業の目的・意義について手紙で返事を書いた。そして、とうとう325名全員に手紙を書くことになった。

大学の授業内容に抗議した真剣な学生たちの熱い議論の中から、やがて文部科学省を動かし、全国の大学の教員養成カリキュラムを改革する源流となった「信大YOU遊サタデー」平成6年度（1994）が呱々の声を挙げたのである。

3．「信大YOU遊」の精髄は、学生の最高の主体性・自発性・責任感

－「やりたい人が　やりたい事を　やりたいようにやる！」－

学生たちが、内に教育者としての自己実現をめざす強い志を抱き、外に信州の大地を想う郷土愛を抱いて、主体的・自発的に取り組んでいる「信大YOU遊サタデー ⇒ 広場 ⇒ 世間 ⇒ 未来」が、平成25年（2013）8月10日に169名が参加し、ホテル信濃路において20周年記念シンポジウムを開催した。信州の教育風土に学びながら、先輩から後輩へと学生たちが熱い友情の絆で結ばれてきたことに、私は心からエールを贈りたい。

「信大 YOU 遊」のそもそもの発足の動機は、学生自身の要求から生まれたものであった。

① 教育実習を終えた学生たちが感じた不満と不安であった。

② もっと子どもたちと触れあって、子どもたちとの関わりの在り方について実践的に学びたい。

③ 教育実習を終えてこのまま卒業したのでは、とても不安である。

このような不満と不安が学生の内面にあることを、私は鋭く感じ取った。学生時代の一番大事な学びとして、彼らが渇望していることは、子どもとの人間対人間の、心と心のふれ合いである。このことを感得した私は、何としても学生たちのこの願いを叶え、実現してやりたいと強く決意した。そして、その仕事なら、中学校教員として荒波の中を 14 年間生きてきた私には十分できることであると確信できた。否、学生の学びへの欲求、自己実現への渇望をしっかりと捉え、それに応えていくことこそ、信州大学の教員に課せられた使命であると自覚した。

こうして学校週五日制時代の大学キャンパスに子どもたちを迎え、学生たちが思う存分子どもとふれ合うことのできる「信大 YOU 遊サタデー」が実現したのである。そして、20 年後の「信大 YOU 遊未来」は、学生が青木村・麻績村・長野市大岡・長野市茂菅・長野市湯谷・須坂農業小学校・千曲市姨捨の棚田・福島市愛育園・長野西高校通信制等に出向いて、地域のなかで子どもたちと触れあい学ぶという、地域連携プロジェクトに発展している。学生たちが地域社会と協働し、子どもたちの成長のために「ずく」を発揮している姿こそ、「信州教育」の精髄を現代に継承し、発展させているものであると言っても決して過言ではあるまい。

全国各地から教育者としての人生行路を求めて、信州大学教育学部に集った学生諸君が、敢えて困難な教育現場に身を投じ、艱難辛苦をエネルギー源として大成されることを切に願っている。荒れ狂う怒涛の教育現場こそ、学生時代に不屈の教育者魂（師魂）を培った君たちの使命の場である。

4．「信州教育」の実像は、学び続ける教育者群像

林芋村（1886-1929）「深雪せる　野路に小さき　沓の跡　われこそ先に　行かましものを」

木村素衛（1905-1946）「底ひなく　深き愛あり　ますらをよ　命の限り　努めざらめやも」

竹内隆夫（1917-2010）は、長野県師範学校を昭和 12 年（1937 年）に卒業。大乗仏教の慈愛の哲学を清掃活動の実践の中に反映し、迷惑感覚を育んで「意志力」を伸ばし、他者への気働きを通して「情操」を陶冶し、気付きの力で「創造力」を開発する。そして、掃除の実践を通して人や物への「感謝」の念を表現できる真っ正直な人物「真人」へと人格を形成する「自問清掃」を開発した。

5．「実践的指導力」とは「ずく」（尽）を発揮する底力

「実践的指導力」という言葉が初めて公的に用いられたのは、1987 年（昭和 62 年）の教育職員養成審議会答申においてであった。2012 年（平成 24 年）の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」においては、16 回もこの言葉が使用されている。私が「信大 YOU 遊サタデー」による教員養成の根拠をどこに求めるかに悩んだ時に巡り合ったのが、この言葉であった。私は感動した。そして、「実践的指導力」とは「ずく」（尽）を発揮する底力のことであると納得したのであった。これだ！私が探究すべき課題はこれだったのだ！使命感、責任感、教育的愛情。学生が渇望しているものは、まさしくこれだ！これは教えごとで伝えられるものではない。学生が実践を通じて自得していく以外にない。学生が大学において本来求めているのは、自己の生涯を懸けて悔いなき道に出会うことである。この一生を懸けて惜しくない道は教育者としての道であることを再確認したいのだ。己の使命を自らの命で実感したかったのだ。そのお手伝いをすることが私に与えられた信州大学における使命なのだ。

物を計るには「もの＋さし」物指。人物という者を計るには「こころ＋さし」「志」。教育者になろうとする高い「志」を一層堅固にする実践。それが「信大 YOU 遊未来（CHANCE）」の真髄である。

編集委員会規定

平成18年 3月16日制定
平成23年 1月10日改定
平成25年 1月16日改定
平成25年12月25日改定

第1条　編集委員会の設置

「信大YOU遊未来」の実践記録を、学術的価値のある教師教育学研究として高めていくために編集委員会を設置する。

第2条　編集委員会の構成

「信大YOU遊未来」の運営委員、各プラザ長、「YOU遊フェスティバル」の実行委員、その他運営委員会において必要と認めた者によって編集委員会を構成する。

第3条　編集委員長

編集委員長、副編集委員長は委員の互選によって決める。

第4条　編集方針

（1）各プラザの実情に即した編集を工夫する。

（2）学生の視点だけでなく、必要に応じて広く地域社会の協力者や専門家の意見も取り入れる。

（3）第1次原稿の提出は、平成25年12月25日とする。

第5条　執筆要綱

（1）「信大YOU遊未来」の各プラザにおける1年間の実践や「YOU遊フェスティバル」における講座の開設によって、どのような実践的指導力が身についたのかが分かるように、具体的に記述する。

（2）実践的指導力とは、教師に求められる資質能力のことである。本実践記録においては、授業の3要素である「子ども」「教材」「教師」のそれぞれに3つの適性を配置して、9つの側面から実践的指導力を捉えようとしている。

Ⅰ．子ども（幼児・児童・生徒への共感的理解、人間力、Friendship）	
適性1	子どもに教育的愛情を捧げること。友への感謝の念と友情を体験すること
適性2	幼児・児童・生徒の成長・発達を信じて待つこと
適性3	他者のありのままを受け入れ、心をつなぐこと
Ⅱ．教　材　（各教科等の教材研究、学問力、Scholarship）	
適性4	各教科等の専門の学問を研究すること
適性5	地域の人々がどういうことを求めているかを捉えて教材を開発すること
適性6	子どもがどういうことを楽しいと思っているかを傾聴し、活動を企画・実践すること
Ⅲ．教　師　（教職への深い使命感と強い志、教師力、Educatership）	
適性7	他者に尽くすことを我が喜びとすること。他者への尊敬・畏敬の念をもつこと
適性8	内発的な意思と判断に基づいて、主体的に実践すること
適性9	教育者としての使命感に燃えること。教職への志をたてること

おわりに･･･　どうぞ、よろしく

土井　進（「信大 YOU 遊未来」指導教員）

「信州教育」の精髄に通底する、「YOU 遊」を実践する学生諸君の熱い教育者魂に触発されながら、私は信州大学で「師弟同行・師弟共育」の 20 年を歩んでくることができました。感動と歓喜に満ちたあふれた歳月に、衷心より感謝申し上げます。

いうまでもなく「YOU 遊」実践は、授業科目ではありません。また、サークル活動や同好会活動でもありません。ましてやアルバイトでもボランティア活動でもありません。余程の覚悟と情熱がなければ、1年間にわたって正副運営委員長や正副プラザ長、正副講座長などの重責を担い、責任を果たし切ることはできません。単位にもならず、お金にもならない「YOU 遊」の取り組みに、自らの意志で主体的に参加し、同僚と連帯して、地域の子どもたちを笑顔にしたい、一緒に思いっきり遊びたいという純粋な思い、初心にこそ、私は教育者としての使命感や教育的愛情が開示されているものと確信しています。

三重大学名誉教授・岐阜聖徳学園大学名誉教授、齋藤昭先生（1931-2013）は、『「信大 YOU 遊」20 周年記念誌』に寄せた絶筆において、「その火を絶やしてはならない。信大の 21 世紀教育への使命として継承、発展させることである」「学生諸君は誇りをもって新しい時代の教育を拓いていくことを心より期待する」「信大が誇りをもって 2014 年 4 月以降もこの教育を生かしていくことである。それが先生への真の餞けでもある」と書き残してくださいました。

2014 年 2 月 5 日の教授会において、1年間に限り第 21 期「信大 YOU 遊未来」の「学生指導」担当の特任教授が認められました。これからの 1 年間に後継者にバトンタッチできるように「ずく」を発揮してまいる決意です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【編集後記】

歯医者に行きました。知覚過敏でした。老化でしょうか。若干の焦りを感じつつ、『「信大 YOU 遊未来」の教師教育学的研究』第 20 集の編集をしていました。集中力のない私はふいに「YOU 遊」の活動に初めて参加したときのことが懐かしくなり、写真をあさりました。キャンプファイヤーや登山を楽しみ、夜更けまでみんなで話し、キンキンに冷えたスイカをほうばる姿が鮮明に残っていました。当時の私は、ただただ純粋に活動を楽しんでいました。13 年前のことです。5 泊 6 日、とあるキャンプ場で当時の YOU 遊の方々が企画してくださったキャンプで、かけがえのない経験をさせていただきました。小学校 3 年生のときでした。縁あって信州大学教育学部に入学し、大学 3 年になってからは「YOU 遊」の副運営委員長に携わらせていただき、気づけば引継ぎを迎えようとしています。副運営委員長の最後の仕事として、20 年目の記念すべき年にこの実践記録の編集委員長を務めさせていただけたことを本当にうれしく思います。この実践記録によって、「YOU 遊」の魅力が、少しでも伝わりましたら幸いです。

最後になりましたが、各正副プラザ長の皆さん、「YOU 遊未来」に参加してくださる学生の皆さん、出版社の春日さん、土井先生、地域の方々、保護者の皆さん、そしてこの実践記録に関わってくださったすべての皆様にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

2014 年 1 月 21 日　　編集委員長　横田克己

表紙解説

今年は、表表紙と裏表紙を２人でアイデアを出し合いながら描きました。今までの表紙と違う趣で「YOU 遊」の活動を表現したいと思い、取り組みました。ポップで親しみやすいだけでなく、「YOU 遊」の活動の一瞬一瞬の思い出が、「YOU 遊」の歴史の１ページになっていく、という思いを込めて書きました。今後、「YOU 遊」は大きく変わっていくように感じますが、“子どもをど真ん中に”は変えずに頑張ってほしいと願っています。　石川真人(理数３年)・横田克己(社会３年)

〈第 20 集編集委員会〉（◎委員長 ○副委員長）

（委員長・副委員長名以下五十音順）

◎横田克己（社３）	○畠山智晴（社３）	新井　雅菜（生３）
飯島香純（実３）	池田隼人（体３）	上野なつみ（生３）
太田　咲（言３）	木田達也（社３）	北村　隼一（数３）
北野雄大（社３）	小塚尚士（野３）	五味　大紀（数４）
酒井友輔（理３）	坂田好恵（野４）	髙木　淳子（言３）
土屋孝将（数３）	永原正裕（特３）	那須絢太郎（数３）
成瀬貴心（体４）	花岡慶祐（理３）	室橋　美咲（生３）
		土井　　進（教員）

学部長裁量経費
平成 25 年度教員養成学部フレンドシップ事業　報告書
授業科目名：「社会教育演習」

「信大 YOU 遊未来」の教師教育学研究　第 20 集

2014（平成 26）年３月 25 日印刷 ©
2014（平成 26）年３月 28 日発行

編　　集　第 20 集編集委員会
発 行 人　土　井　　進
E-Mail：doisusm@shinshu-u.ac.jp
発　　行　信州大学　教育学部　教師教育学研究室
〒380-8544　長野市西長野６－ロ
TEL 026-238-4260　FAX 026-238-4260
制　　作　オフィス春日
E-Mail：xmbxp210@ybb.ne.jp

<付>　信州教育の精髄と通底する「信大YOU遊未来」の精神　（抄録）

信州大学教育学部同窓会 第26回通常総会 記念講演　（平成25年8月11日　於ホテル信濃路）

1．平成6年6月6日からのスタート　第1期　山口直行

当時、第3学年次に附属小中学校で行われた6週間の教育実習は充実していました。指導案や教材作りに必死になって取り組み、子どもたちと共に授業を創りあげたあの喜びや感動は一生忘れはしないでしょう。そのころ教育現場に目を向けてみると課題が山積していました。いじめ問題が頻繁に報道され、長野県では不登校者数が全国で上位に、高校では中途退学者が減らない状態です。そうしたなか、学校は五日制時代を迎えました。休みになる土曜日に子どもたちを受け入れる場も必要としていました。この課題を解決していくためには確かな実践的指導力を身につけていく必要がありますが、教育学部で学ぶ4年間（120週）での教育実践の場は、6週間の教育実習だけです。これでは実践的指導力を高めるレベルには達しません。教育実践の場を学生の手で創ろう。それが地域社会への貢献につながれば･･･。そこで始まったのが「信大YOU遊サタデー」です。平成6年6月6日に第1回目の実行委員会を立ち上げました。「6」並びの「無」からのスタート。どれだけ講座を開いたらいいか。学生スタッフは何人必要か。子どもたちは集まるか。安全面への配慮は･･･。不安はありましたが、何もないところから新たな場を創り出す喜びを感じながら活動を進めました。そして、いよいよ当日。私の講座「けん玉で遊ぼう」には2名の子どもが来てくれました。

2．地域・子どもたちと歩んだ20年　第2期　角田正和

私は「YOU遊サタデー」に主に事務方のメンバーとして参加。ＩＴ技術の発達した現在とは異なり、当時は講座案内や参加者募集は新聞社等のマスメディアに依頼する他ありません。参加者受付や参加証発送、活動後のアンケート調査実施等は往復はがき等の郵便で行いました。そのため事務作業量は膨大。学部の講義が終わると教育実践センターに詰め、日々作業を夜遅くまでしていたことを今でも覚えています。活動2年目で認知度も低く、長野キャンパスでこの催しが行われていることを知る方も少ない中、県内各地から「YOU遊」に参加してくれた子どもたち、送り出された保護者の方々、講座開催に支援していただいた地域の方々など、「YOU遊」の活動を育み支えてくださったサポーター層の厚さは「教育県長野」の風土あってのものと改めて感じています。

この活動が20年も持続し活動範囲を広げ発展したことは、立ち上げ当初の様々な困難を垣間見てきた者の一人として大変な喜びです。受け継いできてくれた後輩たちの教育にかける情熱が我々と同じベクトルを維持している事の何よりの証であると心強く思います。学校現場では団塊世代の大量退職を迎え「YOU遊」初期のメンバーは中堅教員となり、学校・学年のリーダーとして全国各地で活躍していると聞いています。「YOU遊」で学び育った若い先生方、今後は信州大学で学んだ同志として現場でタッグを組み、教育実践を積み重ね、共に研鑽を積んでいきましょう。20周年は一つの通過点として、今後とも「YOU遊」が未来の教員志望学生の学びの場であり続けることを願っています。

3．「YOU遊」は実践教師訓練プログラム　第8期　小林則雄

私は52歳で信大に入学し教師になった。その期間わずか11年。その基礎を築いたのは「信大YOU遊」での活動だった。長いサラリーマン生活の中で培った色々な体験、またボランティアで得た経験もその素材としてあった。教職は目前の児童・生徒だけでなく保護者やPTAを通じての地域までもが対象になる。「YOU遊広場」で不登校児童を対象にした「興譲館」活動や心の教室相談員などを体験。いずれも何もない所から「なにかをやりたい」という気持ちでスタートしたプロジェクトだった。中年のおっさんからすれば「この位でいいんじゃぁないの･･･」の気持ちもなくはなかった。がしかし、若さとはすばらしい。時間より心の納得感の方が優先するのだ。延々と続く論議また論議。会社ならとっくに上司の判断で論議は打ち切られているはずなのに。夏のキャンプの下見に出かけた時にはうっすらと雪が積もっていた。未経験ゆえの慎重さの表れである。活動の対象には子どもたちの他に一緒に参加する保護者や場を提供する地域があるのだ。これは教育実習にはない教育実践そのもの。失敗の苦さも成功の感涙もすべて吾の手の中にあるのだ。毎年、未知との遭遇の7年間の教員生活。絶体絶命の危機的状況もあった。逆にお祭りのような歓喜の時もあった。振り返ってみたらこの「YOU遊」での体験が、教員生活のバックボーンになっていたことに気づいた。実に得難い4年間の体験。土井先生、林部さん、地域の皆様に御礼を申し上げます。

4．どうしてYOU遊の学生は涙を流すのか　第8期　寺坂桂子

東京出身の私が信州大学入学を決めた決定打は、オープンキャンパスで見た「YOU遊」スタッフ募集の広告でした。その後の学生生活には、いつも「YOU遊」がありました。農場・プレーパーク・全国フレンドシップ活動など、楽しく活動し多くを学びました。

四年生の時に教育学部グラウンドのプレーパークに埋めたタイムカプセルを、今年3月、10年ぶりに発掘しました。当時の子どもたち（現在15歳～25歳）とその親12人が集まってくれました。あの頃の活動は、参加者の彼らにとっても良い思い出だったのだと実感、大変嬉しかったです。また、第1回「YOUフェス」の打ち上げでは、みんなで涙を流しました。全国フレンドシップ活動の他大学生に、どうして信大生は涙を流すことができるのかと問われたことがあります。「YOUフェス」はたった半日の活動だけれども、子どもたちに喜んでもらおうと真剣に考え話し合いぶつかり合い、1か月以上の準備。それが子どもたちの笑顔につながった喜びやそこで得た仲間との絆が感動の涙となったのです。この充実感は全国の教員養成系学生に自慢できるものでした。そして私の教員生活の基盤にもなっています。「YOU遊」の活動が今後も続き、「YOU遊」で育った後輩たちが全国の教員になり、一緒に切磋琢磨していけることを楽しみにしています。

5．土井進先生の後ろ姿　第14期　鈴木亮子

私は土井先生の後ろ姿に出会って衝撃を受けた。茂菅農場に使う堆肥を作るために、生協の生ごみを一輪車で運搬しておられる姿だった。私はこんなことをしている大学教授がおられることに本当に驚いた。それから私は大地と関わることに熱心で誠実に学生に接してくださる先生のもとで学びたいと思い「YOU遊世間」の活動に積極的に取り組んだ。卒業前、青木村での第9回「全国フレンドシップ活動」in信州にも参加。先生から学んだことは、周りにいる人が幸せになるにはどうしたらよいか、自分自身が幸せになるにはどうしたらよいかということ。志を高く持つことや言葉の持つ力の大きさなど多くのことを学んだ。私は今、千葉県八街市立実住小学校3年生を担任。教員5年目。学生時代に学んだ土地を離れても空をしっかり見上げて頑張れるのは、共に学んだ「YOU遊」の友が全国各地にいるからだ。学生が実体験を学べる「YOU遊」を支えておられる土井先生に本当に感謝している。

「臨床の知」

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした